

村下遺跡 9

— D 地点・F 地点の調査 —

大野城市文化財調査報告書 第225集

2025

大野城市

むら した 村下遺跡 9

— D 地点・F 地点の調査 —

大野城市文化財調査報告書 第225集



2025

大野城市

序

大野城市は福岡平野の一角にあたり、北側に大城山、南側に背振山系が広がる縦長の市域を有しており、その形はよくヒョウタンに例えられます。

今回報告する村下遺跡は、筒井1丁目から2丁目に広がり、遺跡の南には筒井の井戸が位置しています。これまでの調査で、弥生時代後期を中心とした集落遺跡が確認されており、大野城市の代表的な弥生時代の遺跡の一つです。本書で報告するD、F地点は、共同住宅建設を契機に調査が行われたものです。調査では弥生時代と江戸時代を中心とした遺構・遺物が見つかり、遺跡の性格を考える上で貴重な成果となりました。

村下遺跡の所在する筒井はもともと山田村の一部に含まれていました。山田村は、御笠川左岸の山田、筒井に加え御笠川右岸の中も含む範囲でしたが、江戸時代初期以降は山田村、筒井村、中村として把握されていることがわかっています。村下遺跡F地点で出土した江戸時代の遺構や遺物は、これらのうち筒井村周辺の様相を具体的に知る上での一つの成果といえるでしょう。また、村下遺跡の西側を日田街道が通っておりますが、間の宿であった雑餉隈遺跡とも一部時期が重なって遺跡が形成されていることから、街道沿いの村落の景観を考えるうえでも今後研究が進められることが望まれます。御笠の森遺跡や雑餉隈遺跡をはじめ周辺の中世から近世にかけての遺跡の様相も具体的に明らかになりつつあります。本書が近世の大野城市の歴史の解明に寄与することを期待しています。

最後になりましたが、事業者をはじめ地元の方々にご協力とご理解をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

令和7年3月31日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した村下遺跡 D 地点および F 地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大野城市教育委員会が実施した。
3. 整理作業は、大野城市の単費事業として実施した。
4. 本書における遺構の分類番号は、S A：柵・土塁・堀、S B：掘建柱建物、S C：竪穴住居跡、S D：溝、S E：井戸、S F：道路状遺構、S H：広場、S J：甕棺墓、S K：土坑、S P：ピット、S R：祭祀遺構、S T：古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、S X：性格不明遺構とした。
5. 発掘調査は徳本洋一が担当した。
6. 遺構写真は、調査担当者が撮影した。
7. 遺物写真は、写測エンジニアリング株式会社（牛嶋茂）が撮影した。
8. 遺構図面の作成は、大野城市教育委員会が行った。
9. 遺構図の方位は磁北を表す。
10. 遺物実測図は、小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・眞田萌世・津田りえ・仲村美幸・氷室優・松本友里江が作成した。
11. 製図は、小嶋が作成した。
12. 拓本は、小畑・篠田・氷室・松本が作成した。
13. 遺物観察表は、古賀が作成した。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の 1 / 25,000 地形図『福岡南部』を使用した。
15. 発掘調査で出土した遺物の分類基準は、以下の文献を参考とした。
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編一』
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10 周年記念—』
16. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市が管理・保管している。
17. 本書の執筆・編集は石川健が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の結果	
1. 村下遺跡D地点の調査	5
(1) 調査の概要 (2) 遺構と遺物 (3) 小結	
2. 村下遺跡F地点の調査	13
(1) 調査の概要 (2) 遺構と遺物 (3) 小結	
IV. まとめ	61

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	4
第2図 村下遺跡と調査地の位置図 (S=1/5,000)	5
第3図 村下遺跡D地点遺構配置図 (S=1/200)	6
第4図 村下遺跡D地点SC01実測図 (S=1/60)	7
第5図 村下遺跡D地点SC01、ピット出土遺物実測図 (5はS=1/2、その他はS=1/3)	8
第6図 村下遺跡D地点SC02実測図 (S=1/60)	9
第7図 村下遺跡D地点SC03実測図 (S=1/60)	10
第8図 村下遺跡F地点遺構配置図 (S=1/250)	12
第9図 村下遺跡F地点I号貯蔵穴実測図 (S=1/60)	14
第10図 村下遺跡F地点I号貯蔵穴出土遺物実測図 (S=1/3)	15
第11図 村下遺跡F地点SK01実測図 (S=1/60)	16
第12図 村下遺跡F地点Ⅱ区SD01・A～E区、Ⅰ区F区実測図 (S=1/160、土層図S=1/60)	17
第13図 村下遺跡F地点SD01上層出土遺物実測図 (S=1/3)	18
第14図 村下遺跡F地点SD01下層、その他の出土遺物実測図 (S=1/3)	20
第15図 村下遺跡F地点SD02出土遺物実測図 (S=1/3)	21
第16図 村下遺跡F地点SD03出土遺物実測図 1 (S=1/3)	22
第17図 村下遺跡F地点SD03出土遺物実測図 2 (S=1/3)	24
第18図 村下遺跡F地点SD05出土遺物実測図 (S=1/3)	25
第19図 村下遺跡F地点SX01出土遺物実測図 (100はS=1/4、その他はS=1/3)	26
第20図 村下遺跡F地点SX02出土遺物実測図 (S=1/3)	26
第21図 村下遺跡F地点SX03出土遺物実測図 1 (114はS=1/4、その他はS=1/3)	28

第22図	村下遺跡F地点SX03出土遺物実測図 2 (S=1/3)	30
第23図	村下遺跡F地点SX03/P16出土遺物実測図 (S=1/3)	32
第24図	村下遺跡F地点SX04出土遺物実測図 (S=1/3)	33
第25図	村下遺跡F地点SX05出土遺物実測図 1 (S=1/3)	35
第26図	村下遺跡F地点SX05出土遺物実測図 2 (190はS=1/4、その他はS=1/3)	37
第27図	村下遺跡F地点SX05出土遺物実測図 3 (S=1/3)	38
第28図	村下遺跡F地点SX05出土遺物実測図 4 (S=1/3)	39
第29図	村下遺跡F地点SX05出土遺物実測図 5 (247、248はS=1/6、その他はS=1/3)	41
第30図	村下遺跡F地点SX05出土遺物実測図 6 (S=1/6)	43
第31図	村下遺跡F地点SX06、07、08出土遺物実測図 (S=1/3)	44
第32図	村下遺跡F地点SX09、10出土遺物実測図 (S=1/3)	46
第33図	村下遺跡F地点ピット出土遺物実測図 1 (287、307はS=1/2、その他はS=1/3)	47
第34図	村下遺跡F地点ピット出土遺物実測図 2 (320はS=1/2、その他はS=1/3)	50
第35図	村下遺跡の各調査地点と周辺の微地形 (S=1/4, 000)	61

表 目 次

表 1	村下遺跡D地点出土遺物観察表	52
表 2 ～ 10	村下遺跡F地点出土遺物観察表①～⑨	52 ～ 60

図 版

図版 1 (1) 村下遺跡D地点調査区全景 (北西より)	図版 3 (5) 1号貯蔵穴土層(南西より)
(2) 調査区全景：SC01周辺(南西より)	(6) 1号貯蔵穴完掘状況 (南東より)
(3) SC01(北西より)	(7) SK01(北西より)
図版 2 (1) SC02(西より)	図版 4 (1) SD01 A-B区間土層(西より)
(2) SC03(西より)	(2) SD01 C-D区間土層(西より)
(3) SC01炉断面	(3) SD01 D-E区間土層(西より)
(4) SC03遺物出土状況	(4) SD01 F区土層(西より)
(5) 村下遺跡D地点出土遺物	(5) 村下遺跡F地点出土遺物 1
図版 3 (1) 村下遺跡F地点Ⅰ区全景(東より)	図版 5 村下遺跡F地点出土遺物 2
(2) 村下遺跡F地点Ⅱ区西部(東より)	図版 6 村下遺跡F地点出土遺物 3
(3) 村下遺跡F地点Ⅱ区中央部 (北より)	図版 7 村下遺跡F地点出土遺物 4
(4) 村下遺跡F地点Ⅱ区東部(西より)	図版 8 村下遺跡F地点出土遺物 5

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

(1) 村下遺跡D地点の調査にいたる経緯

村下遺跡D地点は大野城市筒井2丁目506番1に所在するが、ここで共同住宅建設の計画があり、平成5年11月に埋蔵文化財の有無に関する照会があった。そのため同年11月29日に試掘調査を行った。試掘調査では、地表下60cmほどの黒褐色土の下位で遺構検出を行い、遺構を確認した。そのため、本調査が必要であり発掘届の提出を要請し、調査を行うにいたった。開発予定面積は681㎡で、そのうちの400㎡を調査対象とした。

(2) 村下遺跡F地点の調査にいたる経緯

村下遺跡F地点は大野城市筒井2丁目533番の一部、534番1の一部に所在する。ここで共同住宅建設の計画があり、平成12年9月に埋蔵文化財の有無に関する照会があった。そのため、公共施設等に関する協議書を提出の後、同年10月18日に試掘調査の受付を行い、同年10月21日に試掘調査を行った。対象地に2ヶ所のトレンチを設定して調査した。試掘調査では、地表下に30cmの耕作土、その下位に25cmの灰褐色粘質土が確認された。この灰褐色粘質土の下位で遺構が確認されたため、本調査を行うこととなった。開発予定面積は1750㎡で、そのうち750㎡を調査対象とした。

2. 調査体制

(1) 平成7（1995）年度（村下遺跡D地点調査）の体制

大野城市教育委員会

教育長	堀内 貞夫
教育部長	安河内 一登（4～5月） 香野 信儀（6月～）
社会教育課長	赤星 健彦
課長補佐	中村 茂
文化財担当係長	高橋 裕司
主 査	吉田 悟（庶務担当） 舟山 良一
主任技師	向 直也 徳本 洋一（調査担当）
技 師	石木 秀啓
嘱 託	岸野 和子

(2) 平成12(2000)年度(村下遺跡F地点調査)の体制

大野城市教育委員会

教育長	堀内 貞夫
教育部長	青木 克正
社会教育課長	片岡 猛
文化財担当係長	舟山 良一
主 査	徳本 洋一(調査担当)
主任技師	石木 秀啓 丸尾 博恵
技 師	林 潤也
主 事	大道 和貴
嘱 託	元吉 知子

(3) 令和6(2024)年度の整理・報告作業体制

市 長	井本 宗司
地 域 創 造 部 長	日野 和弘
大野城市心のふるさと館	
館 長	赤司 善彦
文化財担当課長	石木 秀啓
係 長	林 潤也 早瀬 賢
主任主事	下川 みお
主任技師	龍 友紀 山元 瞭平
会計年度任用職員	澤田 康夫 石川 健 山村 智子 深町 美佳
	尾川 絢香 慶田 芳一(10月から) 丹 宣幸(9月まで)
	藤田 香 井之口 彩子 西村 恭子
	仲村 美幸 小嶋 のり子 津田 りえ 松本 友里江
	氷室 優 古賀 栄子 篠田 千恵子 小畑 貴子
	眞田 萌世

Ⅱ．位置と環境

大野城市は福岡平野の南に位置し、南北に細長く中央部でくびれた形をしている。地形は北東部に三郡山塊周縁部の井野山、乙金山、王城山が連なる。また、三郡山塊・宝満山を源とする御笠川が市域中央部を北西に流れ牛頸川と合流した後、博多湾に注ぐ。この御笠川左岸の沖積平野に村下遺跡は位置する。

遺跡周辺の様相をみると、旧石器時代は釜蓋原遺跡・雉子ヶ尾遺跡・松葉園遺跡など市北部や出口遺跡・横峰遺跡などで遺物が確認されており、北部の乙金山・大城山や南部の牛頸山からのびる丘陵地帯が主たる生活の場であったことがわかる。

縄文時代では、草創期の遺跡は市内で確認されていないが、早期には乙金山・四王寺山麓の薬師の森遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡等で押型文土器が出土する。また、平野微高地上にも石勺遺跡が分布し、平野部まで活動範囲が徐々に広がっていることがわかる。

弥生時代には、市東北部の御陵前ノ椽遺跡や塚口遺跡、中・寺尾遺跡で前期の甕棺墓・土坑墓・木棺墓が調査されており、市南部の丘陵地でも前期後半の墓地が調査されている。集落跡は川原遺跡、仲島本間尺遺跡や薬師の森遺跡などで確認されている。前期末頃には石勺遺跡など平野部で集落遺跡が増加する。これらの遺跡は中期を通じて営まれるが、石勺遺跡や瑞穂遺跡では墓地もみられる。市東北部の中・寺尾遺跡や森園遺跡でも集落と墓地が形成される。後期には市東北部や平野部の遺跡で中期以降継続して集落が営まれるほか、榎町遺跡や村下遺跡など新たな集落もみられる。

古墳時代には福岡平野や那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。市域では明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群で小円墳群が築かれる。集落は仲島遺跡や石勺遺跡、村下遺跡などの弥生時代後期以来の遺跡に加え、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡で確認される。中期は5世紀前半の笹原古墳の築造後、5世紀後半には古野古墳群等で群集墳の形成が始まる。集落遺跡は仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡等で確認されている。6世紀後半以降は群集墳が急増するが、市域でも月隈丘陵から乙金山山麓に善一田古墳群、王城山古墳群などが築造される。集落は仲島遺跡の他、薬師の森遺跡などで確認される。このうち仲島遺跡は、集落規模が大きく多数の掘立柱建物が確認されており拠点的な集落と考えられる。6世紀中頃以降牛頸窯跡群で須恵器生産が行われるが、乙金・四王寺山麓でも須恵器生産が始まり、薬師の森遺跡では鉄器や須恵器生産に関わる集落が形成される。その後7世紀中頃から後半にかけて市域で遺構や遺物の減少がみられる。

飛鳥・奈良時代に入ると、大宰府が成立し水城東西両門から官道がのびるが、井相田C遺跡、谷川遺跡などで官道側溝、池ノ上遺跡・御供田遺跡で盛土状遺構や土橋状遺構などが確認されている。また、市中央部畑ノ原遺跡等で集落が営まれる。9世紀になると周辺では集落が減少し、仲島遺跡も含め御笠川周辺の集落の多くがこの頃に廃絶する。また牛頸窯跡群も生産が衰退・終了に向かう。その後、本堂遺跡群や上園遺跡周辺で10・11世紀代に集落形成が活発になり、宝松遺跡、御笠の森遺跡などで11世紀以降集落が形成される。御笠の森遺跡などでは近世まで遺跡が継続する。



福岡市

1. 持田ヶ浦古墳群A群
2. 持田ヶ浦古墳群B群
3. 持田ヶ浦古墳群C群
4. 持田ヶ浦古墳群D群
5. 持田ヶ浦古墳群E群
6. 持田ヶ浦古墳群F群
7. 今里不動古墳
8. 堤ヶ浦古墳群
9. 影ヶ浦遺跡
10. 金隈遺跡群
11. 井相田B遺跡群
12. 井相田D遺跡群
13. 井相田C遺跡群
14. 麦野A遺跡
15. 麦野C遺跡
16. 南八幡遺跡群
17. 雑餉隈遺跡群

大野城市

18. 唐山古墳群

19. 乙金北古墳群

20. 唐山遺跡
21. 御陵古墳群
22. 御陵脇遺跡
23. 塚口遺跡
24. 御陵前ノ椽遺跡
25. 善一田遺跡・古墳群
26. 王城山遺跡・古墳群
27. 古野遺跡・古墳群
28. 原口遺跡・古墳群
29. 乙金竈跡群
30. 此岡古墳群
31. 松葉園遺跡
32. 森園遺跡
33. ヒケシマ遺跡
34. 中ノ寺尾遺跡
35. 花園遺跡
36. 薬師の森遺跡
37. 銀山遺跡
38. 原門遺跡

39. 雉子ヶ尾遺跡

40. 雉子ヶ尾竈跡
41. 雉子ヶ尾古墳
42. 釜蓋原古墳群
43. 笹原古墳
44. 金山遺跡
45. 釜蓋原遺跡
46. 仲島遺跡
47. 仲島本間尺遺跡
48. 川原遺跡
49. 御笠の森遺跡
50. 宝松遺跡
51. 村下遺跡
52. 雑餉隈遺跡
53. 松ノ木遺跡
54. 石勺遺跡
55. 原ノ畑遺跡
56. 後原遺跡
57. 御供田遺跡
58. 瑞穂遺跡

59. 国分田遺跡

60. 古賀遺跡

太宰府市

61. 成屋形古墳群・成屋形遺跡群
62. 裏ノ田竈跡
63. 裏ノ田古墳
64. 裏ノ田遺跡

春日市

65. 駿河A遺跡
66. 駿河B遺跡
67. 駿河D遺跡
68. 駿河E遺跡
69. 原ノ口遺跡
70. 先ノ原遺跡
71. 立石遺跡
72. 先ノ原春日公園内遺跡

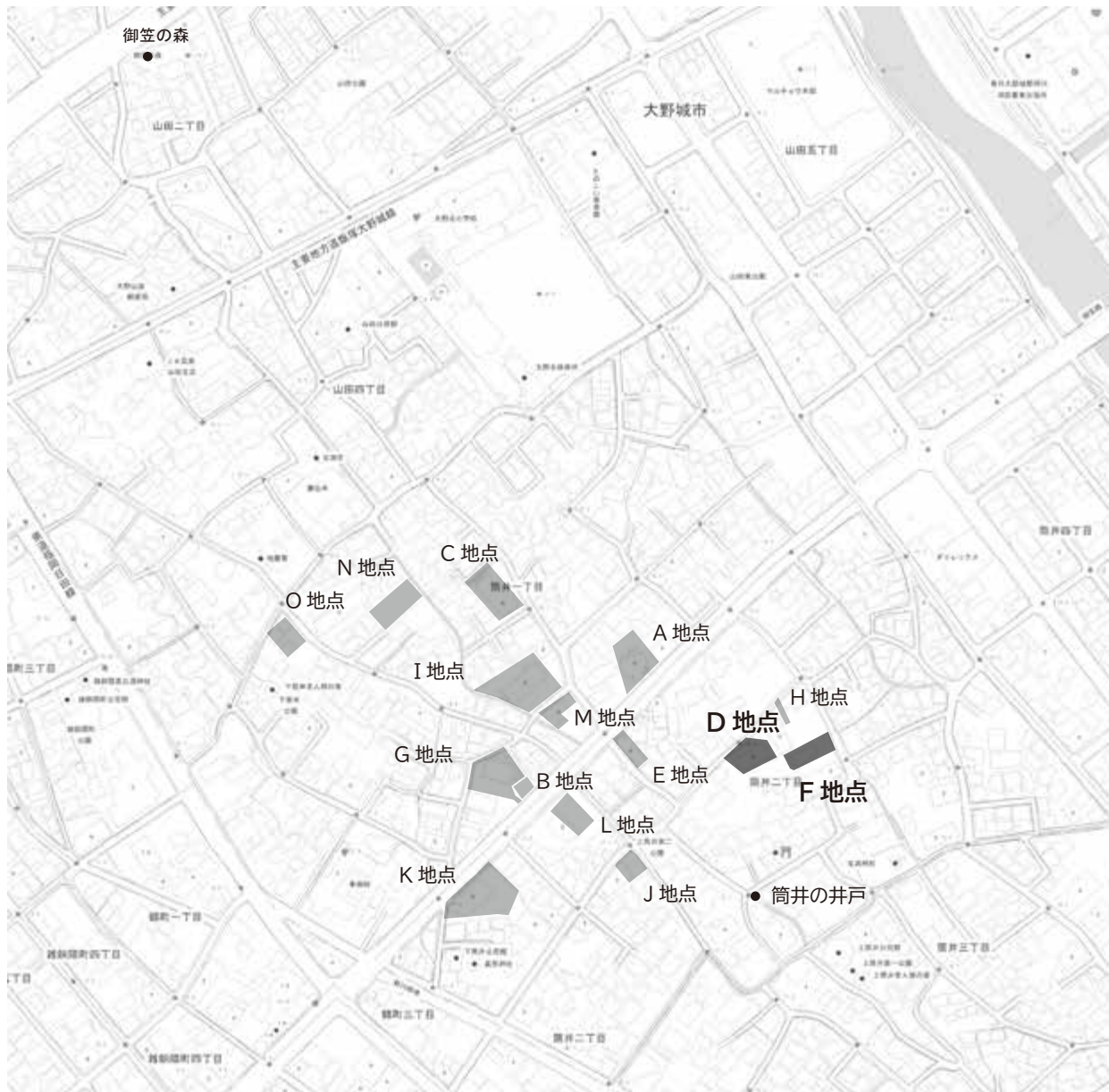
第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

Ⅲ. 調査の結果

1. 村下遺跡D地点の調査

(1) 調査の概要（第2・3図、図版1）

村下遺跡はこれまでA地点からO地点まで調査が行われている。村下遺跡D地点は大野城市筒井2丁目501-6に所在する。調査地は御笠川西岸の低位な河岸段丘上に位置する。現地表面の標高は16.8mで、南西方向に標高が高く、東に向かって標高が低くなる。周辺の標高からは、御笠川と調査地の間には略北西-南東方向に細い谷状の地形が入り込んでおり、現在もこの小谷状の低いところ



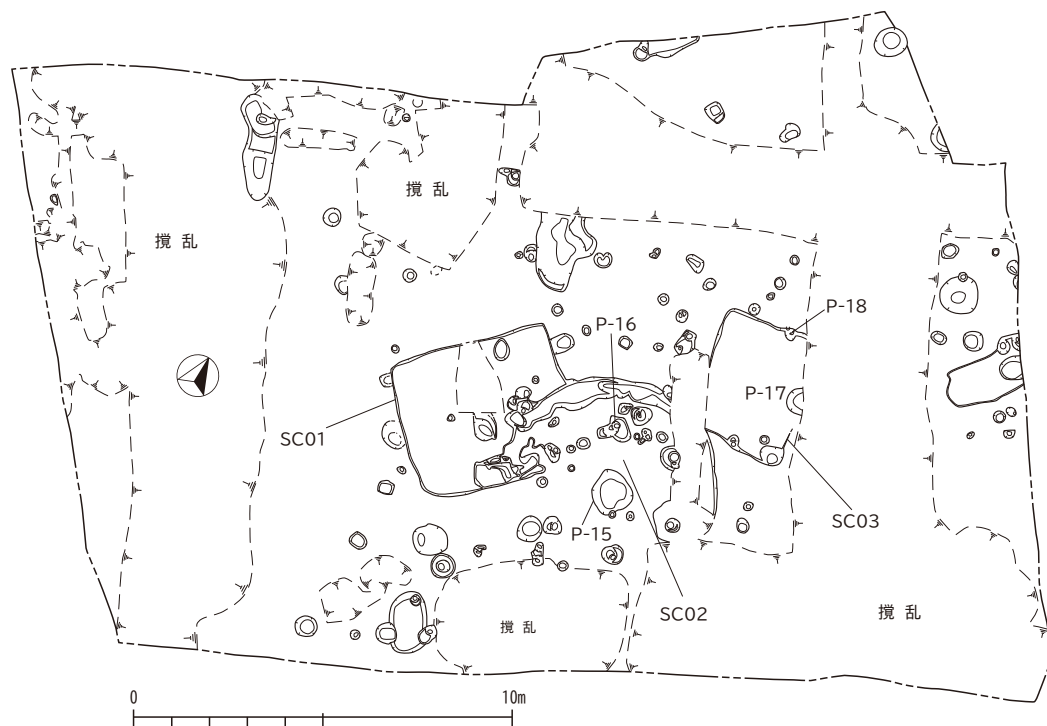
第2図 村下遺跡と調査地の位置図 (S=1/5,000)

ろを水路が北流する。調査面積は400㎡である。調査は平成7年4月10日から5月17日にかけて行った。

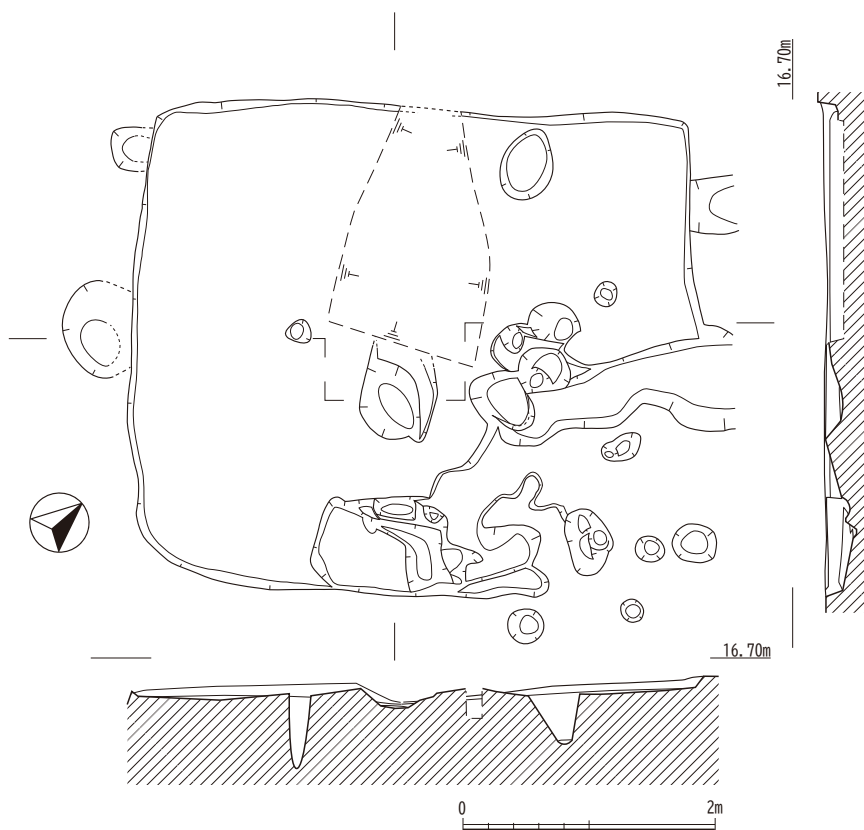
調査の結果、調査範囲の東西両側および北壁周辺が攪乱を受けていたが、竪穴状遺構3基、ピット多数を確認した。出土遺物は少なかったが、弥生土器と石器が出土した。

村下遺跡既往調査一覧

地点名	調査回数	調査年月日	報告書作成刊行
A地点	1	1987 (S62) 4～5	大野城市文化財調査報告書第88集
B地点	2	1990 (H 2) 7	大野城市文化財調査報告書第88集
C地点	3	1992 (H 4) 7～9	大野城市文化財調査報告書第91集
D地点	4	1995 (H 7) 4～5	本報告
E地点	5	1996 (H 8) 5	大野城市文化財調査報告書第172集
F地点	6	2000 (H12) 11～2001 (H13) 1	本報告
G地点	7	2001 (H13) 7～8	大野城市文化財調査報告書第172集
H地点	8	2002 (H14) 4～6	未刊・今後刊行予定
I地点	9	2006 (H18) 1～2	未刊・今後刊行予定
J地点	10	2008 (H20) 12	未刊・今後刊行予定
K地点	11	2014 (H26) 4～5	大野城市文化財調査報告書第141集
L地点	12	2016 (H28) 9～10	大野城市文化財調査報告書第165集
M地点	13	2016 (H28) 12～2017 (H29) 3	大野城市文化財調査報告書第161集
N地点	14	2024 (R 6) 2～3	大野城市文化財調査報告書第222集
O地点	市原遺跡として調査	1997 (H 9) 3	大野城市文化財調査報告書第216集



第3図 村下遺跡D地点遺構配置図 (S=1/200)



第4図 村下遺跡D地点 SC01 実測図 (S=1/60)

(2) 遺構と遺物

1) 竪穴状遺構

SC01 (第4図、図版1・2)

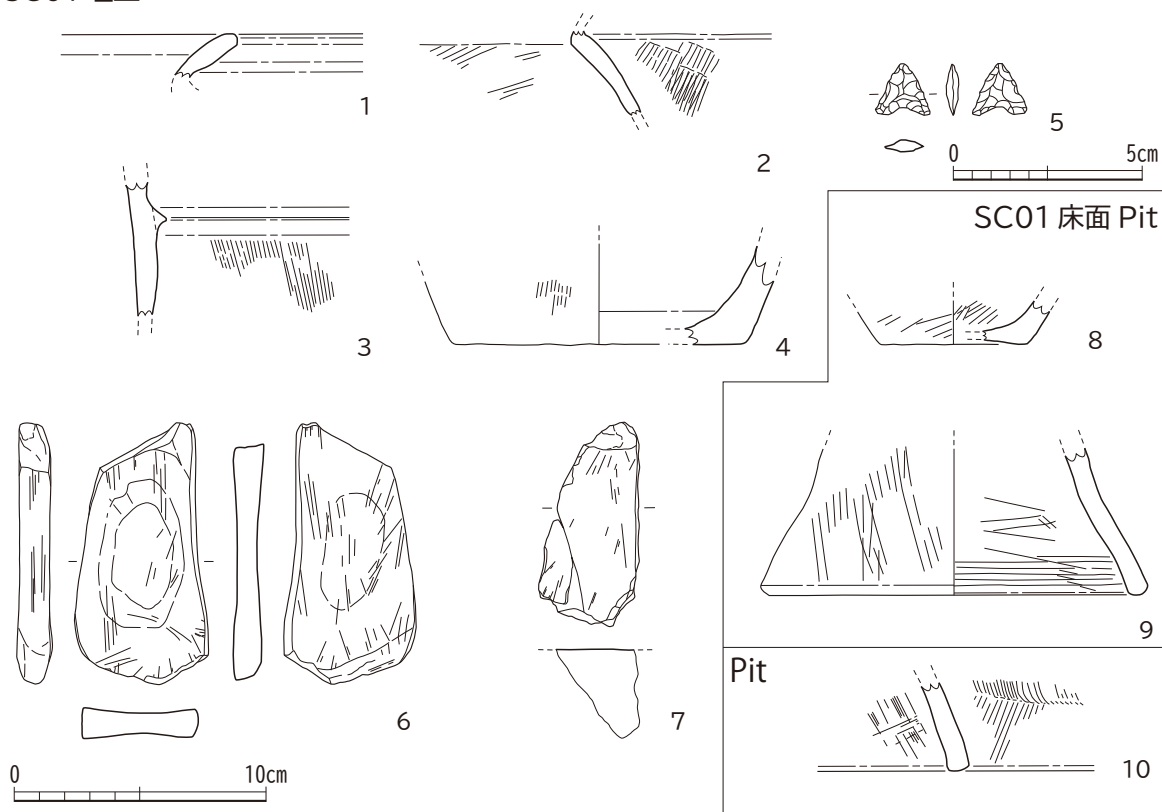
調査区中央部やや南西寄りに位置する。遺構北東部はSC02と切り合っており、北壁および東壁の一部を検出できなかったが、平面形態は長軸を略北東－南西にとる長方形プランを呈する。遺構規模は長軸方向で最大4.6m、短軸方向で最大3.9mを測る。床面は遺構南西部でゆるやかな高低差がみられるが、北西部はほぼ平坦である。遺構検出面からの深さは最大で20cmを測る。遺構の中央部から西側にかけて攪乱があり、また北東隅付近はSC02の壁溝などが遺存するが、攪乱東側に楕円形の土坑が確認されている。炭化物や焼土などは確認できていないが、深さ14cmほどで炉の可能性があり。そのほかにピットや土坑が複数検出されているが、本遺構に伴うものは判然としない。

埋土中出土遺物 (第5図、図版2)

弥生土器

甕 (1～4) 1は外反する口縁部の小片で内外面ナデである。2は甕の胴部片で口縁部が欠損する。内外面ハケメで、内面はその後ナデである。3は甕の胴部片で、断面三角形の突帯が一条めぐる。突帯下は縦ハケ、内面は横ナデである。4は甕の底部である。平底で内面はゆるやかに胴部に移行する。

SC01 埋土



第5図 村下遺跡D地点 SC01、ピット出土遺物実測図（5は S=1/2、その他は S=1/3）

石製品

石鏃（5）安山岩製の凹基式石鏃で最大長1.4cm、幅1.5cm、重量は0.5gである。

砥石（6・7）6は粘板岩性の砥石で、砥面は4面確認できる。表裏面は使用によって中央部が略楕円形にくぼむ。砥面には研ぎの痕跡が認められる。7は砂岩製の砥石で、砥面は1面のみ確認できる。

床面上ピット出土遺物（第5図、図版2）

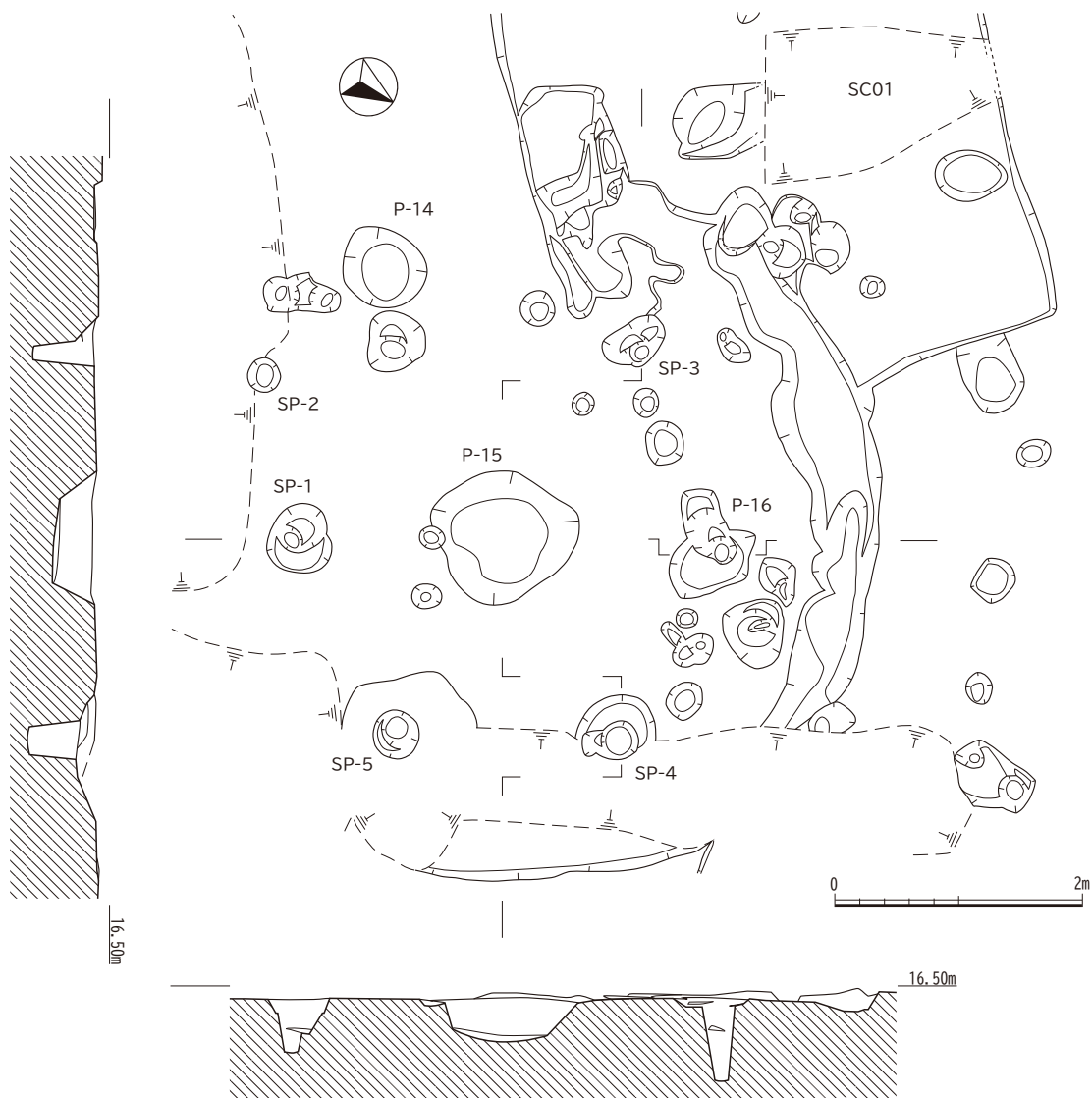
弥生土器

甕（8）小形の甕の底部であろう。底面はナデ、外面はタタキである。底部径は5.8cmに復元できる。

器台（9）器台の脚端部で外面は斜方向のハケメ、内面は端部がヨコハケ、それより上部は斜・横方向のハケメである。

SC02（第6図、図版2）

調査区中央部やや南寄りに位置する。SC01の東側に位置し、SC01と重複関係にある。遺構の北西部と北東部で壁溝が一部残存しており、円形プランを呈する竪穴状遺構と考えられる。この溝の外縁部径は5.8mを測る。北西部の残存部分で14cm程の深さを測り、北東部は5cm程の深さが残存する。この壁溝の内側にはほぼ円形に配置されたSP-1～5とP-16の合計6個の柱穴が確認できるが、この柱穴群は約3.6mの径でめぐる。上記の壁溝部分以外壁の立ち上がりは確認できていないが、床面はほぼ平坦である。



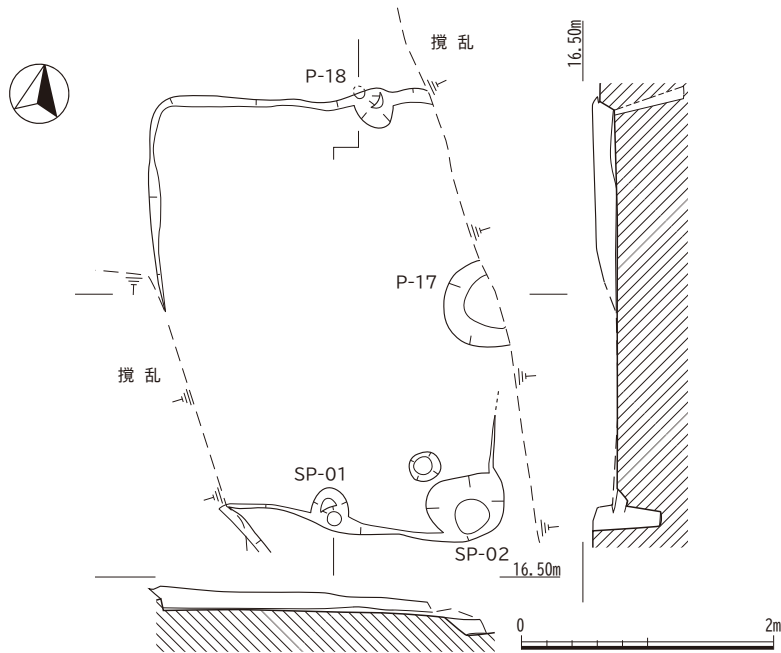
第6図 村下遺跡D地点 SC02 実測図 (S=1/60)

また、遺構の中央にはややいびつな隅丸方形を呈するP-15が確認されている。このピットの深さは遺構検出面から36.5cmを測り、床面はすり鉢状を呈する。炭化物等の検出は確認できないが、炉の可能性があるのであろう。

略円形にめぐる6個の柱穴は、SP-3とP-16が平面長方形を呈するが、その他は略円形のピットである。深さは、SP-1が44cm、SP-2が55cm、SP-3が54cm、P-16が68cm、SP-4が55cm、SP-5が60cmを測る。SP-1がやや浅く、P-16とSP-5がやや深い、その他は55cm前後である。遺物は出土しなかった。

SC03 (第7図、図版2)

調査区中央部、やや東寄りに位置する。SC02の北東側壁溝と一部重複しており、遺構の南西壁は検出できていない。また、攪乱によって竪穴の北東隅に相当する部分の北壁や東壁が消失する。残存部分からほぼ南北方向に長軸をとる方形の平面プランを想定できる。規模は長軸方向で最大3.6m、東西方向の最大幅は2.8mを測る。床面の深さは遺構検出面から最大で24cmを測る。床面はほ



第7図 村下遺跡D地点 SC03 実測図 (S=1/60)

ば平坦だが、北壁側が南壁側より6cm程レベルが高く、ゆるやかに南壁に向かって傾斜している。

床面には複数のピットが確認されているが、南北中軸やや東よりの北壁にP-18、南壁にはSP-01が検出されている。いずれも竪穴状遺構の壁面に接しており、平面は半円形を呈する。P-18の床面からの深さは56cmを測る。床面から30cm程の深さで段を形成する。やや北向きに掘削されており、ピットの最深部は北壁の北側に若干ずれている。南壁中央に位置するSP-01は床面から39cmの深さで、床面から10cm程の深さで段を形成する。このほかに、遺構南東隅に略円形のピットが位置する。南北54cm、東西64cmを測る。床面からの深さは53cmを測る。これらのうち中軸近くのP-18、SP-01は竪穴の柱穴の可能性がある。また、南東隅のSP-02も柱穴の可能性がある。一方、遺構東側の攪乱でほぼ半分が消失しているP-17は遺構の東壁に近接しており、竪穴状遺構との関係については不明である。遺物は出土していない。

2) ピット出土遺物 (第5図)

弥生土器

器台 (10) 器台の脚端部で端部はナデ、内外面はともにハケメである。

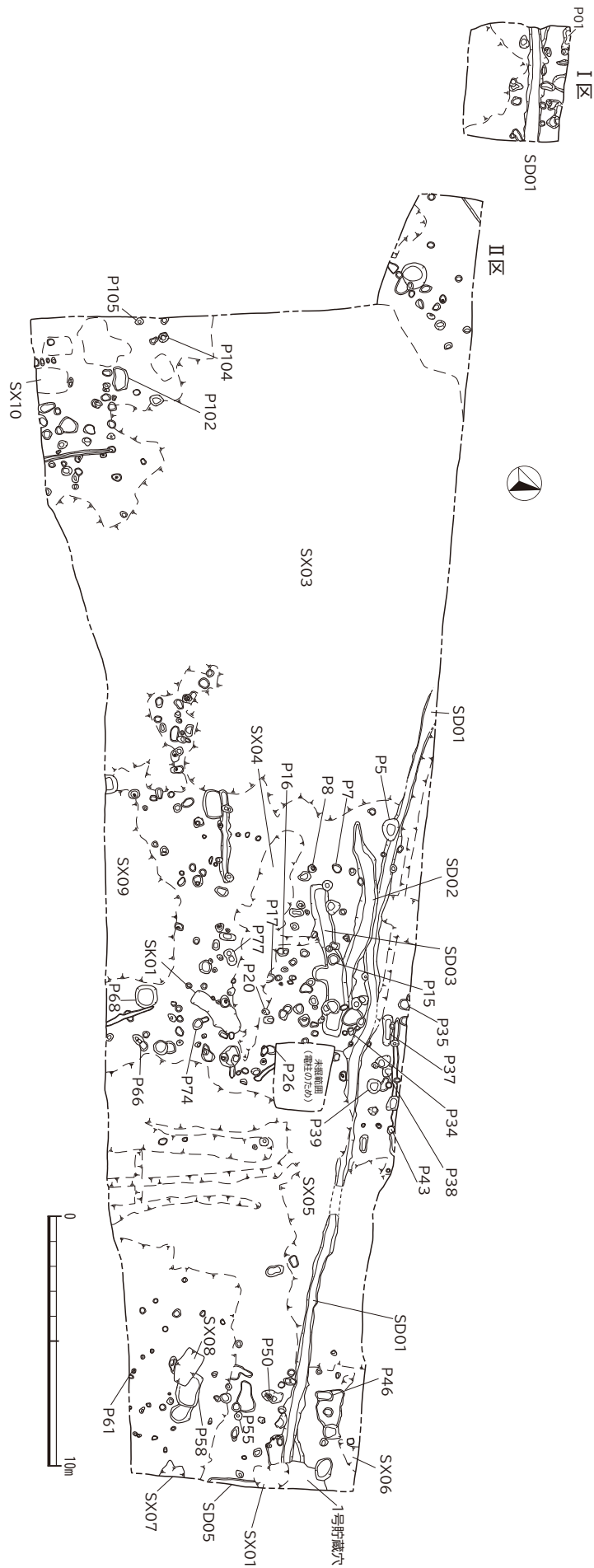
(3) 小結

調査の概要でも述べたように、多数のピットと竪穴状遺構3基が確認されたが、出土遺物は非常に少なかった。さらに、竪穴状遺構3基のうち資料化可能な遺物が出土したのはSC01のみで、他の2基からは時期を特定できるような遺物は出土していない。そのため、遺構の時期を遺物から確定するには難しいところがある。ただし、住居跡のプランによってある程度の時期を推定することが

できる。

竪穴状遺構の平面形はSC02のみ円形プランで、他のSC01とSC03は方形あるいは長方形プランを呈する。また、SC01からは弥生時代後期の土器が出土している。これらのことから、円形プランのSC02は弥生時代中期、SC01とSC03は弥生時代後期の住居跡と推定できるであろう。

村下遺跡ではD地点も含め、これまで15地点で調査が行われ、遺跡の形成過程についての所見も蓄積されつつある。今回のD地点の調査でも後期の住居跡に加え中期のものと推定される住居跡が確認された。今後の周辺における調査のさらなる進展が待たれる。



第8図 村下遺跡F地点遺構配置図 (S=1/250)

2. 村下遺跡F地点の調査

(1) 調査の概要（第2・8図、図版3）

村下遺跡F地点は大野城市筒井2丁目533、534-1に所在する。調査地は御笠川左岸の河岸段丘上に位置し、村下遺跡D地点の南東に隣接する位置にある。現地表面の標高は16.2mである。調査地東側に北西-南東方向に細長い谷状の低地が入り込んでおり、調査地の東端から東の小谷に向かって細い水路が流れている。調査面積は750㎡である。平成12年11月27日から平成13年1月31日にかけて調査を行った。

調査の結果、攪乱がひどく調査区の西半部を中心に遺構がほとんど残っていなかった。しかし貯蔵穴1基、溝6条、性格不明の大形不整形土坑、ピット多数が確認された。出土遺物は、弥生土器、磨製石剣、須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦など多岐にわたる。

(2) 遺構と遺物

1) 貯蔵穴

1号貯蔵穴（第9図、図版1）

Ⅱ区の調査区北東隅、東壁沿いに位置する。遺構の南半部は肩部がSX01により削平され、消失している。東半部は調査区外にのびる。そのため、遺構の平面プランは不明であるが、残存部分からほぼ円形に近い形態と推定できる。遺構の規模は、残存部分の北西-南東方向の最大幅が2mを測る。貯蔵穴上端部以下は壁面が中位でいったん膨らんだ後、ややすぼまりながら床面にいたる。床面はやや南側が低く、中央部が浅くくぼんだ形態である。床面までの深さは、検出面から最大で1.4mを測る。また壁面中位の断面で最も径が大きくなる部分は2.6mを測る。

出土遺物（第10図、図版4）

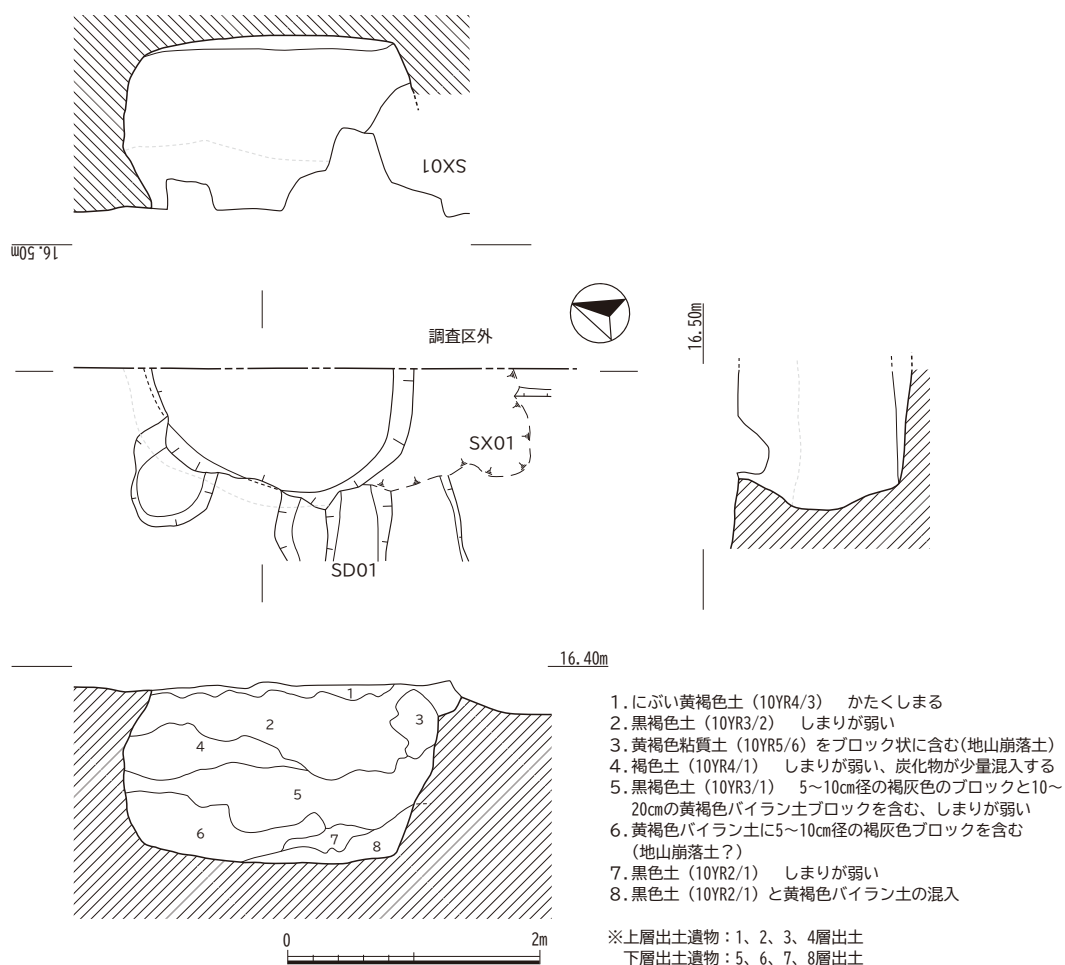
弥生土器

甕（11～25）11は擬朝鮮系無文土器の口縁部である。断面三角形の口縁形態に似るが、胴部外面との粘土の接合部が明瞭に観察できる。12・13は断面三角形の口縁部である。14は断面三角形状に口縁部を外側に引き伸ばし外面稜線上に刻み目を施す。胴部上位にも刻目突帯を一条めぐらす。15は逆L字形の口縁部である。16は口縁部が逆L字形に張り出す。17は断面三角形状に口縁部を引き出す形態である。18は逆L字形に口縁部が外側に張り出す。19は如意形の口縁部である。20は口縁部が逆L字形を呈し、やや大きく外に張り出す。21は外反する甕の口縁である。口縁部屈曲部の上面には暗文が施される。

22から25は甕の底部である。22と23は厚い底部で底面は上げ底を呈する。24は平底に近い底部で、底面から斜めに胴部が立ち上がる。25は底部小片で平底である。

壺（26～28）26は壺の胴部最大径部分の小片で、ゆるやかに屈曲する。27は壺の胴部上半部である。28は肩部に断面三角の突帯を一条めぐらす。

蓋（29）蓋の口縁端部で外面は丹塗り磨研である。



第9図 村下遺跡F地点1号貯蔵穴実測図 (S=1/60)

脚部 (30) 脚裾部の破片で、外面は縦方向のハケメ、内面端部付近は横方向のハケメである。
支脚 (31) 中実の支脚で、底面はわずかに上げ底状を呈する。全面ナデ仕上げである。

2) 土坑

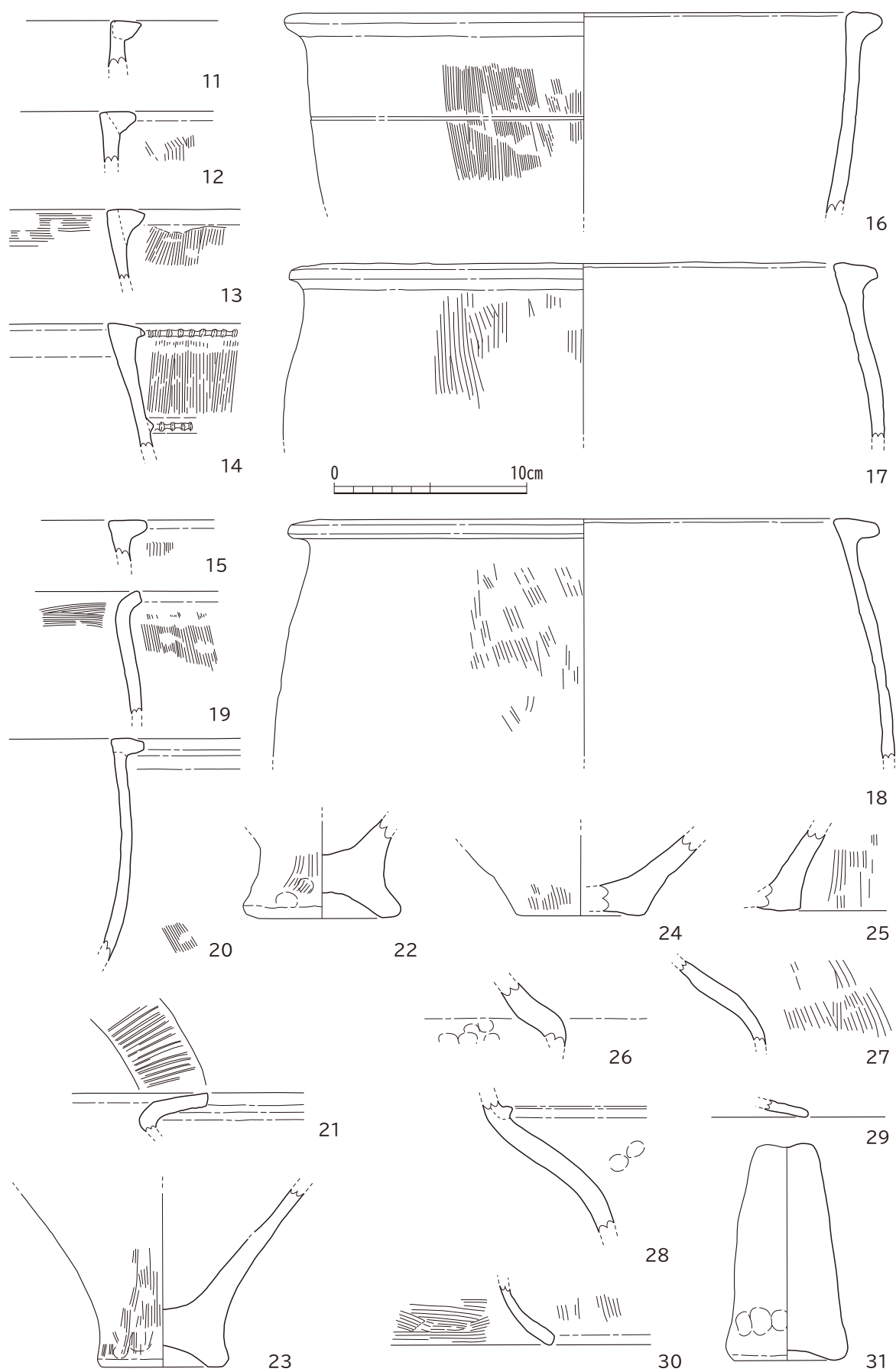
SK01 (第11図、図版3)

Ⅱ区中央部やや南寄りに位置する。遺構の北側はSX04に接し、東側1.6mほど離れてSX05が、南側1.2mほどにSX09が位置する。遺構は長軸を略北東-南西方向にとる。遺構北側は半円形を呈し、南側は長方形プランを呈する。遺構規模は長軸方向で2.4m、短軸方向で最大92cmを測る。南側の長方形部分の床面は遺構検出面から最大で74cmの深さを測る。床面は南側から90cm程は北側に向かってゆるやかに傾斜し、その後平坦になる。北側の半円形の部分は最大で96cmを測り、床面はすり鉢状を呈し、北壁は床面からゆるやかに立ち上がる。遺物は出土していない。

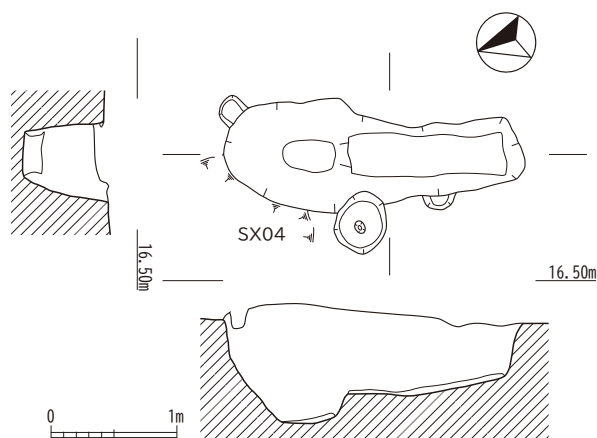
3) 溝

SD01 (第12図、図版4)

Ⅰ区とⅡ区にまたがって確認された溝である。Ⅰ区では北壁寄りに東西方向に流れる。Ⅱ区でも



第 10 图 村下遺跡 F 地点 1 号貯蔵穴出土遺物実測図 (S=1/3)



第 11 図 村下遺跡 F 地点 SK01 実測図 (S=1/60)

調査区の北壁に沿って略東西方向に確認され、Ⅰ区からⅡ区まで総延長58mほどを検出した。Ⅱ区東壁部分では1号貯蔵穴によって切られている。また、溝の東端部付近で溝幅がやや広がり、1.4mほどを測る。溝底部の断面はU字形で、遺構検出面からの深さは1.3mを測る。A区の断面の土層堆積の状況から、3層堆積後一度掘り直しが行われており、その際にこの東端部分の幅が本来の溝幅より拡大されている可能性がある。A区断面の溝底の標高は15.7mで、B区断面は15.7m、C区は15.7m、D区は15.6m、E区は15.6m、F区は15.7mである。以上からD区からE区にかけて若干低くなるが、東西両端で溝床面にはほとんど標高差がなく平坦である。

上層出土遺物 (第13図、図版5)

土師器

皿 (32) 小皿で、底面には回転糸切り痕がみられる。口縁から体部にかけて回転ナデを施し、底部内面は回転ナデと不定方向のナデである。口径10.0cm、底径8.4cmに復元でき、器高は1.5cmである。

弥生土器

甕 (33 ~ 36) 33は粘土帯を張り付け断面三角形状に口縁を外側に突出させる。34は粘土帯を張り付け口縁部を逆L字形の断面形にする。35も粘土帯を張り付け逆L字形に口縁部を屈曲させるが、口縁部上面はほぼ水平である。36はわずかに上げ底を呈する。

鉢 (37) 小形の鉢で、底部からやや丸みをもった胴部が立ち上がり、そのまま直立して口縁部にいたる。底部は平底である。

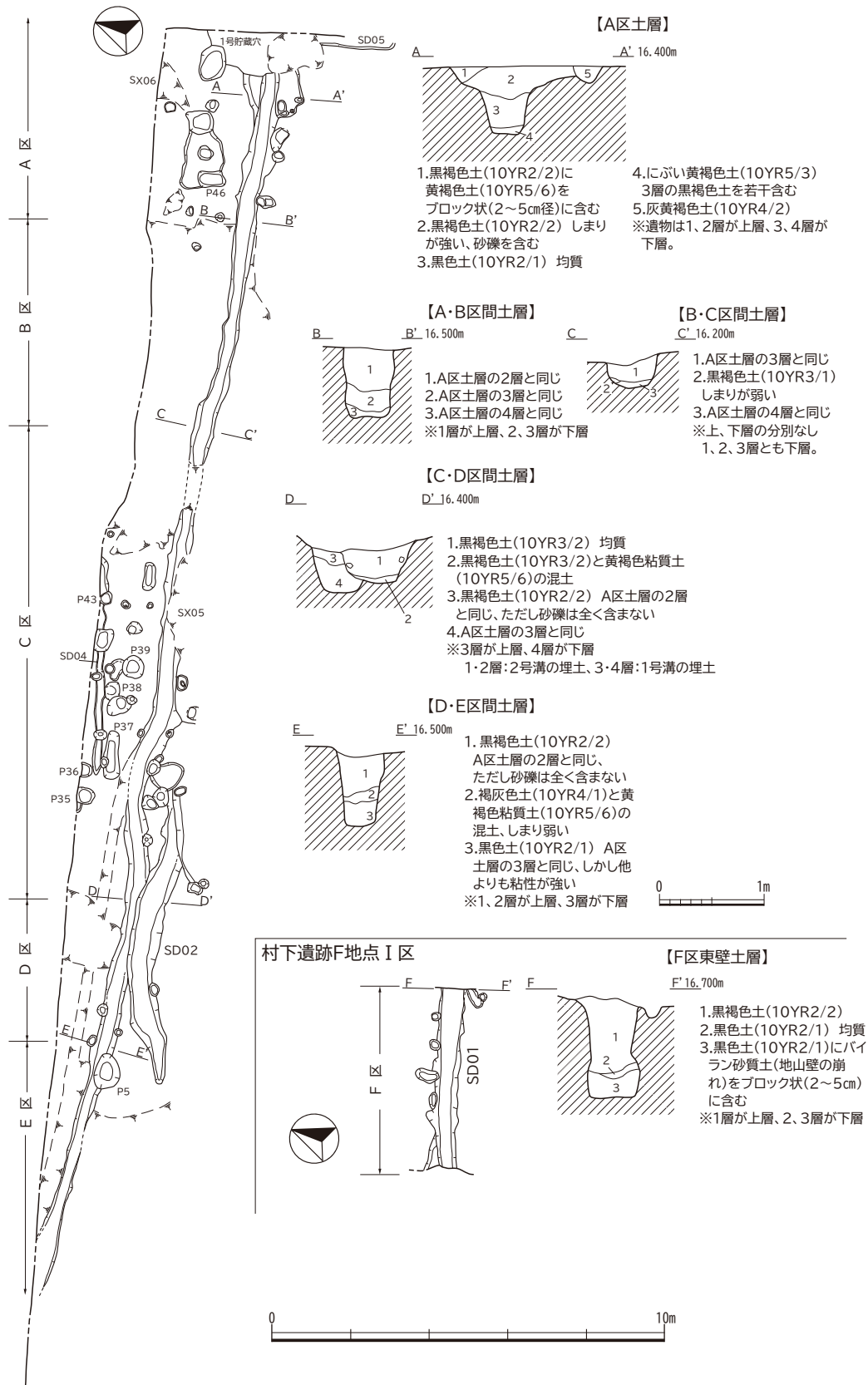
壺 (38) やや丸みをもった平底の底部である。外面はハケメで、内面は丁寧なナデである。

蓋 (39) 蓋の口縁部である。器面の荒れのため調整は不明である。

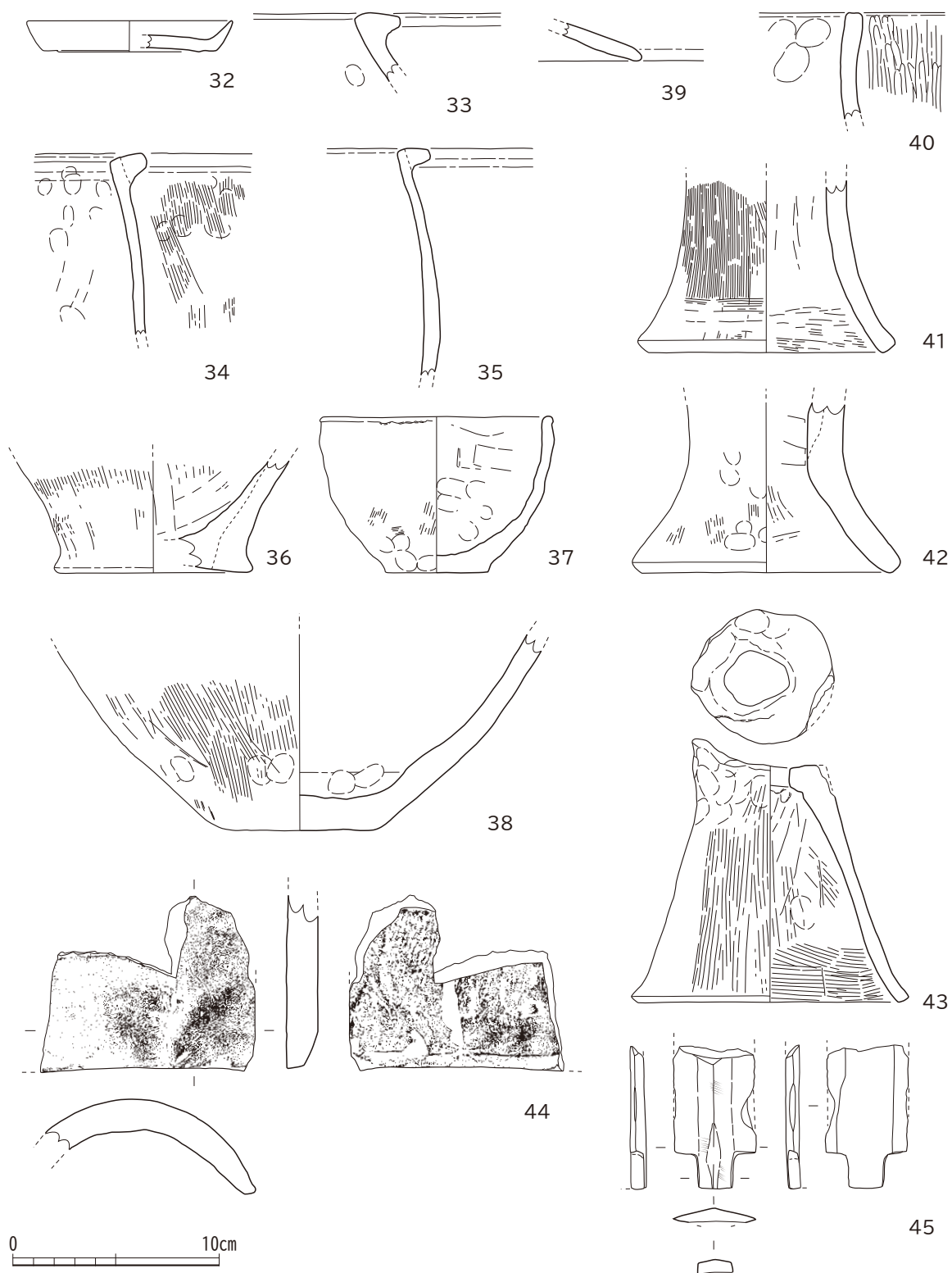
器台 (40・41) 40は小片で詳細不明だが、筒形器台の口縁部片であろう。外面は丹塗りで縦方向のミガキである。41は器台の脚部片である。

支脚 (42・43) 42の外面調整は指頭圧痕が残るが、縦方向のハケメをナデ消す。内面は裾部付近を丁寧にナデで仕上げる。43は杢形支脚である。上端面はゆるやかな曲面をなし、ほぼ中央部に楕円形に近い孔をあける。

村下遺跡F地点Ⅱ区



第12図 村下遺跡F地点Ⅱ区SD01・A～E区、Ⅰ区F区実測図 (S=1/160、土層図S=1/60)



第 13 図 村下遺跡 F 地点 SD01 上層出土遺物実測図 (S=1/3)

瓦（44）丸瓦で、端部と側縁部を面取りする。凹面には布目が残り、凸面はナデである。
 石製品（45）磨製石剣の茎から剣身部の破片である。鎬を持ち、研磨の際の擦過痕が一面にみられるが表面は荒れた状態である。裏面は剥離して残存しない。

下層出土遺物（第14図、図版5）

土師器

皿（46）小皿で、底面は糸切痕が残る。底部内面から体部外面にかけて回転ナデである。内面には黒色の顔料が残る。

弥生土器

甕（47～56）47・48・49は逆L字形に短く外反する口縁部である。47の口縁部上面はほぼ水平であるが、48・49の口縁部上面はやや内傾する。いずれも器面の内外面はナデである。50は逆L字形に口縁部が屈曲する。51と52は如意形の口縁部で、51は胴部から口縁部に向かってややすぼまり、短く口縁部が外湾する。52も胴部から一旦口縁部に向かってすぼまり、ゆるやかに口縁部が外湾する。小形の甕であろう。

53・54・55は甕の底部である。53と54は厚みがあり、上げ底である。55は平底で、胴部が外傾して直線的に立ち上がる。

56は小片で詳細不明だが、甕棺の口縁部であろう。口縁端部の上・下端に刻み目を施す。

壺（57～60）57は袋状口縁壺の口縁である。頸部から袋状に内湾する口縁部がつく。外面は横方向の研磨を施し丹塗りである。58は短頸壺の口縁部片である。内外面とも丹塗りで横方向の研磨である。59は口縁部小片であるが短頸壺であろう。内外面ともナデである。口縁部は胴部からやや外反して立ち上がる。60は壺の底部であろう。

鉢（61・62）61は小形の鉢であろう。口縁端部は粘土を内側から外側に向かって巻き込むような形状を呈する。62は口縁部から胴部下半にかけての破片である。

その他の出土遺物（第14図）

瓦質土器

鉢（63）口縁部片である。外面は指オサエとナデ、内面は横・斜方向のハケメである。内面は使用によりやや摩耗する。

弥生土器

壺（64）壺の胴部である。上端部に突帯が一条めぐる。内面は器面劣化のため調整不明、外面は縦方向のハケメである。

支脚（65）体部下半から脚裾部にかけて残存する。器壁は厚く2.5cm程を測る。

SD02（第8図）

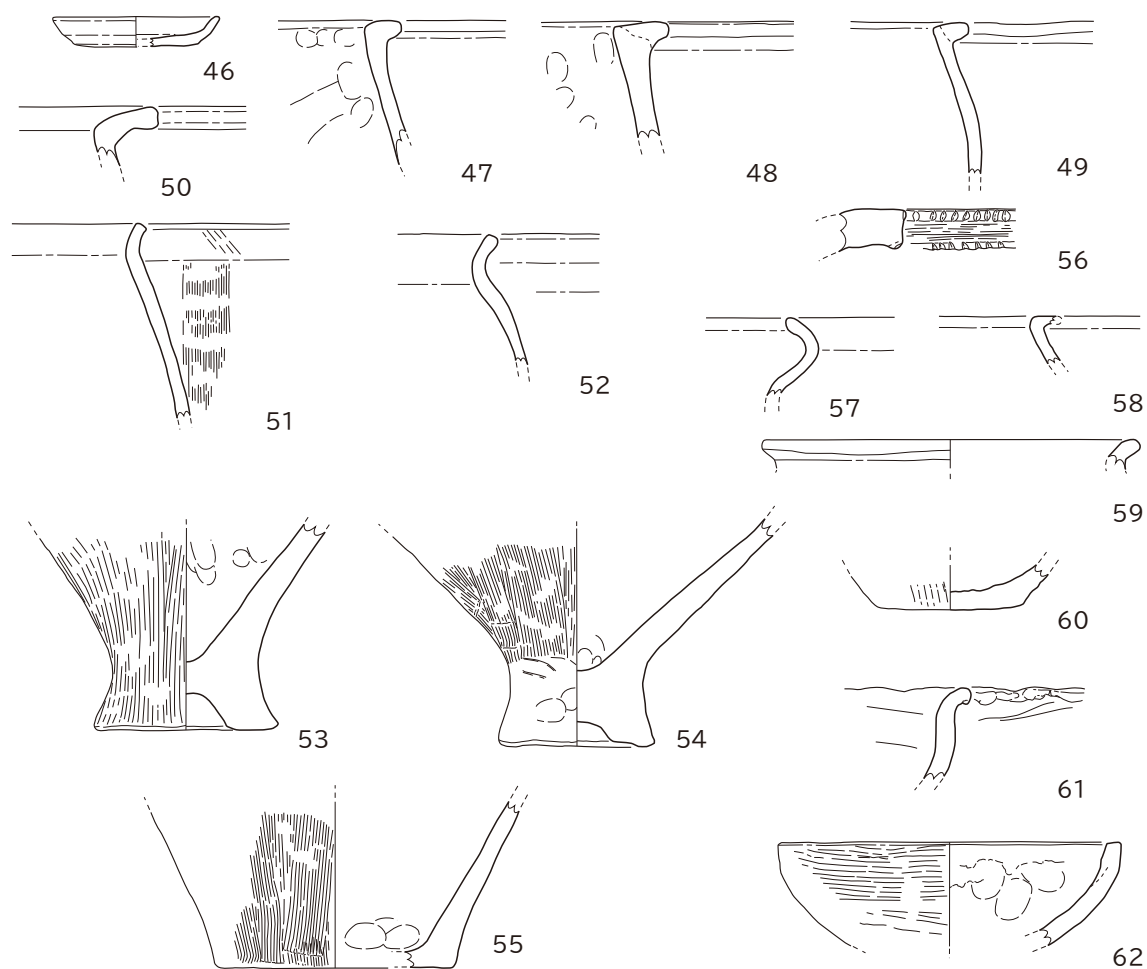
Ⅱ区の中央部北壁よりに位置し、溝の東端部はSD03によって切られ、消失している。西端部は先細り、自然に消失している。溝中央部はやや北側に湾曲しており、SD01を切る。東西長は最大7.5m、溝中央部のSD01と切り合う部分で最大幅77cmを測る。溝の断面はU字形を呈しており、西端部の標高は15.85m、東端部は16.14m、中央部は15.72mであり、溝中央部でやや床面が低くなるが、全体的には東から西に向かってゆるやかに傾斜している。

出土遺物（第15図、図版5）

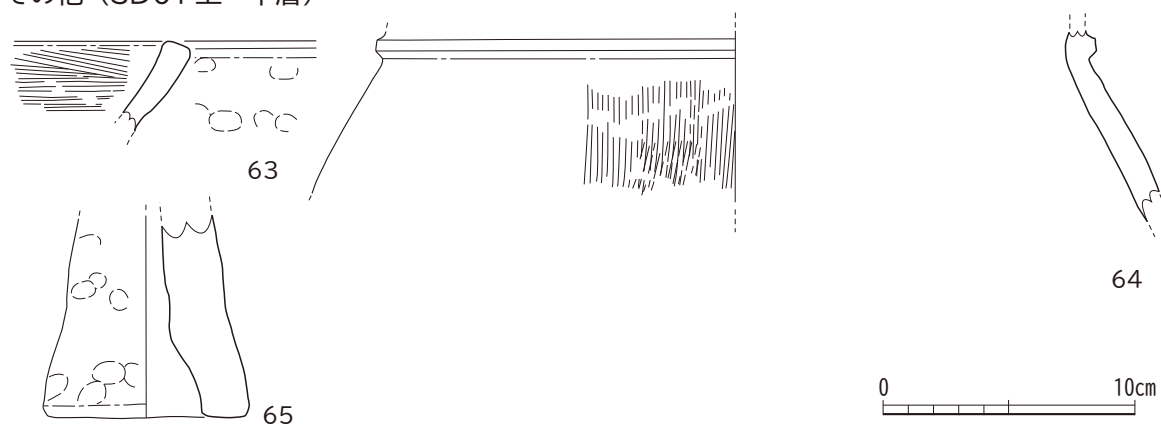
土師器

皿（66）丁寧なつくりの小皿である。内外面ともに回転ナデである。

SD01 下層



その他 (SD01 上・下層)



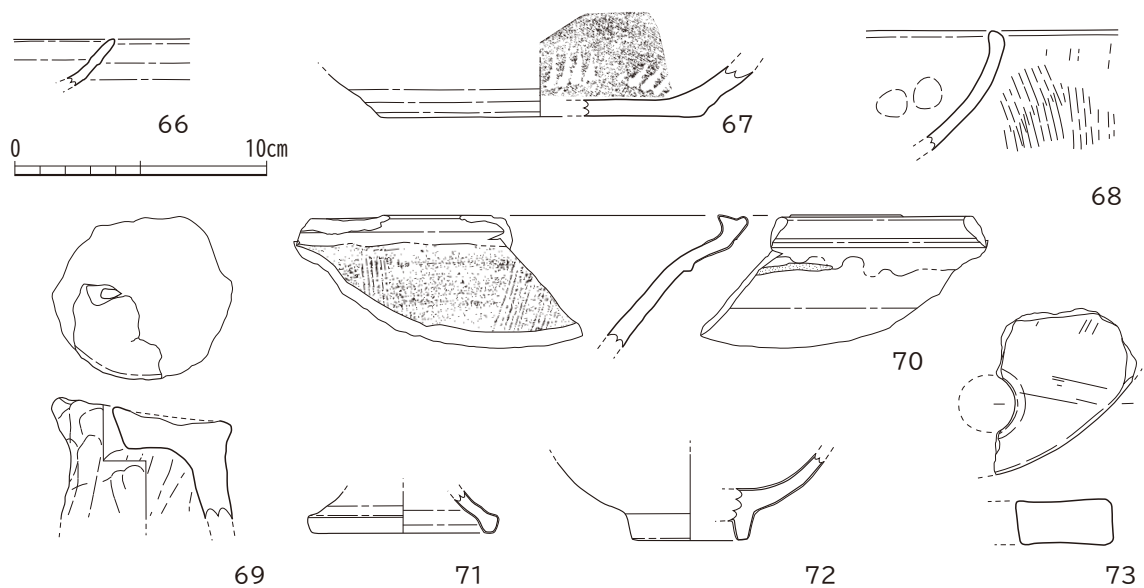
第 14 図 村下遺跡 F 地点 SD01 下層、その他の出土遺物実測図 (S=1/3)

瓦質土器

播鉢 (67) 播鉢の底部である。4～5本を単位とする播目がわずかに残る。

弥生土器

鉢 (68) ゆるやかに胴部が立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁端部はわずかに内湾する。



第15図 村下遺跡F地点SD02出土遺物実測図 (S=1/3)

外面は縦方向のハケメで、内面はナデである。

支脚（69）沓形支脚の上端部である。上面の大部分は器面が剥離する。中央からややずれた位置に穿孔がみられる。

陶器

擂鉢（70）口縁部は内側にやや突出し、上面がくぼむ。口縁部内外面に鉄釉を施釉し、その他は露胎である。外面に重ね焼きによる熔着片がつく。肥前産であろう。

仏飯器（71）仏飯器の脚裾部である。内外面施釉し、脚端部がやや肥厚する。

磁器

椀（72）青磁椀の高台から胴部にかけてが残る。高台は直立気味に付き、内外面施釉で、畳付釉剥ぎである。

土製品

サナ（73）サナの外縁部である。端部はナデ仕上げ、表裏面はハケ状の工具痕が残る。厚さは最大で1.8cmである。

SD03（第8図）

Ⅱ区の中央部やや北壁よりで、SD02の南側に位置する。略東西方向に流れる溝状の遺構で、東半部でSD02を切る。端部は東西とも矩形を呈し、溝幅は東端部で74cm、中央部で83cm、西端部で70cmを測る。床面のレベルは東端部で標高16.0m、中央部15.95m、西端部15.98mでほぼ水平である。

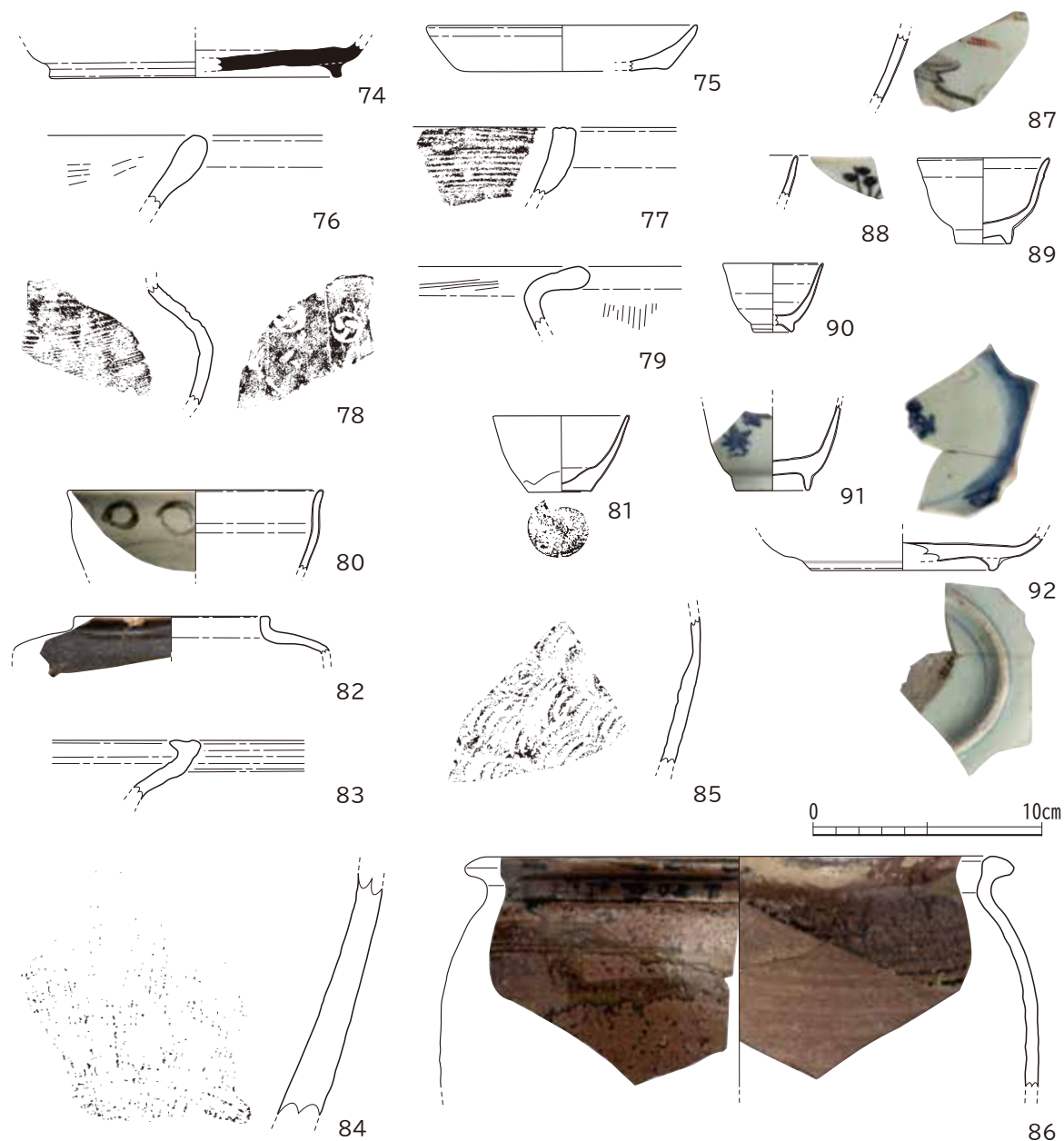
出土遺物（第16・17図、図版5・6）

須恵器

杯（74）杯B身の底部片である。やや外に向く低い高台がつく。

土師器

皿（75）小皿で口縁部から体部の内外面は回転ナデ、底面は糸切痕が残る。糸切りにより底部が



第 16 図 村下遺跡 F 地点 SD03 出土遺物実測図 1 (S=1/3)

ややゆがむ。口径11.8cm、底径9.1cmに復元でき、器高は2.0cmである。

瓦質土器

鍋（76）口縁部片で、端部がやや肥厚する。

捏鉢（77）やや内湾気味に立ち上がる口縁で、体部に向かって一端器壁が薄くなる。内外面ともに回転ナデで、口縁内面にヨコ方向のハケメがのこる。また、口縁端部上面にハケ状工具による調整痕が残る。

湯釜（78）湯釜の胴部で、肩の部分に三つ巴文のスタンプが施される。外面には全体的に煤が付着する。

弥生土器

甕（79）「く」の字形に口縁部が外反し、端部が丸みをおびやや厚みを持つ。

陶器

椀（80）口縁部端反りの椀である。内外面施釉で、口縁部下に鉄釉で円文を描く。

小杯（81）底部から外に開き口縁部にいたる小杯である。底部は糸切りで露胎、その他は施釉である。口径3.0cmに復元でき、器高は3.3cmである。内面に胎土目が残る。

壺（82）壺の口縁部から肩にかけてである。口縁は直立し、肩が張る。外面は施釉、内面は無釉である。

鉢（83・84）83は擂鉢で、口縁部が内側に突出する。口縁部上面が露胎であるが、他は内外面とも鉄釉をかける。肥前産であろう。84は擂鉢の胴部である。内外面施釉であるが、内面は使用によって釉がはげ、擂目も摩耗している。

甕（85・86）85は胴部片で、内面に当て具痕がみられる。外面は施釉。86は口縁部が外側にやや突出する。胴部上半部内外面に施釉し、その他は無釉である。口径は24.0cmに復元できる。

磁器

瓶（87）瓶の胴部であろう。外面施釉で赤・緑・紫で色絵が施される。内面は無釉である。

椀（88）染付椀の口縁部で、花卉文が描かれる。内外面施釉である。

小杯（89～91）89はやや外開きに立ち上がる。高台皿付と高台内は無釉で、その他は施釉である。高台内にはわずかに兜巾がみられる。90は高台内が一部露胎で、その他は施釉である。91は口縁を欠損する。外面に染付で楓を配す。皿付釉剥ぎで、高台に砂目痕がある。

皿（92）染付の皿で、内外面施釉、皿付釉剥ぎである。外面高台脇と高台内に圈線がめぐり、見込み中央には五弁花文が描かれる。

瓦

平瓦（93・94）93は側縁部片で、94は側縁部と端部が一部残る。いずれも面取りしており、凹面・凸面ともにナデである。

石製品

石斧（95）玄武岩製の太形蛤刃石斧で、刃部は折損する。側縁部は研磨がやや粗く敲打痕がみられる。残存長13.2cm、最大厚5.1cm、最大幅8.0cmである。重量は923gを測る。

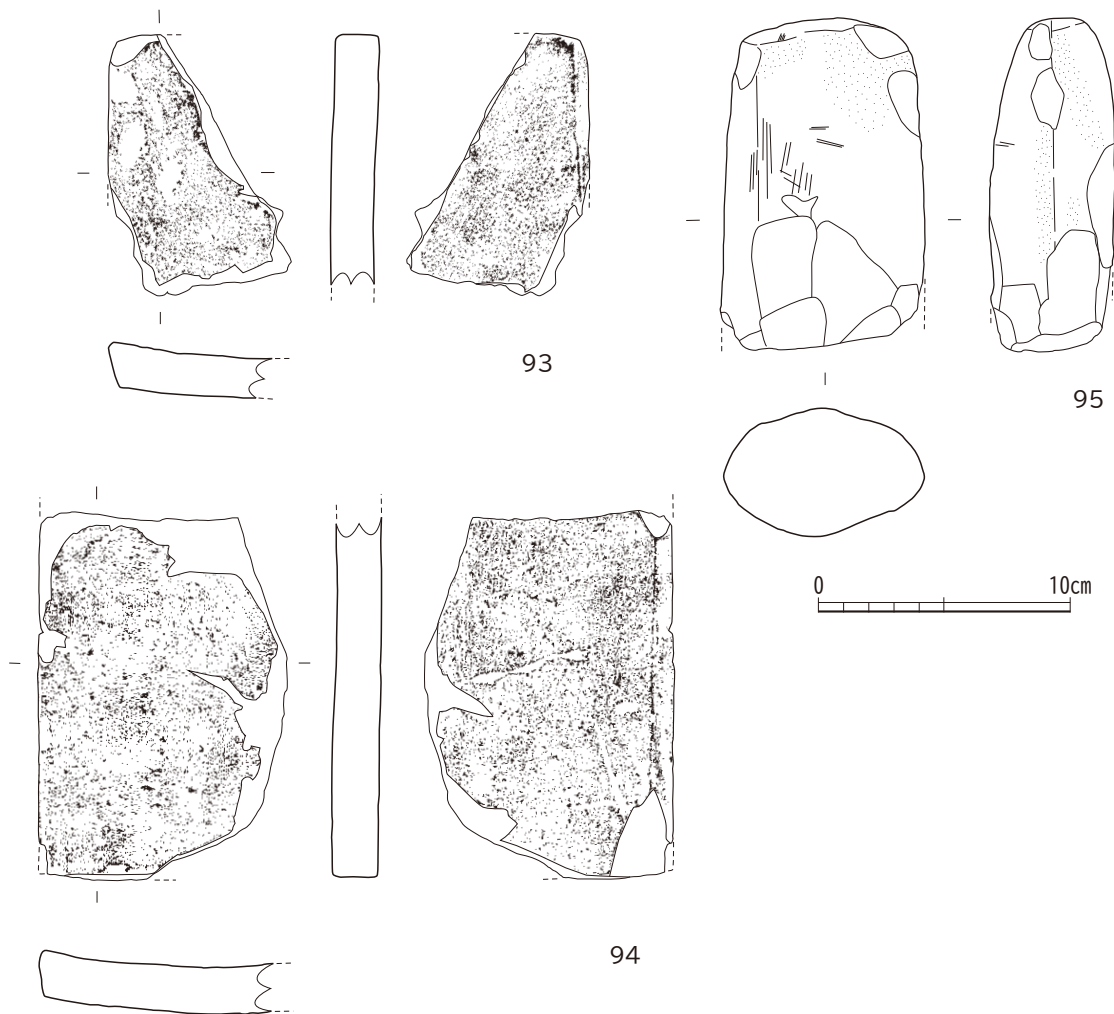
SD05（第8図）

Ⅱ区東壁沿いに確認された溝状遺構である。東壁中央部に位置しており、北側はSX01によって消失している。溝の東側は調査区外に広がるため南端部の形状は確定できないが、調査区内の形状からは半円形に近い形状をとるものと考えられる。南北長は2.0m、北端部で最大幅26cmである。溝の深さは北端部で遺構検出面から25cmを測る。床面は北端部の標高が16.01m、南端部が16.06mでわずかに南側が高く、北に向かって低くなる。

出土遺物（第18図、図版6）

瓦質土器

甕（96）大形甕の胴部である。外面は器面が荒れており調整は不明で、内面は横方向のハケメで



第17図 村下遺跡F地点SD03出土遺物実測図2 (S=1/3)

ある。粘土紐の継ぎ目で器壁の凹凸が顕著である。

磁器

碗（97・98）97は染付碗の口縁部片で内外面とも施釉である。口縁外側面に二重圈線が描かれる。98は高台からゆるやかに湾曲して口縁部にいたる。内傾気味に高台がつく。内外面施釉で高台畳付釉剥ぎである。口径は15.2cmに復元でき、器高は7.6cmである。

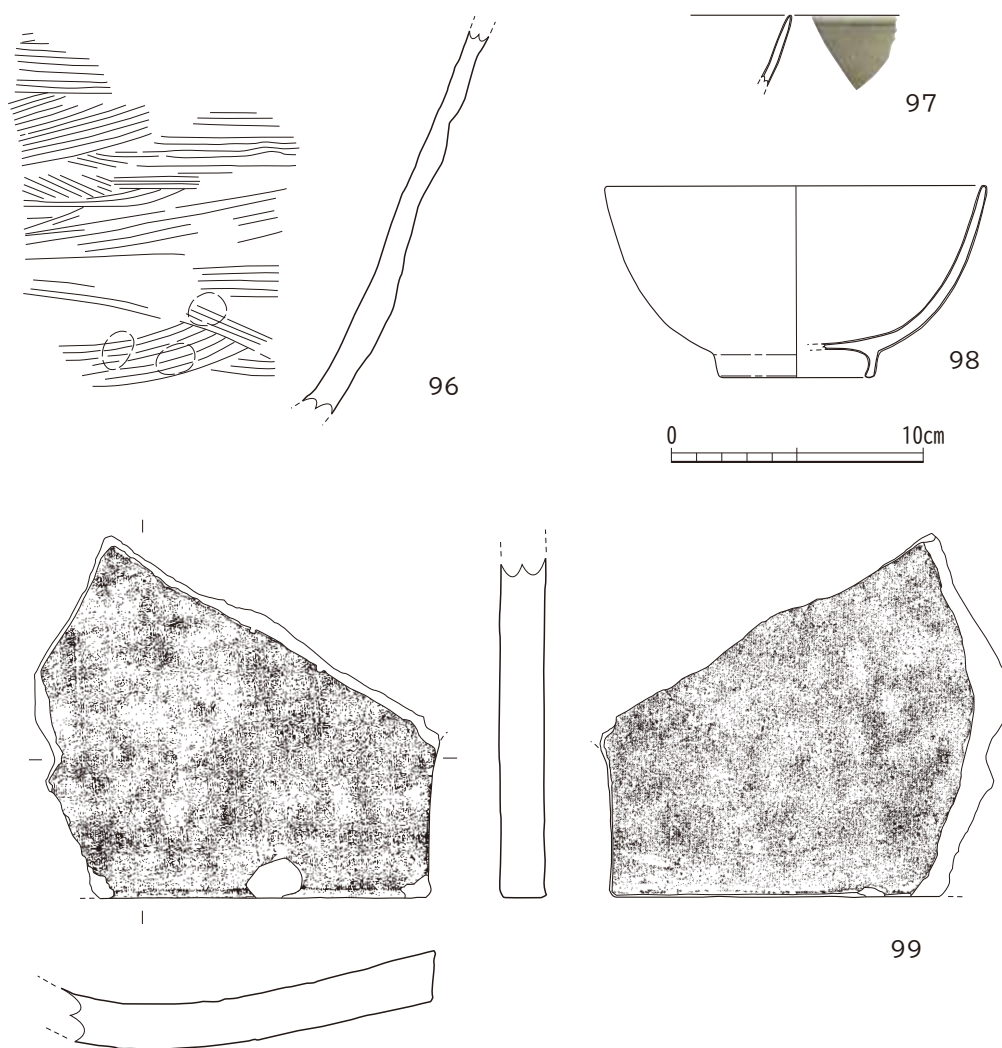
瓦

棧瓦（99）棧瓦の軒先側の端部片である。凹面右端の切込み部分が一部残存する。端部は面取りがされており、両面ともヘラナデである。凹面・凸面とも燻しである。

4) 性格不明遺構

SX01（第8図）

Ⅱ区の東壁に沿って確認された。1号貯蔵穴の南側、SD05の北側に位置し、両遺構の一部を削平している。平面形態はややいびつな楕円形を呈する。調査区東側に遺構の一部は延びる。



第 18 図 村下遺跡 F 地点 SD05 出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物 (第19図、図版6)

瓦質土器

鉢(100～103) 100は胴部の中位でゆるく折れそのまま口縁部にいたる。口縁部はやや肥厚する。器壁外面が被熱している。口径は52.4cmに復元できる。101も胴部中位に稜を持ち、そのまま口縁部にいたる。102は外に開く胴部からそのまま口縁部にいたる擂鉢で、口縁部が肥厚する。103は擂鉢の底部である。擂目が使用のためかなり摩耗する。

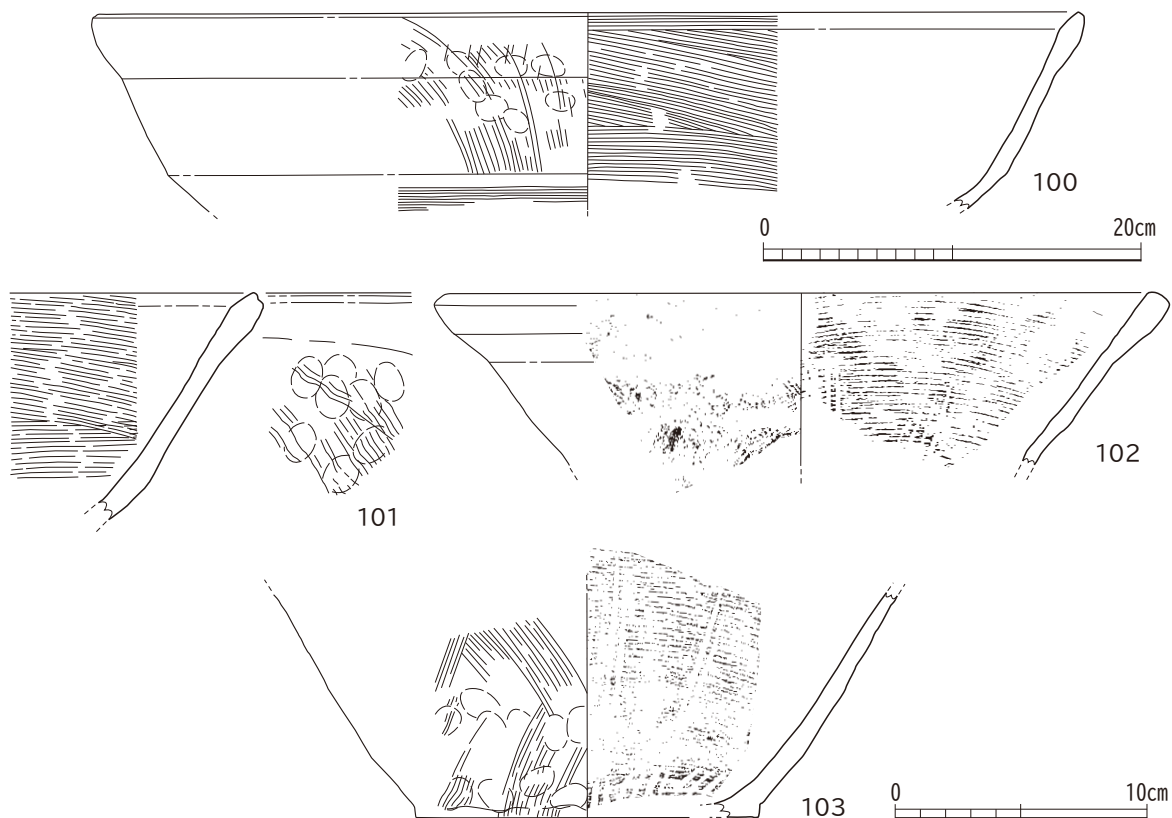
SX02

調査地内で該当する遺構が記録されていないため、遺跡内での位置その他詳細は不明である。ただし、SX02として取り上げられている以下の遺物が出土した。

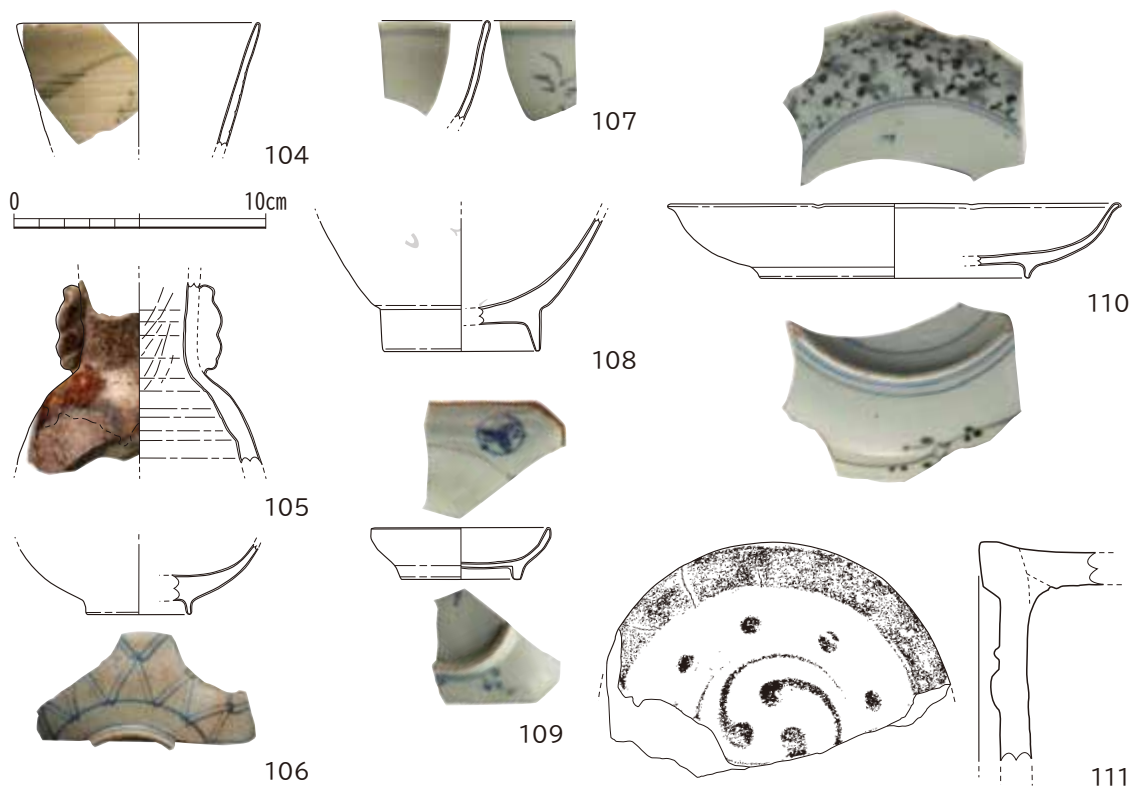
出土遺物 (第20図)

陶器

椀(104) 胴部が直線的に外に開き口縁部にいたる椀である。胴部に沈線文が五条めぐり、文様



第 19 図 村下遺跡 F 地点 SX01 出土遺物実測図 (100 は S=1/4、その他は S=1/3)



第 20 図 村下遺跡 F 地点 SX02 出土遺物実測図 (S=1/3)

が描かれる。内外面施釉である。

瓶(105)頸部から肩部にかけての部分で、頸部に螺旋状の耳部がつく。外面は飴釉を重ね掛けする。

磁器

椀(106～108) 106は肥前産の陶胎染付椀で、胴部に二重網目文を描く。内外面施釉、高台畳付釉剥ぎである。107は染付椀である。口縁部に二重圈線、胴部に草花文が描かれる。108は広東椀の底部で、詳細不明だが胴部外面中位と底部見込みに染付が施される。畳付釉剥ぎである。

皿(109・110) 109は糸切り細工成形の染付角皿である。口縁部は口銹である。内面は丸に三方割銀杏と花卉文、外面は花卉文である。110は染付の皿で、口縁端部が反り輪花様を呈する。内外面とも唐草文が描かれる。内外面施釉で釉は青みを帯びる。

瓦

丸瓦(111) 三つ巴文の軒丸瓦で、瓦当径は14.2cmに復元できる。内外面とも燻しである。

SX03(第8図)

Ⅱ区の中央部から西部にかけて広がる性格不明の土坑状の落ち込みである。平面形態は不規則で明瞭さに欠ける。遺構の深さなどは不明である。

出土遺物(第21・22図、図版6・7)

土師器

皿(112・113) 112は口縁部の一部を欠損する以外は完存する。底部は回転糸切り後ナデである。口縁部と底部の一部に煤が付着する。口径7.8cm、器高1.3cm、底径6.0cmである。113は口縁部の大部分を欠損するが、体部から底部は完存する。底部は糸切りで、口縁部から内面にかけて煤が付着する。口径は8.8cmに復元でき、器高1.4cm、底径6.4cmである。

甕(114) 砲弾型に底部から口縁部にいたる大形の甕である。口縁は端部がやや肥厚し、上面は面を形成する。内外面ハケメ調整である。

瓦質土器

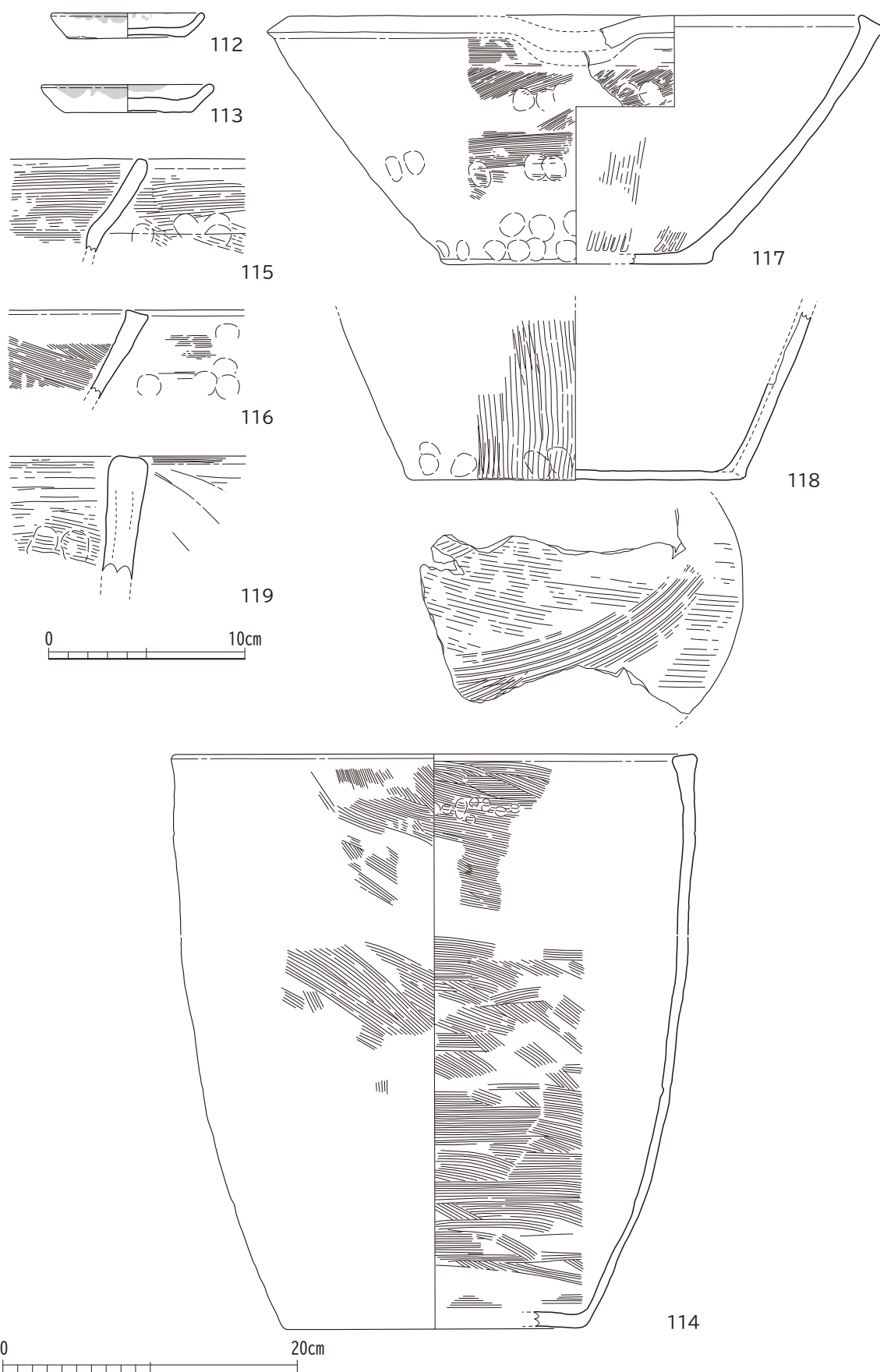
鍋(115) 鍋で胴部はハケメ、口縁部はナデである。外面に煤が付着する。

鉢(116～119) 116は播鉢の口縁部である。口縁端部と口縁部内面はヨコナデで、胴部内面は細かいハケメの後に播目を施す。胴部から口縁部にかけて外面に煤が付着する。117は片口(播鉢)で底部からゆるやかに開く。播目は5本単位である。胴部下端から底部外面にかけて煤が付着し、底部は特に煤の付着が顕著である。内面は使用により器面が摩耗し平滑で、播目は底部以外ほとんど遺存しない。118は鉢で、外面は胴部が縦方向のハケメ、底部と胴部の接合部にユビオサエが残る。119は火鉢の口縁部である。外面はナデ仕上げ、口縁部はヨコハケが残り、内面はハケメの後ナデである。

陶器

椀(120・121) 120は胴部からやや屈曲して口縁部が垂直に立ち上がる。内外面とも施釉で、鉄釉に白色釉を重ね掛けする。121は内外面施釉で高台畳付と高台内は露胎である。腰に圈線がめぐる。

皿(122) 折縁皿の口縁部で、残存部は内外面施釉である。



第 21 図 村下遺跡 F 地点 SX03 出土遺物実測図 1 (114 は S=1/4、その他は S=1/3)

蓋（123）蓋のかえりが内傾し、受け部は水平に伸びる。やや高さのある天井部がつく。外面は施釉で口縁から内面にかけては露胎である。外面は白土の刷毛引きに透明釉が掛かる。

瓶（124）頸部から外に開く口縁部がつく。残存部は内外面施釉である。

鉢（125・126）125・126は擂鉢である。125の口縁部は強く外に屈曲し、口縁部屈曲部下に三角粘土を貼り付ける。胴部には横方向に細かな凹凸がわずかに認められ、叩き成形の可能性がある。残存部は内外面とも施釉である。126は備前産の擂鉢で、胴部から口縁部が直立して立ち上がる。

器種不明（127）胴部片だが器種など詳細は不明である。外面施釉であるが、釉が泡立っており、強く被熱した可能性がある。

磁器

椀（128～131）128・129は青磁椀で、128は連続する弧状文と斜行文を組み合わせた蓮弁文を配す龍泉窯系の椀である。129の口縁部は輪花状である。内外面施釉で釉は厚い。130・131は染付椀である。130は底部を欠くが、外に開く器形で外面に草花文を描く。131は底部で高台は高く直立する。胴部外面に格子文を描き、高台には複数の圈線を描く。見込みにも詳細不明の文様を施す。高台畳付釉剥ぎである。

小杯（132）染付の小杯である。底部から外に開く胴部がつき、口縁部はやや反る。

皿（133～137）133・134は染付の皿で、133は直立する高台からゆるやかに外に開く口縁部がつく。口縁部は輪花である。染付の絵柄は不明で、高台畳付釉剥ぎである。134は見込みに団龍文が描かれ、口縁部外面に圈線がめぐる。高台内には口内に「福」がみられる。135は肥前産の蛇目凹型高台の皿である。口縁部を欠損するが、低い高台から腰の部分で湾曲する器形である。外面に草花文と圈線、内面に樹木が描かれる。136は高台から浅く開く器形である。高台はやや外に開き、底部は器壁が厚い。内面見込みは蛇目釉剥ぎで、外面は胴部から高台内が露胎である。137は高台からゆるやかに外に開く器形で、口縁部はわずかに外反する。高台畳付釉剥ぎである。

土製品

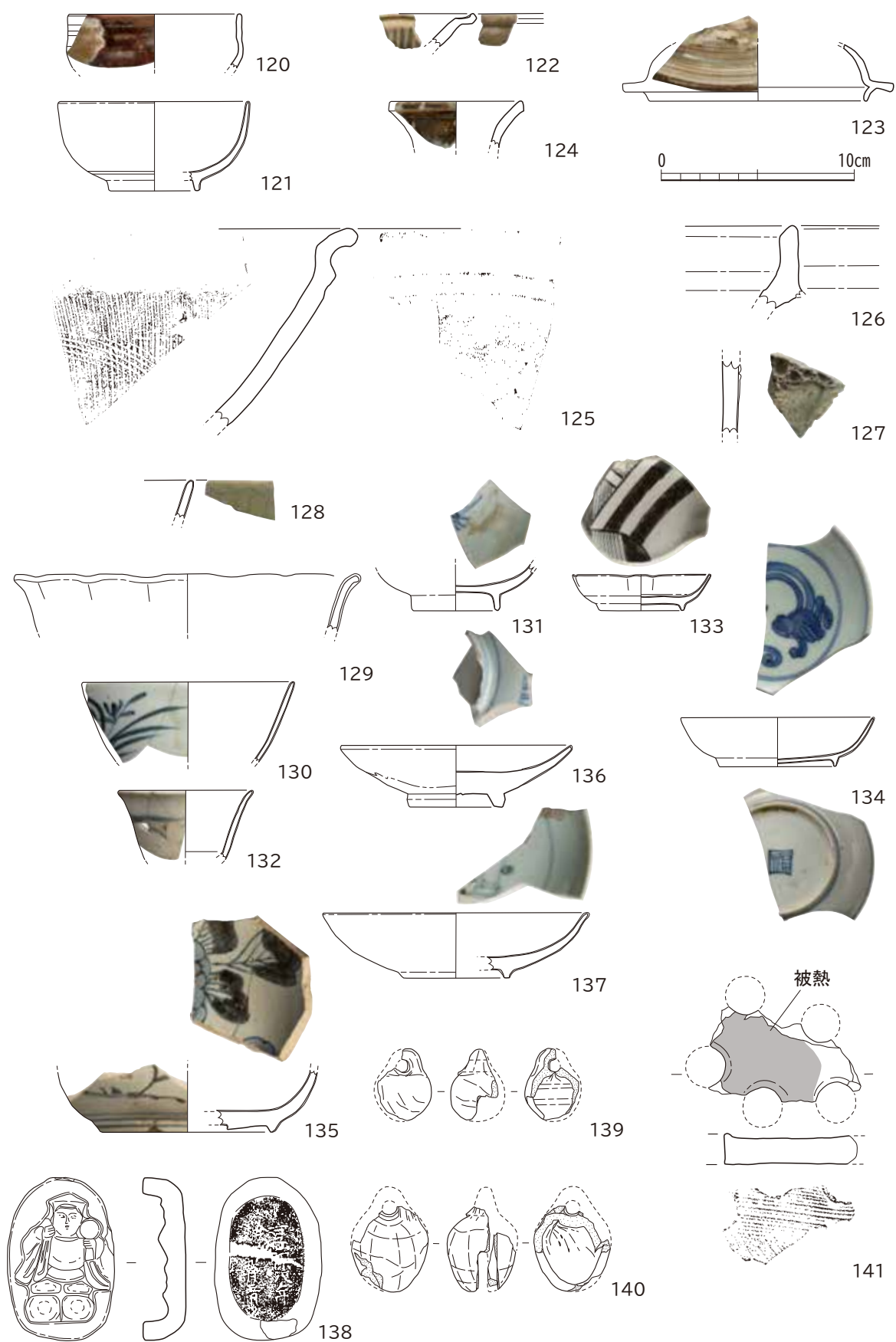
土製人形型（138）ほぼ完形の大黒天の土人形型の表である。裏面に享保八年癸卯（卯）五月五日との彫り込みがある。最大長は6.5cm、最大幅は4.9cmである。

土鈴（139・140）139は土鈴のほぼ半分が残存する。紐孔部分は頂部まで一部残存し全形をほぼ知ることができる。鈴口がわずかに残る。最大径は3.0cmに復元でき、紐孔径は0.7cmである。内外面はナデ成形、内面上部はシボリ痕様の痕跡がみられる。140もほぼ半分が残るが紐孔は基部のみ残存する。内外面はナデで整形する。内面上部にシボリ痕がみられる。最大径は4.0cmに復元できる。

サナ（141）5ヶ所の穿孔部の一部を確認できる。上面はナデ、下面はハケメである。上面は濃く煤が付着し被熱する。孔径は2.0cmに復元できる。

SX03/P16（第8図）

出土遺物のラベルにSX03とP16が併記されており、両遺構の遺物が混在している可能性がある。そのため、上記SX03とは区分した。P16は、SX03にとくに近接するわけではなく、Ⅱ区中央部に位置するSX04の北縁中央部近くに位置するピットである。



第 22 図 村下遺跡 F 地点 SX03 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

出土遺物（第23図）

瓦質土器

甕（142）内傾する胴部から短く肥厚する口縁部が直立する。口縁部に一部煤が付着する。

陶器

椀（143）口縁部はわずかに外反する。鉄釉に白色釉を重ね掛けする。

皿（144）144の口縁部は溝縁状になる。高台畳付に目跡、内面見込みに砂目跡が残る。胴部外面下半から高台内は露胎である。肥前産であろう。

壺（145）小片のため詳細不明だが、壺の口縁部であろう。直立する頸部から口縁部がやや外に張り出す。口縁部上面は丸みをおびる。

磁器

椀（146～151）146は陶胎染付の椀であろう。腰に植物文が描かれる。内外面施釉で、畳付と高台内は釉剥ぎである。147は龍泉窯系青磁椀で、口縁端部がやや反る。148は外に開く器形の染付椀である。外面には草花文を描く。149は口縁端部がわずかに反る染付椀である。口縁端部に口銹状の縁取りがなされる。150はくらわんか椀で、底部を中心に器壁が厚く、口縁部が開く。胴部外面の○文内に斜線を描く。そのほかにも×文などが描かれる。見込みは蛇目釉剥ぎ、外面は高台畳付釉剥ぎである。151は肥前産染付青磁椀で、口縁部が直線的に開く。口縁部内面に四方禪文、見込みに圈線が描かれる。内外面施釉であるが、内面に透明釉、外面に青磁釉が掛け分けられる。

猪口（152）碁笥底でやや内湾して口縁部にいたる。外面には草花文とその下に櫛歯文が描かれる。内外面施釉で、高台部のみ露胎である。肥前産であろう。

蓋（153）染付の蓋で口縁部の返しは短く突出する。外面に山や波などを描く。内外面施釉だが、口縁部返しから口縁部内面は釉剥ぎで、熔着防止のための砂が付着する。

皿（154～157）154は紅皿で、型押成形である。胴部外面以下高台内は露胎である。155は皿で口縁部はゆるく外反する。胎土は精良で混入物が非常に少ない。口縁部内面に圈線とその下位に花卉文、外面は腰に圈線を入れる。染付の発色がよく、明代の青花の可能性があろう。156は染付の皿で口縁端部が反る。外面口縁部下に二条の圈線をめぐらせ、内面は胴部に花卉文、見込みに圈線を配す。157は蛇目凹形高台の皿である。見込みには草花文を描く。外面は高台脇に圈線が三条めぐる。高台畳付と蛇目釉剥ぎ部分以外は施釉である。肥前産。

瓶（158）染付の瓶で、外面に梅、胴部下半に圈線が描かれる。内面は無釉である。

瓦

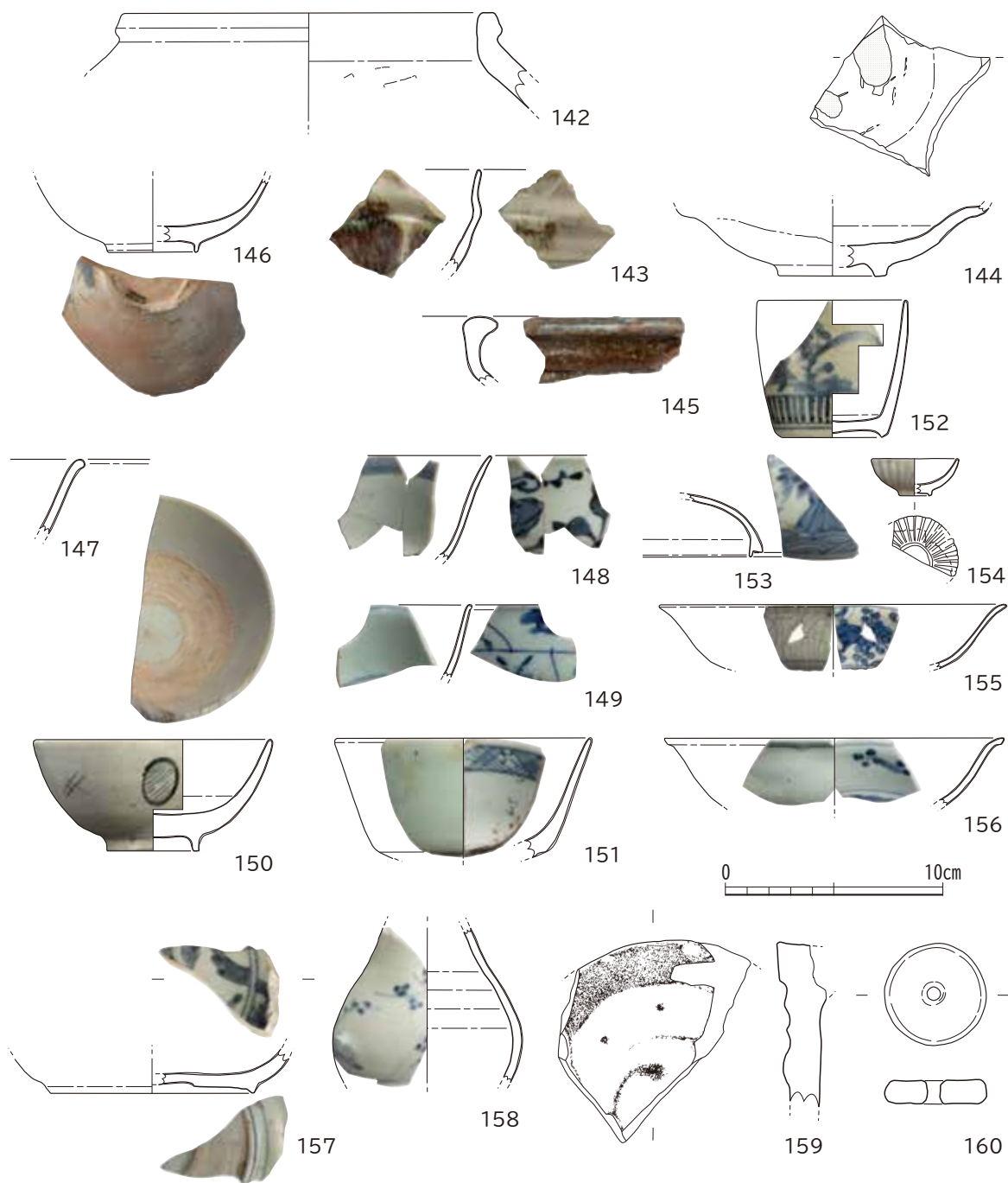
軒丸瓦（159）瓦当で三つ巴文とその周辺に珠文がめぐる。丸瓦部分との接合部で剥離しており、接着面に細かな刻み目が施される。

土製品

紡錘車（160）土製紡錘車の完形品である。直径4.7cm、厚さ1.1cm、重量29.3gである。全面丁寧なナデで表面を平滑に仕上げる。

SX04（第8図）

Ⅱ区中央部に溝状に広がる性格不明の遺構である。遺構範囲の東側は不規則な形状を呈する。

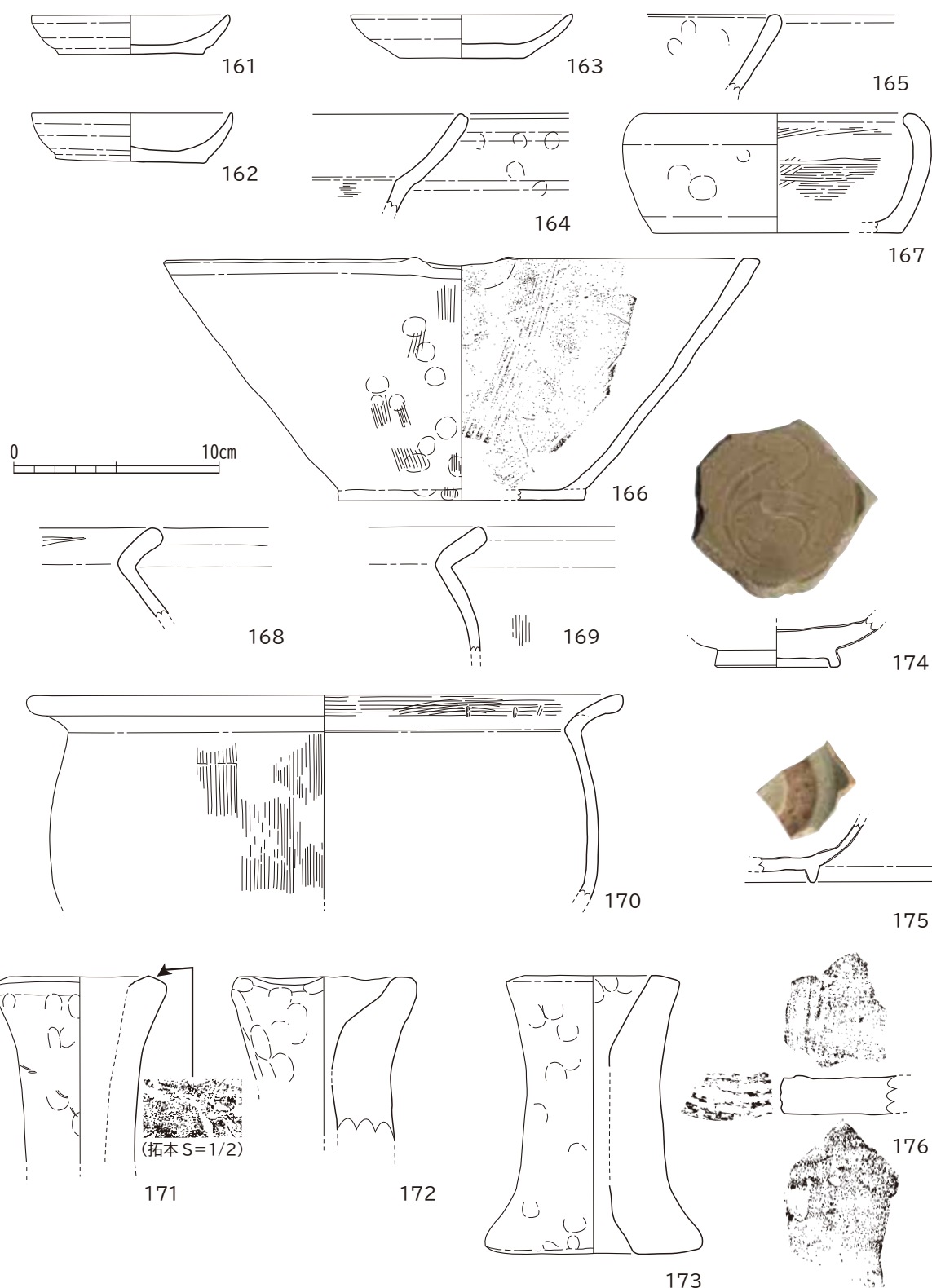


第 23 図 村下遺跡 F 地点 SX03/P16 出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物 (第24図、図版7)

土師器

皿 (161 ~ 163) 161から163は小皿である。161は底部糸切り後ナデで、その他の部分は回転ナデである。口径は9.6cmに、底径は7.0cmに復元でき、器高は1.9cmである。162の底部も糸切り後ナデである。口径9.8cm、底径7.3cm、器高2.5cmである。163の底部は静止糸切り、体部外面から底部内面にかけては回転ナデである。口径は10.8cm、底径は6.0cmに復元でき、器高は2.1cmである。



第 24 図 村下遺跡 F 地点 SX04 出土遺物実測図 (S=1/3)

瓦質土器

鍋 (164・165) 164は鍋の口縁部で、体部から屈曲して内湾する口縁部がつく。外面に煤や炭化物が付着する。165も口縁部片で、外面に煤や炭化物が付着する。

鉢（166）播鉢で外に直線的に開く。内面は使用で摩耗が著しい。

火鉢（167）底部から口縁部に向かって内湾する。体部から底部内面に掛けて煤が付着する。口径は13.5cm、底径は12.0cmに復元でき、器高は5.8cmである。

弥生土器

甕（168～170）168から170は「く」の字に口縁部が屈曲する甕である。168は口縁部内外面がヨコナデ、胴部内面はナデで外面はハケメである。169は胴部最大径より上部がやや丸みをもって胴が張る。口縁部外面はヨコナデで、胴部はハケメである。内面は器面の荒れのため調整不明である。170は口縁端部がやや肥厚する。口縁部内外面はナデで、内面はナデによる擦過痕がみられる。胴部外面はハケメ、内面はナデである。

支脚（171～173）171は支脚の上半部で、端部に布目のような痕跡が残る。172は支脚の上端部で上端部径は9.0cmである。173は下端部の器壁が厚く、体部から上端部に向かって器壁が薄くなる。

磁器

椀（174）龍泉窯系青磁椀（太宰府分類椀Ⅳ類）である。胴部に比べ底部が厚く、高台内の削りが浅い。見込みに片彫文が施される。内外面施釉で、高台畳付と高台内中心部を円形に釉剥ぎしている。

皿（175）陶胎染付の皿であろう。内面底部と胴部の境に染付の圈線を配す。見込みは蛇目釉剥ぎで胴部内外面は施釉だが高台内は露胎である。

瓦

軒平瓦（176）軒平瓦片で、瓦当面に重弧文が施される。凹面には布目残り、凸面はナデである。色調は凹面、凸面ともに浅黄橙色である。最大厚は1.7cmである。

SX05（第8図）

Ⅱ区の東半部で北壁から南壁まで広がる形状が不明瞭な遺構である。遺構範囲の北側ではSD01を一部削平し、南側では複数の溝状の形状をしている。

出土遺物（第25～30図、図版7・8）

土師器

皿（177・178）177・178は小皿で、177は底部ヘラ切り、体部外面から底部内面までは回転ナデである。口縁部外面に煤が付着している。口径は7.5cm、底径5.6cm、器高1.0cmである。178は底部が糸切りで、その他の部分は回転ナデである。口縁部外面に煤が付着する。口径は7.4cmに復元でき、底径は5.6cm、器高は1.1cmである。

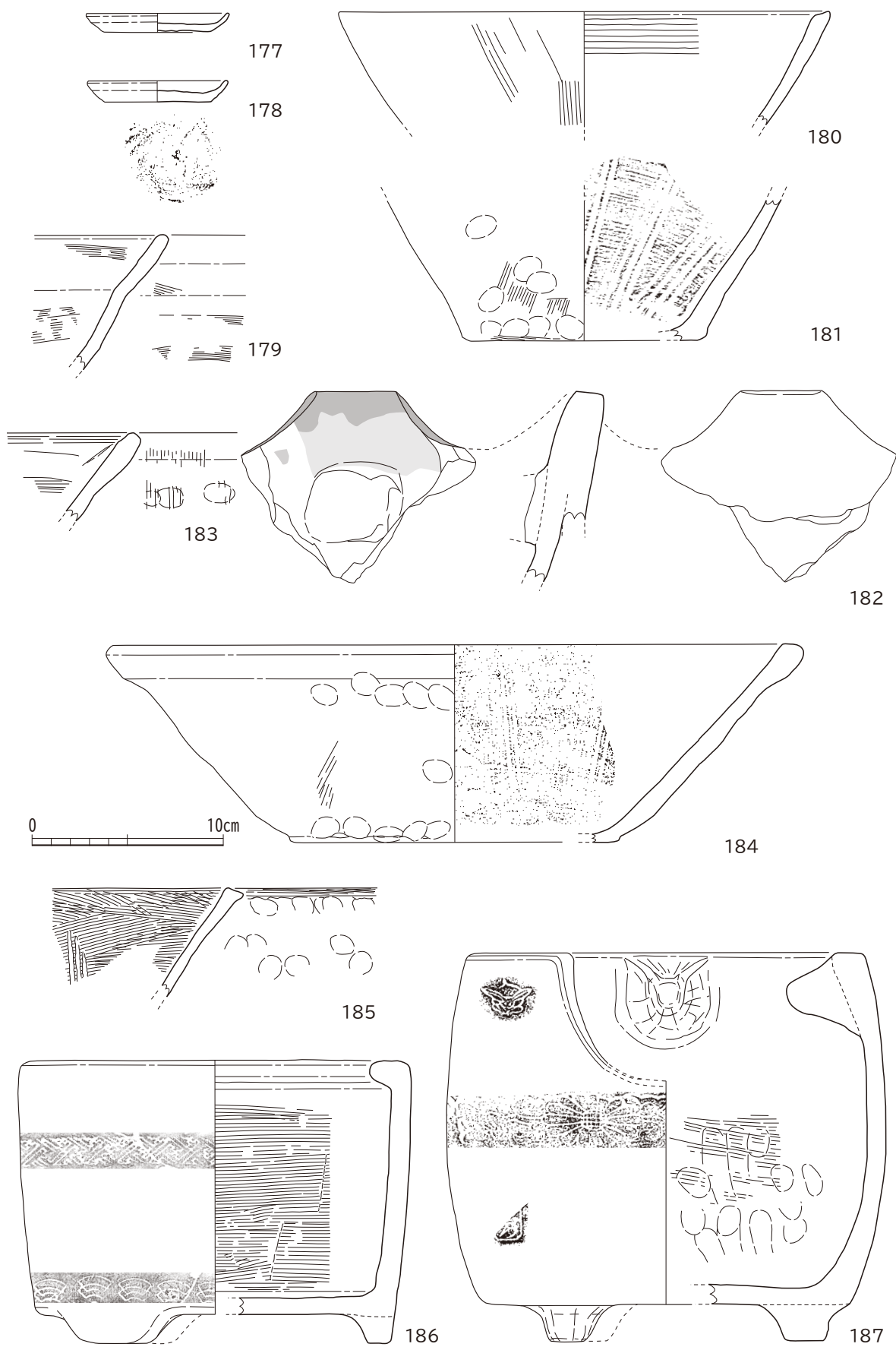
鍋（179）口縁部が内湾気味に外に開く鍋である。外面に煤や炭化物が付着する。

鉢（180・181）180は鉢で、内外面ともにぶい橙色である。口径25.7cmに復元できる。181は播鉢の底部で、内面は使用によって摩耗が進む。底径は12.8cmに復元できる。

七輪（182）二重構造の七輪である。サナの受け部が基部のみ残存する。端部から内面にかけ被熱し、煤が付着する。

瓦質土器

鍋（183）鍋で口縁部はやや肥厚する。外面は被熱を受け煤が付着する。



第 25 図 村下遺跡 F 地点 SX05 出土遺物実測図 1 (S=1/3)

鉢（184～187）184・185は播鉢である。184の播目は胴部のみ確認できる。本来底部近くにも播目はあったが使用のためにほぼ消失する。口径は36.4cm、底径は17.2cmに復元でき、器高は10.3cmである。185は口縁部片で、内面にハケメの後播目を施す。186と187は火鉢である。186は脚部が付き、直立する胴部から口縁部が内側に短く屈曲する。外面口縁部下位に紗綾文、脚部上位に扇形のスタンプ文が施される。口径は20.4cm、底径は18.7cmに復元でき、器高は14.8cmである。187は円柱状の脚部が付く。やや湾曲して立ち上がる胴部から口縁部にいたる。端部内側に受け部の突起がつく。外面にウサギと菊花唐草のスタンプ文が施される。胴部下位には押印（「衛」？）がみられる。口径は20.6cm、底径19.1cmに復元でき、器高は20.3cmである。

風炉（188）風炉の破片で、口縁部は短く直立する。外面は器面の荒れのため調整不明だが、口縁部は横ナデ、口縁部から胴部上半部の内面は横方向のハケメである。内面は被熱のため黒色化している。

湯釜（189）胴部最大径部に半円形の耳部が付き、肩から口縁部が短く直立する。器面が荒れているが外面は一部でミガキの痕跡がみられる。外面肩部に3個一単位の梅花スタンプ文を施す。耳部とその上部まで煤が著しく付着している。

甕（190）甕の底部で器表面の剥離が随所にみられる。底径は26.4cmに復元できる。

器種不明土器（191）器種不明の胴部あるいは底部片である。内面と推定される面は櫛目文、外面はハケメである。

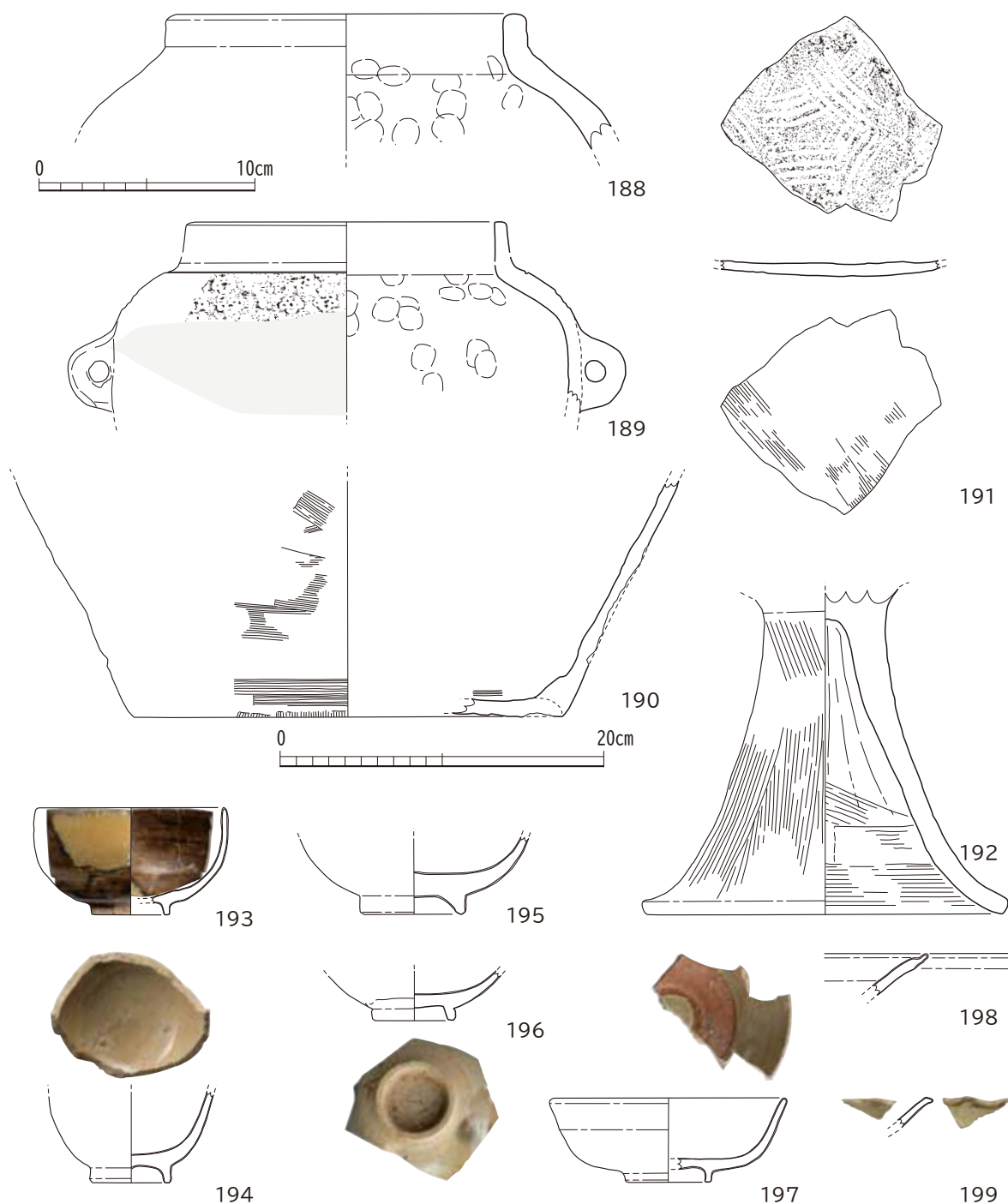
弥生土器

高杯（192）高杯の脚部で裾部に向かってゆるやかに広がる。杯部との接合部近くは横方向のナデで、脚部外面は縦・斜め方向のハケメである。脚裾部付近はハケメをナデ消す。

陶器

椀（193～196）193は丸みをおびた椀である。内外面施釉で高台は露胎である。口径は8.8cmに復元でき器高は5.0cmである。194は胴部から外に開く。内面見込みに銅緑釉を掛ける。畳付釉剥ぎである。高台内には兜巾がみられる。肥前産か。195は椀の底部で体部に比べ器壁が厚い。高台内の兜巾はなく、畳付釉剥ぎである。196も椀の底部で内外面施釉である。

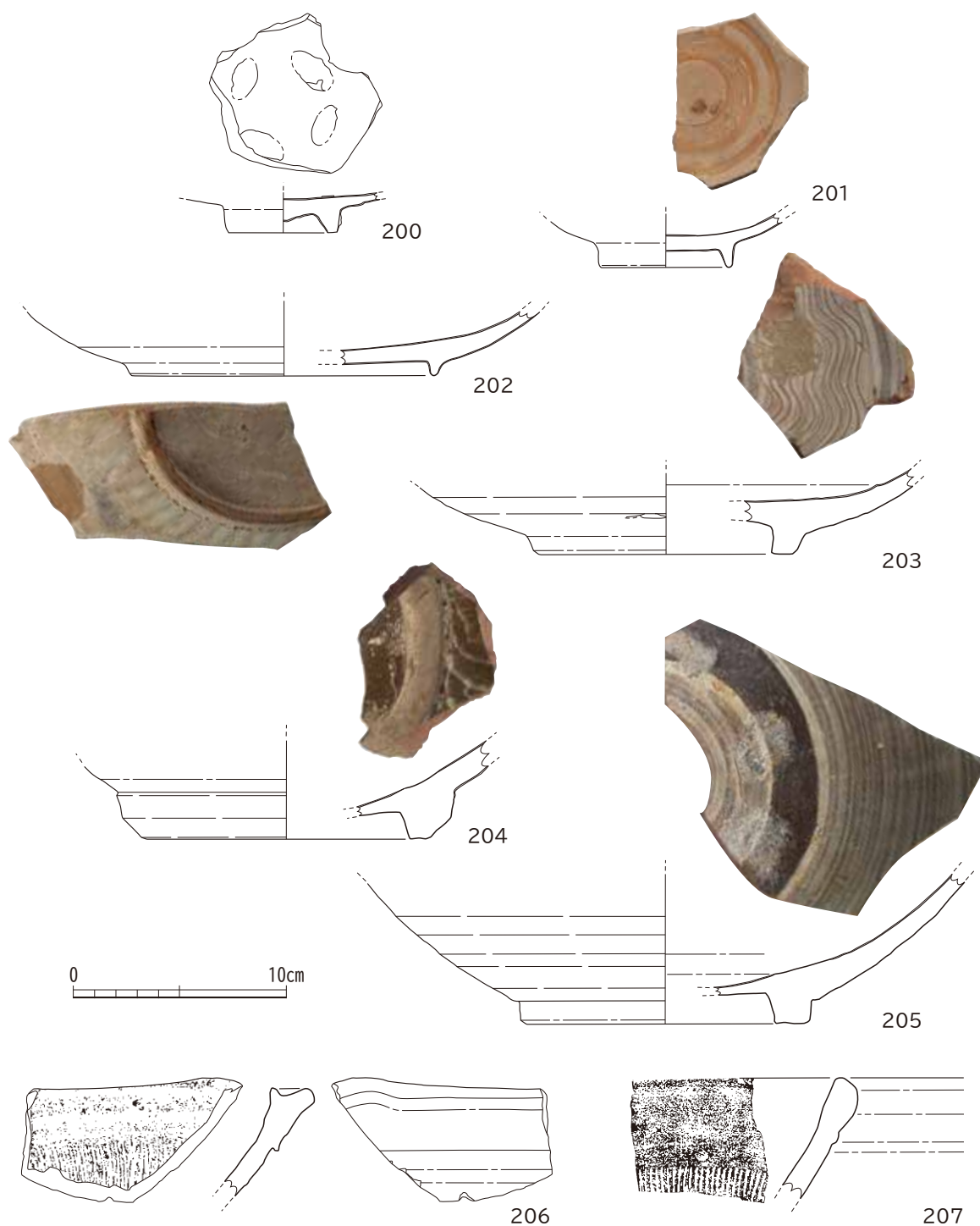
皿（197～205）197は口縁が外に開くやや身の深い皿である。内外面施釉で銅緑釉を掛ける。見込みは蛇目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分に重ね焼きの痕跡が残る。高台畳付は釉剥ぎである。肥前産であろう。198は溝縁皿の口縁部である。内面から口縁部外面まで施釉でその他の部位は露胎である。199は波状を呈する口縁部である。内外面に灰釉が施される。200は皿底部で、高台内には兜巾がみられる。残存部には全面に釉が掛かる。見込みは4か所の砂目跡がみられ、高台にも目跡が残る。肥前産であろう。201も皿の底部で、残存部は内外面施釉である。見込みは蛇目釉剥ぎ、高台畳付釉剥ぎである。肥前産であろう。202から205は大皿で、いずれも肥前産であろう。202は高台が低い。高台畳付釉剥ぎである。203は厚みのある高台を削り出す。白土刷毛による波状文を施す。見込みには砂目跡が残る。残存部外面は露胎である。204も厚みのある高台をケズリ出す。削りが深く底部の器壁が薄い。内面施釉で見込みは蛇目釉剥ぎで砂目跡が残る。外面は胴部下位まで施釉し、高台は露胎である。205も高台内は削りが深く底部の器壁が薄い。内面は白化粧土刷毛塗りで渦文を



第 26 図 村下遺跡 F 地点 SX05 出土遺物実測図 2 (190 は S=1/4、その他は S=1/3)

描き、透明釉をかけた後、見込みは蛇目釉剥ぎを施す。釉剥ぎ部分には鉄漿と思われる暗褐色の物質を塗布する。外面は露胎で、高台畳付に目跡が残る。

鉢 (206 ~ 208) 206は播鉢である。口縁部は肥厚し、端部上面が窪む。内面には播目の上端部がみられる。ロクロ成形である。鉄釉を内外面に掛ける。207も播鉢で内外面施釉である。内面に播目の一部がみられる。208は脚付の鉢で、底部から植木鉢状に直線的に外に開く。口縁部は内外面に突出し、上面は丸みをおびる。口縁部外面から脚部は施釉で、底部は内面、外面ともに露胎で

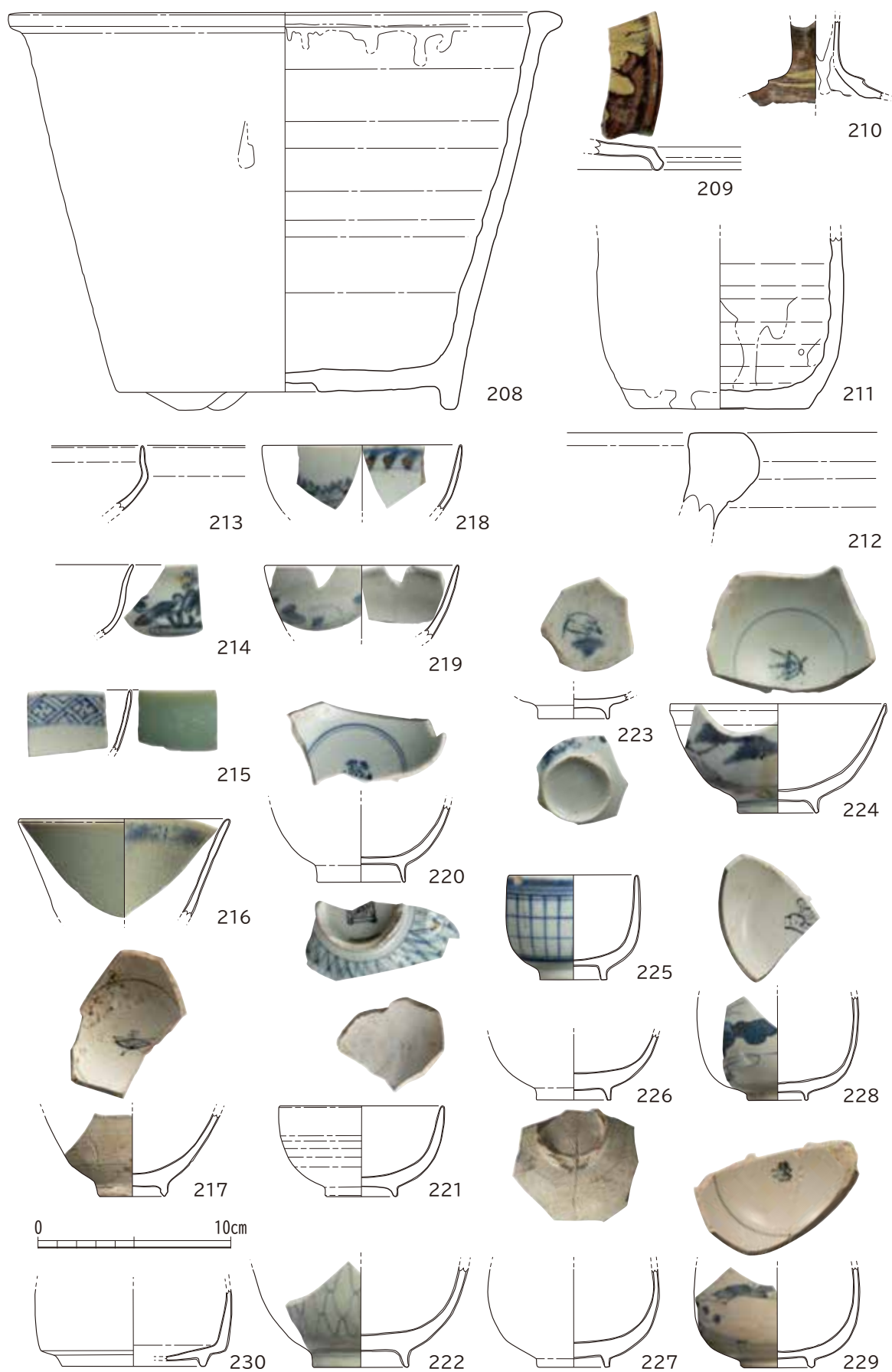


第 27 図 村下遺跡 F 地点 SX05 出土遺物実測図 3 (S=1/3)

ある。底部内面に砂目が付着する。口径は28.3cmに復元でき、器高は20.6cmである。

蓋（209）蓋の口縁で天井部から口縁部が斜めに折れる。残存部は内外面施釉である。

瓶（210・211）210は瓶の頸部で、肩が外に広がる茶筌形の器形であろう。外面施釉で、内面は釉だれがみられる。211は瓶の底部である。胴部外面は施釉であるが、胴部の最下部から底面は無釉、内面は無釉で釉だれがみられる。



第 28 图 村下遺跡 F 地点 SX05 出土遺物実測図 4 (S=1/3)

大甕（212）大甕の口縁部である。口縁部外面は丸く膨らみ、端部上面は平坦面をなす。口縁部のみのため詳細は不明だが、口縁下位にタタキの痕跡が残る。内外面施釉である。

磁器

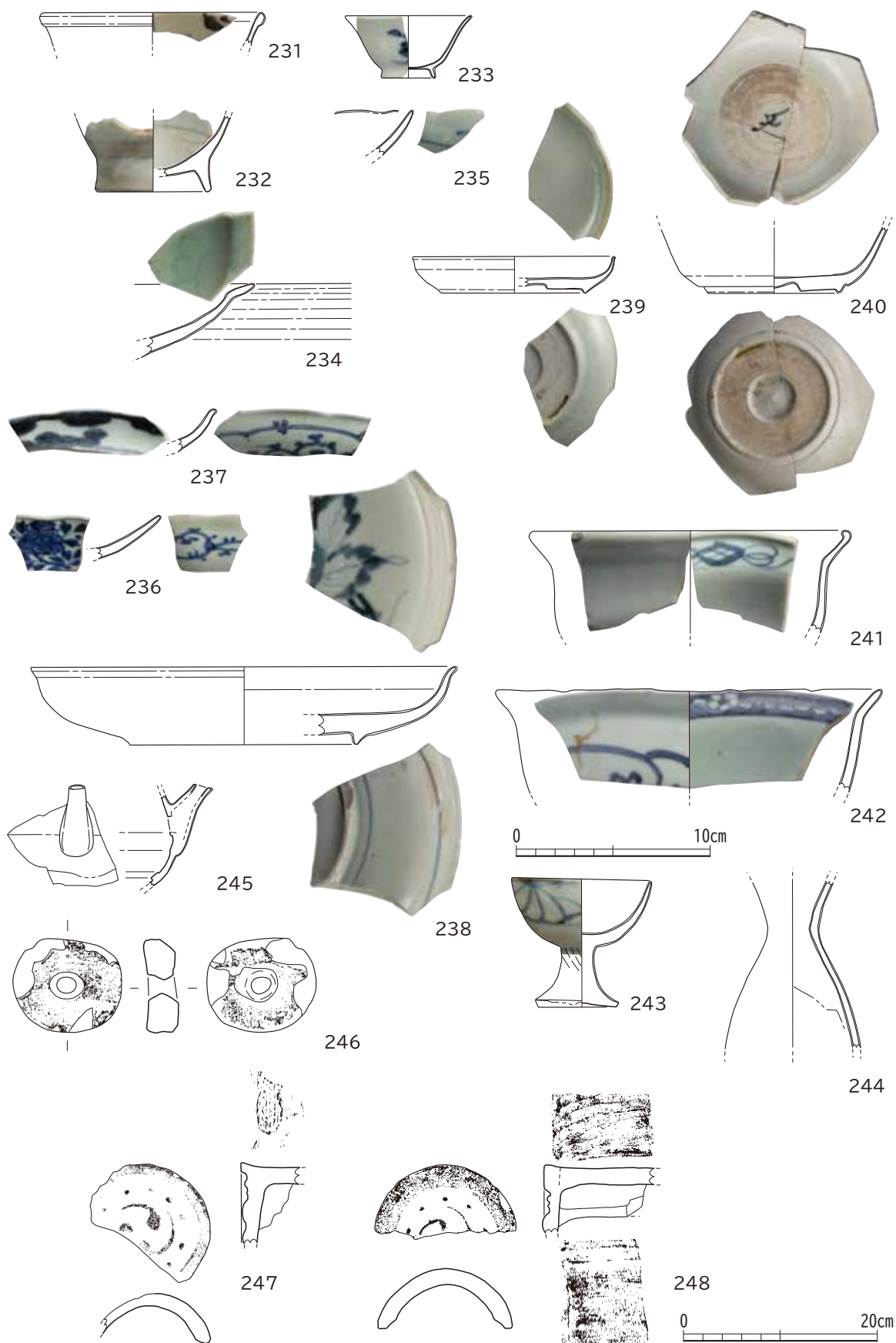
碗（213～232）213は青磁碗で、胴部で屈曲しやや外に反る口縁部がつく。230以外の214から232は染付碗である。214は口縁部端反りの碗で、腰がやや張る。外面に草花文を描く。215は内面に透明釉、外面に青磁釉が掛け分けられる染付青磁碗である。口縁部内面に若干簡略化した四方襷文が描かれる。肥前産。216は朝顔形に開く。口縁部内面に四方襷文が描かれ、内面は透明釉で外面には青磁釉が掛かる染付青磁碗である。肥前産。217は肥前産陶胎染付の碗で、高台からややすぼまり気味に胴部が開く。見込みに圏線と宝ないしは虫が入り、胴部外面下位に圏線とその上に詳細不明の連続文が描かれる。高台畳付釉剥ぎである。218は丸みをおび口縁部にいたる。口縁部内面に連続文、外面に草花文が描かれる。219は口縁部が開く。外面に草花文、口縁部内面に圏線が描かれる。220は底部や高台の器壁が薄い。見込みに五弁花文、外面に網目文が描かれる。高台内に角形枠取りの渦「福」銘がつく。肥前産。221は陶胎染付で、見込みに二重圏線がめぐり中央部にコンニャク印判で五弁花文が付される。222は底部が厚く、外面に網目文を持つ。畳付け釉剥ぎである。肥前産。223は碗の底部で見込みに鷺が描かれる。224は口縁部が開く碗である。内面見込み、外面に染付で文様が描かれる。胴部中央部や口縁部内面に圏線がめぐる。225は腰からやや内傾気味に口縁部にいたる小ぶりの碗である。外面に格子文が描かれる。肥前産であろう。226は陶胎染付碗で、底部が厚みを持つ。高台内、高台脇に圏線がめぐる。畳付け釉剥ぎである。肥前産であろう。227は底部が厚く、腰が張り、口縁部にむかってやや内湾する。肥前産であろう。228も腰の張った胴部が内湾気味にのびる。高台が低い。外面に草花文、見込みに樹木が描かれる。229は陶胎染付で、腰が張りやや器壁の厚い胴部から口縁にむかって内湾気味にのびる。外面に花卉文、内面に圏線がめぐり見込み中央部に「寿」？がつく。肥前産であろう。230は筒形碗で、低い高台の脇で屈曲して胴部が内湾気味に筒状にのびる。231は玉縁口縁の染付碗である。口縁部内側面に文様を配す。232は広東碗の底部で内外面に圏線がめぐる。

小杯（233）器壁が全体的に薄く、口縁部が広く開く。外面に草花文が描かれる。

皿（234～240）234は折縁口縁の皿で内面に菊花文がへう彫りされる。235は口縁部が輪花で、型打ち成形である。236から238は染付の皿である。236は型打ち成形の染付皿で、花卉状に器表面が波打つ。内面に牡丹、外面に唐草文が描かれる。237は口縁部が輪花で、端部がわずかに反る。内面に松、外面に唐草文が描かれる。238は端反り口縁の皿である。内面に草花文、外面高台脇に二重圏線が描かれる。239は明緑灰色の釉が掛かる青磁小皿であろう。底部は蛇目凹形高台である。肥前産。240は蛇目凹形高台、見込みは蛇目釉剥ぎで花枝が描かれる。肥前産。

鉢（241・242）いずれも染付の鉢である。241は受け口上の折縁口縁で、口縁内側面に圏線で区画をし、連続文を配す。肥前産であろう。242は輪花状口縁で、胴部から外に開く。口縁部内側面に花文と斜線文、外面に唐草文が描かれる。肥前産であろう。

仏飯器（243）染付の仏飯器で、杯部は深く口縁が上方に開きながらのびる。底面は削り出すが高台内の割り込みが浅く無釉である。外面に半菊花文の連続文を配置する。肥前産であろう。



第 29 図 村下遺跡 F 地点 SX05 出土遺物実測図 5 (247、248 は S=1/6、その他は S=1/3)

瓶（244）頸でいったん強くすぼまり、頸部から口縁に向かって外に開く。外面施釉である。

水注（245）注口部で注口部下位と内面は露胎である。

瓦

紡錘車（246）平瓦の転用品である。凸面・凹面ともに丁寧なナデで、燻し仕上げである。両面から穿孔がなされる。

軒丸瓦（247～252）247・248は左巻きの三つ巴文で巴文の尾が長い。247の珠文は10個と推定できる。燻し仕上げで、凹面端部に抜取り縄の痕跡がみられる。248は凹面の布目と短い沈線状の痕跡がみられる。249・250は左巻きの三つ巴文で珠文は9個、内区と外区の界線はない。燻し仕上げである。249は軒丸瓦であるが、瓦当面がほとんど剥落しており、丸瓦と瓦当の接合部に刻みが施されている。外面はヘラナデで、内面は布目が残る縦方向の掻き取り痕がみられる。250の凹面には抜取り縄痕と縦方向の粗い掻き取り痕がみられる。251は瓦当部分で、尾の長い右巻きの三つ巴文で珠文は8個である。内区と外区の界線はない。燻し仕上げである。252の凹面には沈線状の工具痕が散見される。

丸瓦（253～256）いずれも凸面は縦方向のヘラナデ、凹面は布目が残る。また、側縁部や端部は面取りが施される。253の凹面には縦方向の細かい掻き取り痕、255の凹面には粗い掻き取り痕がみられる。256の凹面には掻き取り痕と抜取り縄痕がみられる。

平瓦（257）平瓦の小片で、凹面、凸面ともナデ仕上げである。

SX06（第8図）

Ⅱ区北東隅近くの北壁沿いに位置し、一部調査区の北側に延びる。平面形は南西側に向かって先端部が細くなる。北壁部分で遺構の幅が最も広がる。

出土遺物（第31図）

瓦質土器

鉢（258）瓦質の火鉢で、底部からほぼ垂直に口縁部がのびる。器高は5.0cmと低い。

陶器

鉢（259）玉縁状の口縁を呈する鉢であろう。内外面施釉である。

瓦

平瓦（260）平瓦小片で、凹面はナデ、凸面はタタキの痕跡が残る。

SX07（第8図）

Ⅱ区の南東隅近くに位置する不整形の性格不明の遺構である。東壁沿いに位置しており、遺構の一部は調査区東側に広がる。

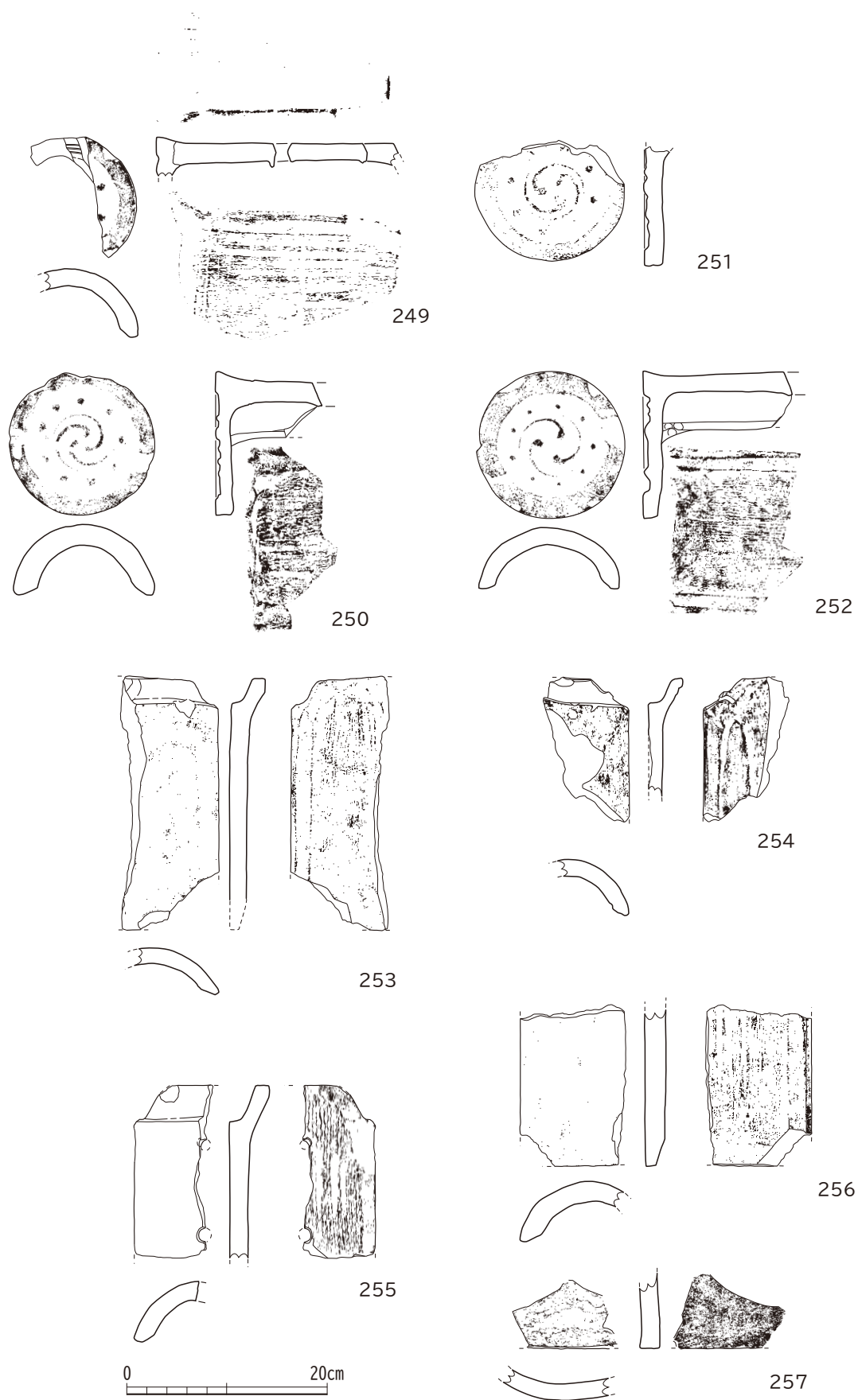
出土遺物（第31図）

陶器

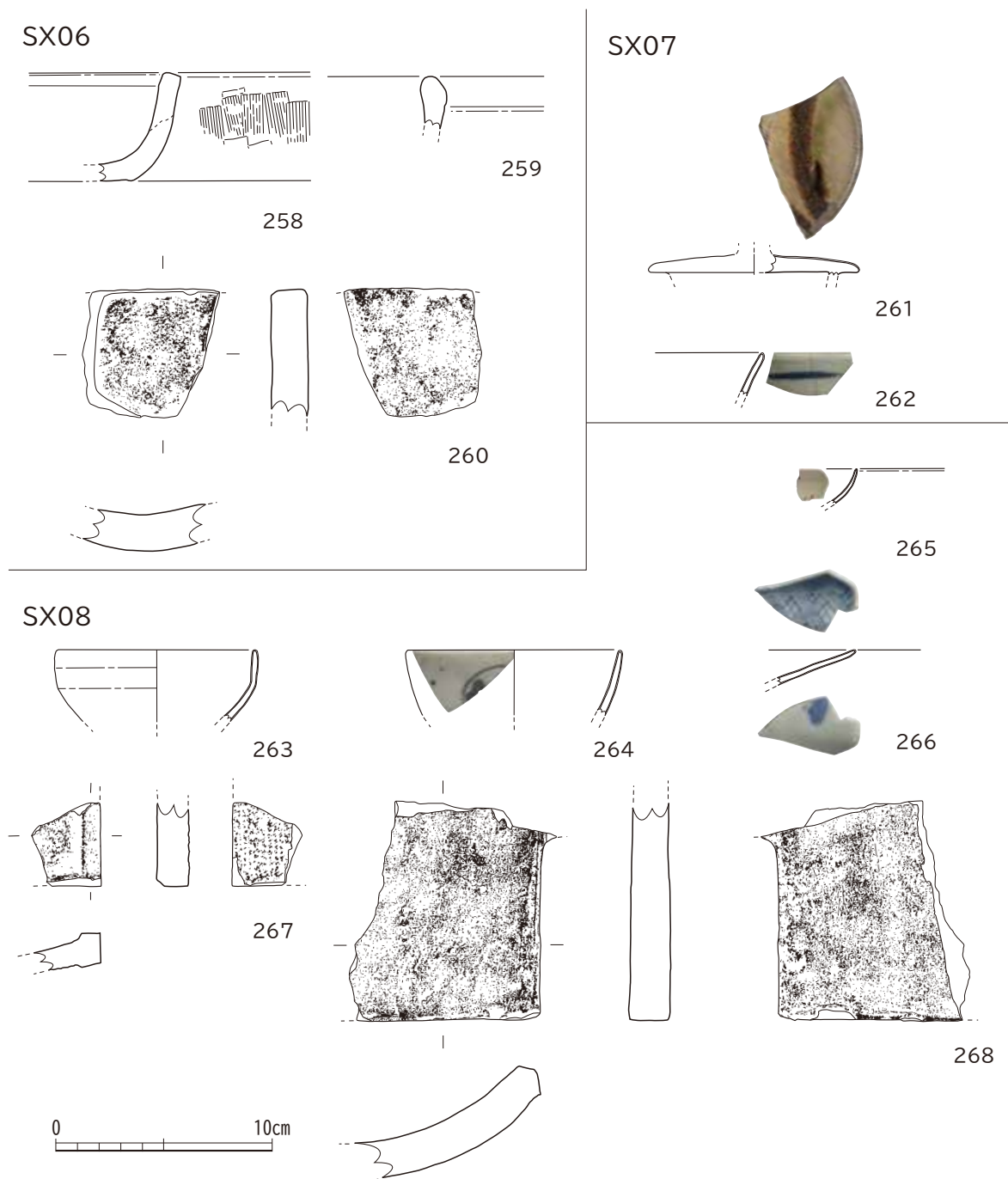
蓋（261）天井部を一部欠き、受け部の返しも欠損する。天井部からほぼ水平に口縁部にいたる。口縁部径は9.8cmに復元できる。外縁は施釉で褐釉を重ね掛けする。

磁器

椀（262）口縁部が外に開く染付椀である。外面に詳細不明の文様が描かれる。



第 30 図 村下遺跡 F 地点 SX05 出土遺物実測図 6 (S=1/6)



第 31 図 村下遺跡 F 地点 SX06、07、08 出土遺物実測図 (S=1/3)

SX08 (第8図)

Ⅱ区南東隅近く、SX07の西3mほどのところに位置する。平面は南側がやや膨らむ略方形を呈する。SP58の南西部分を削平する。

出土遺物 (第31図)

磁器

椀 (263・264) 263は胴部でゆるく折れ、垂直に口縁が立ち上がる。内外面施釉である。264は染付椀で、口縁部がゆるやかに外に開く。外面に文様が描かれるが詳細不明である。

皿（265・266）265は色絵皿の小片で、内面に白と赤で模様が描かれる。266は染付の角皿で、内面に四方襷文の簡略化した文様が描かれる。肥前産であろう。

瓦

棧瓦（267・268）棧瓦の破片で、267は凸面にタタキの痕跡が残る。268は棧瓦の切込み部分で、凹面・凸面ともナデである。

SX09（第8図）

Ⅱ区中央部南壁沿いに広がる不整形の落ち込みである。調査区南側に広がる。

出土遺物（第32図）

瓦質土器

湯釜（269）湯釜の耳部である。外面はナデ、内面は指頭圧痕が残る。

鉢（270）火鉢の口縁部である。口縁部外面に菊花文のスタンプ文が施される。

陶器

椀（271）椀の底部で、高台と高台内は露胎である。見込みに「福」か。外面は白化粧土を刷毛塗りし、鉄絵で木賊文が描かれる。

小杯（272）腰の張った胴部から垂直に口縁部にいたる。外面に鉄絵で雁が描かれる。

鉢（273・274）273は胴部から内湾して内側に突出し、口縁部が水平に外にのびる。口縁部内外面は無釉で胴部は施釉である。ロクロ成形である。肥前産であろう。274は擂鉢で底部は糸切りである。内外面に鉄釉が掛かり、擂目は使用により摩耗する。

水注（275）水注の注口部で外面施釉である。

磁器

椀（276・277）276は色絵の筒形椀である。外面に龍の頭部が色絵で描かれ、その下位は櫛歯文が入る。口縁端部釉剥ぎである。口径は12.4cmに復元できる。277は染付椀で口縁部が外に開く。詳細は不明だが外面に文様が描かれる。

小杯（278・279）278は小杯で高台畳付釉剥ぎである。279は外に直線的に開く胴部がつく。外面に草花文が描かれる。

皿（280）型打ち成形の白磁皿である。口径は12.8cmに復元できる。

瓶（281）高台が低く腰が張る。外面に山や松葉が描かれる。高台畳付は釉剥ぎ、内面は無釉である。

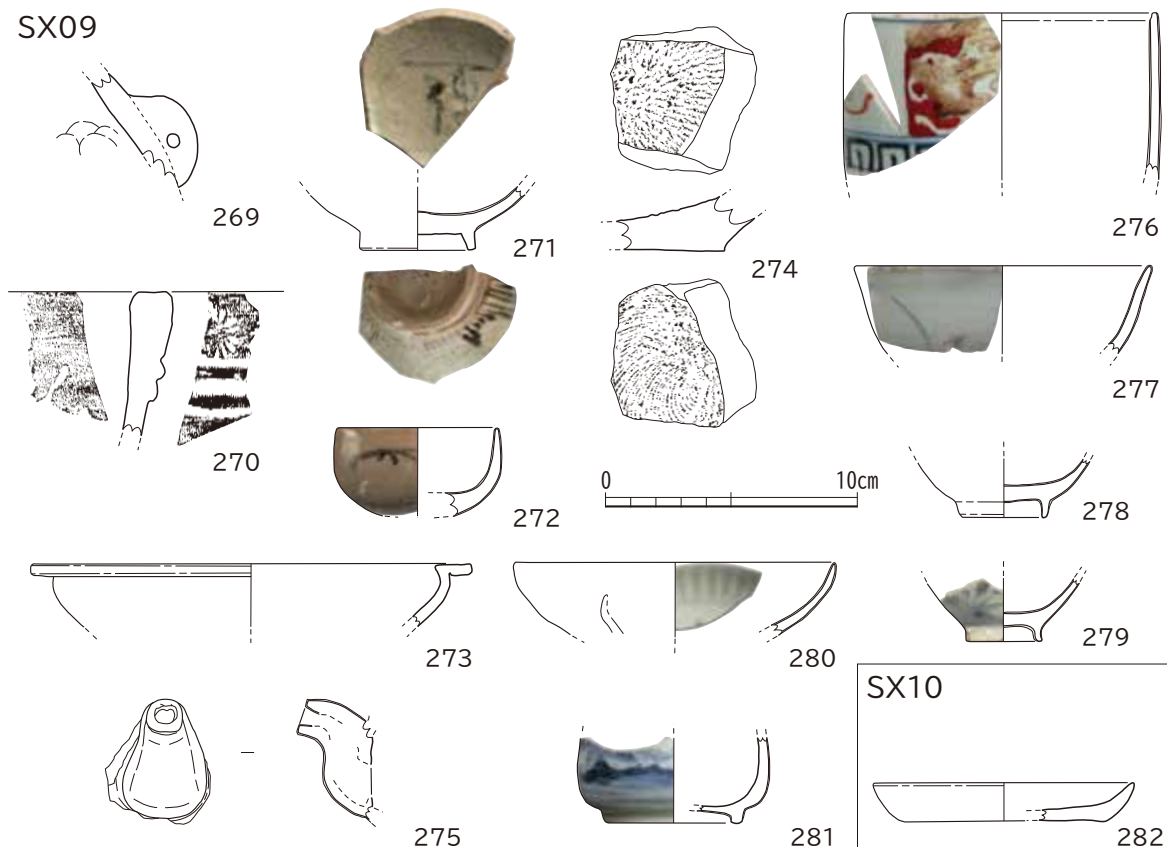
SX10（第8図）

Ⅱ区南西部南壁に接して位置する略長方形の性格不明遺構である。調査区の南側に続く。

出土遺物（第32図）

土師器

皿（282）土師器の小皿である。口径は10.4cm、底径は8.3cmに復元でき、器高は1.6cmである。



第 32 図 村下遺跡 F 地点 SX09、10 出土遺物実測図 (S=1/3)

5) ピット

P 1出土遺物 (第33図)

陶器

鉢 (283) 口縁部の内外面は無釉で、その下位は外面に鉄釉、内面には灰釉が掛かる。

磁器

椀 (284) 筒形椀で、外面に梅が描かれる。肥前産であろう。

P 5出土遺物 (第33図、図版8)

弥生土器

鉢 (285) 鉢の口縁部で、外面は縦方向のハケメ、内面から口縁部外面はナデである。

土製品 (286) 土製の馬の頭部である。厚みは薄い顔やたてがみなどが表現される。

鉄滓 (287) 最大長2.8cm、幅2.1cmの鉄滓で、重さは11.3gである。磁性は弱い。

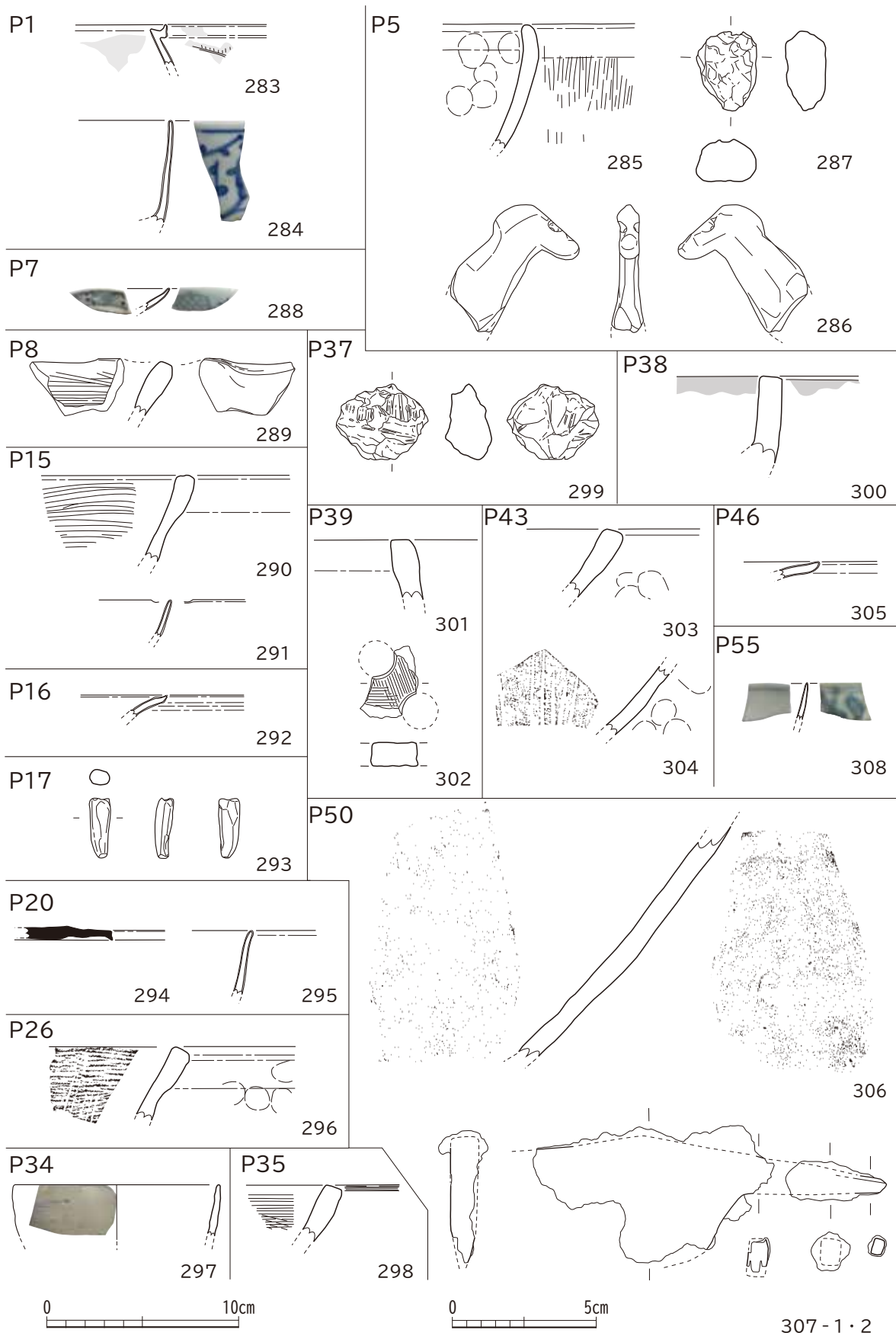
P7出土遺物 (第33図)

磁器

皿 (288) 染付皿の口縁部で、口縁内側面に四方櫛文がつく。肥前産であろう。

P 8出土遺物 (第33図)

瓦質土器



第 33 図 村下遺跡 F 地点ピット出土遺物実測図 1 (287、307 は S=1/2、その他は S=1/3)

鉢（289）捏鉢の片口部である。内面はハケメの後ナデ、外面はナデである。

P15出土遺物（第33図）

瓦質土器

鍋（290）口縁部が肥厚し、口縁下位で一端器壁が薄くなる。内面ハケメである。

磁器

皿（291）輪花状の口縁を呈する皿である。

P16出土遺物（第33図）

陶器

皿（292）陶器皿の口縁部小片である。内外面施釉である。

P17出土遺物（第33図）

土製品（293）性格不明の土製品だが、土馬などの脚になるような形状を呈する。

P20出土遺物（第33図）

須恵器

杯（294）杯Bの蓋で、口縁端部はわずかに下方に張り出す。

陶器

小杯（295）陶器の口縁部片で器壁が薄く、小杯であろう。内外面施釉である。

P26出土遺物（第33図）

瓦質土器

鉢（296）捏鉢の口縁部である。外面はナデで、指頭圧痕が残る。内面はハケメである。

P34出土遺物（第33図）

磁器

椀（297）染付椀で外面に文様が入る。

P35出土遺物（第33図）

瓦質土器

鉢（298）捏鉢の口縁部であろう。口縁端部と口縁下内面がハケメで、外面はナデである。

P37出土遺物（第33図）

粘土塊（299）土壁の細片であろうか、スサの跡が随所に残る。

P38出土遺物（第33図）

瓦質土器

鉢（300）底部から短く口縁部が立ち上がる。口縁部内面から端部にかけて煤が強く付着する。

底部付近には脚部が付いていた痕跡がみられる。器面は研磨やナデで平滑に仕上げる。

P39出土遺物（第33図）

土師質土器

風炉？（301）風炉あるいは火鉢の口縁部片であろう。内面に薄く煤が付着する。

土製品

サナ（302）サナの薄片で、穿孔部が2ヶ所確認できる。ハケメで仕上げた面が被熱する。

P43出土遺物（第33図）

瓦質土器

鉢（303・304）303は鉢の口縁部小片で外面下位には指頭圧痕がつき、口縁部から内面はナデである。304は擂鉢の胴部片で、内面にハケメが施されたのち擂目がつけられる。

P46出土遺物（第33図）

陶器

皿（305）皿の口縁部片であろう。内外面施釉で、口縁端部の釉が一部剥落する。

P50出土遺物（第33図、図版8）

瓦質土器

鉢（306）捏鉢であろう。内外面とも指頭圧痕が残るが外面はナデ、内面はハケメである。

鉄製品

庖丁（307）庖丁の基部（307-1）と同一個体の可能性が高い茎部（307-2）で、背が屈曲する。

P55出土遺物（第33図）

磁器

椀（308）染付椀の口縁部である。口縁部外面に二重圈線と詳細不明の文様、内面には圈線が一条めぐる。

P58出土遺物（第34図、図版8）

瓦質土器

鉢（309）火鉢の底部片である。底端部に脚部接合部の痕跡がみられる。

土師質土器

七輪（310）脚部が外に向きアーチ状を呈し、胴部はやや外に開き立ち上がる。脚部アーチの中央部を中心とした横長の窓口がつく。窓口上部付近の内面にサナを受ける断面三角形の突帯がつく。窓口付近に若干煤が付着するが、残存部内面の突帯下位には煤の付着は顕著ではない。

瓦

平瓦（311）燻し仕上げの小片である。内外面ヘラナデで、凹面に沈線状の工具痕が残る。

P61出土遺物（第34図）

磁器

椀（312）染付椀で、口縁部がゆるやかに開く。内外面施釉で、外面に円圈文がつく。

P66出土遺物（第34図）

磁器

椀（313）青磁椀の口縁部片である。口縁部が若干肥厚し玉縁状を呈する。

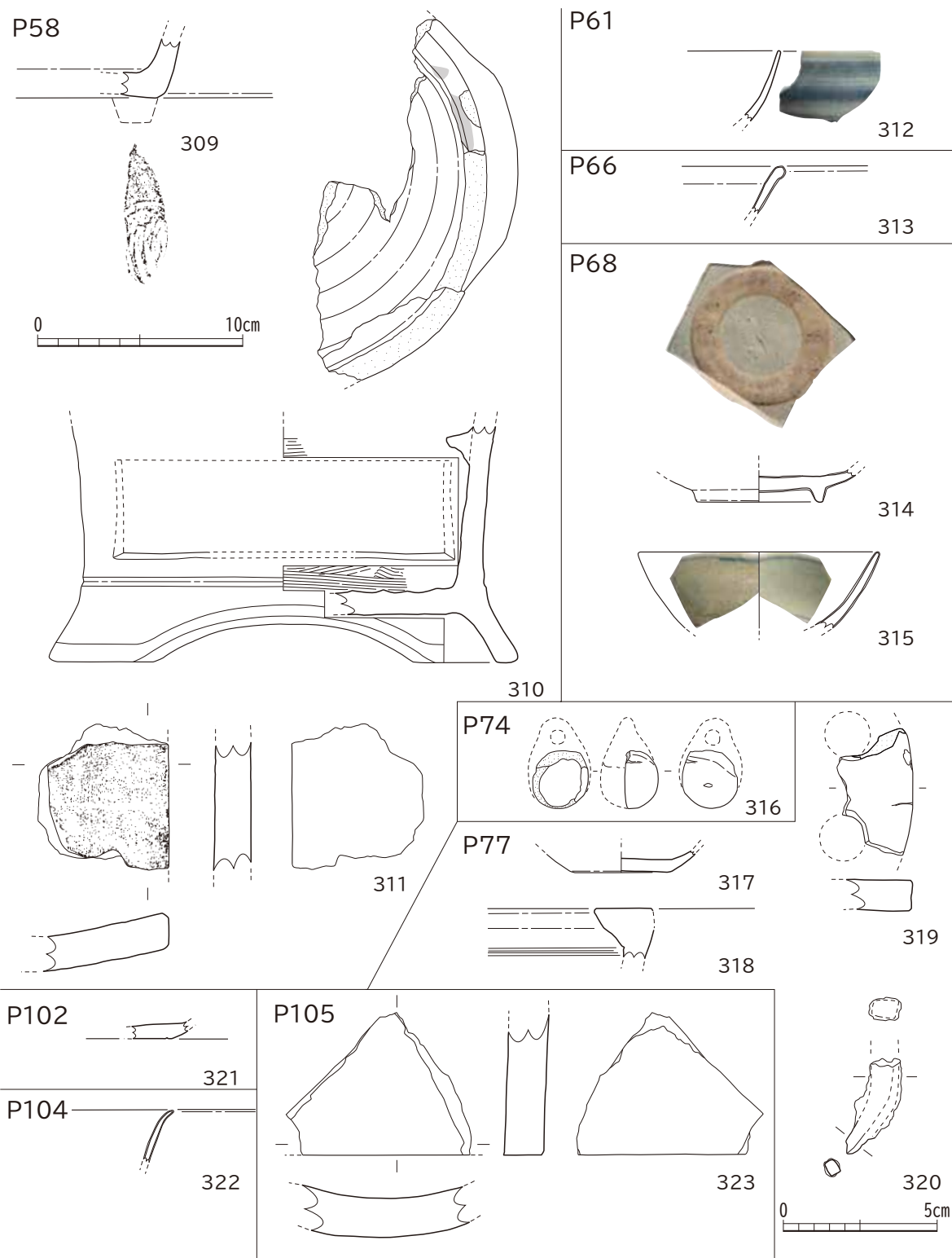
P68出土遺物（第34図）

陶器

皿（314）皿の底部片で、見込みは蛇目釉剥ぎで、高台畳付も釉剥ぎである。肥前産であろう。

磁器

椀（315）口縁部が外に開く陶胎染付の椀である。口縁外面と内面、見込みに圈線がめぐる。



第 34 図 村下遺跡 F 地点ピット出土遺物実測図 2 (320 は S=1/2、その他は S=1/3)

P74出土遺物（第34図）

土製品

土鈴（316）鈴部分で、鈴口の一辺が残る。

P77出土遺物（第34図）

土師器

小皿（317）小皿の底部で糸切りである。体部内外面はナデで、底径は5.0cmである。

瓦質土器

火鉢（318）口縁部内面が突出し、胴部はハケメで口縁部はナデである。口縁上面は被熱する。

土製品

サナ（319）外縁部小片で穿孔部を2ヶ所確認できる。表裏面ナデで片面に被熱痕がある。

鉄製品

釘（320）釘先端部は折れ曲がる。残存長3.1cm、最大幅1.8cmである。重さ3.7gである。

P102出土遺物（第34図）

土師器

皿（321）土師器皿の底部小片で、底部は糸切りである。

P104出土遺物（第34図）

磁器

小杯（322）小杯の口縁部で端部が反る。内外面施釉である。

P105出土遺物（第34図）

瓦

平瓦（323）平瓦の小片で、凹面、凸面ともに横方向のヘラナデである。

（3）小結：遺構の時期を中心に遺跡形成過程について

村下遺跡F地点出土の遺構と遺物には弥生時代のものから江戸時代のものまで認められる。1号貯蔵穴とSD01が出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。いずれも出土遺物は中期中頭頃のものが多く、SD01の上層には後期の土器が少量含まれる。また、この溝では土師器の皿が上・下両層から出土するが、これらの土師器皿は出土位置などから後世の遺構に伴う混入と考えられる。

これら弥生時代の遺構に加え、数は少ないが中世の遺構も確認された。SX01からは、瓦質土器の鉢や播鉢、また、SX04からも、瓦質土器の鍋、播鉢、火鉢が出土した。このうちSX01出土の播鉢は端部が肥厚しバチ形に近く、山村のA-Ⅲ類に近い。SX04出土の播鉢は口縁部上端が面をなしており、山村のA-Ⅳ類に比定できる。これらに基づけば、両遺構は15～16世紀頃の所産といえるであろう（山村1990）。

それ以外のSD02、03、05や、性格不明遺構のSX02、03、05、07、08、09などは江戸期のものであろう。ただし出土遺物を見ると17世紀後半から18世紀までの遺物が多く時期幅がある。また、数量的には多くはないが17世紀前半や19世紀代の遺物もみられる。現地表面の標高を参考に周辺微地形をみると、IVでみるとおり御笠川とD、F地点の間には北西－南東方向に低い谷状の地形が入っており、この谷状地形に向かってD地点からF地点にかけて標高はゆるやかに低くなる。それとともにF地点も南東方向に向かって標高がやや低くなる。F地点で江戸期の遺物が多く出土した性格不明の遺構は形状が不明確なものが多いが、この谷状地形に向かってゆるやかに低くなる傾斜地に形成・堆積したものと推測される。また、ピットが多数検出されたが建物の復元はできなかった。

表1 村下遺跡D地点出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	弥生土器	甕	1号住埋土中	②<1.7>	口縁部内外面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR5/2灰褐色 外10YR6/2灰黄褐色～10YR3/2黒褐色	
2	弥生土器	甕	1号住埋土中	②<3.3>	胴部外面ハケメ、ナデ 頸部～胴部内面ハケメ、ナデ消し	A:微細～1mmの白色砂粒、黒色粒を含む B:良好 C:内外10YR7/3にぶい黄褐色	
3	弥生土器	甕	1号住埋土中	②<5.3>	外面三角突帯、ヨコナデ、ハケメ、ナデ消し 内面ヨコナデ	A:1mm以下の白色砂粒、金雲母を含む B:良好 C:内5YR5/6明赤褐色 外5YR5/4にぶい赤褐色	
4	弥生土器	甕	1号住埋土中	②<3.9> ③<11.2>	底部外面ハケメ 内面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、粗砂を含む B:良好 C:内10YR4/2灰黄褐色 外5YR5/8明赤褐色	
5	石製品	石畿	1号住埋土中	長1.35 幅1.45 厚0.3 重0.5			安山岩製
6	石製品	砥石	1号住埋土中	長10.0 幅5.3 最大厚1.2 重94.1			泥岩製 表裏両面中央部は窪む
7	石製品	砥石	1号住埋土中	残存長8.0 残存幅3.8 最大厚3.5 重120.0			砂岩製 粗砥石目 使用面は1面のみ残存
8	弥生土器	甕	1号住床面Pit	②<1.7> ③<5.8>	底部外面叩き、ナデ 内面叩き	A:1mm以下の白色砂粒、粗砂を含む B:良好 C:内7.5YR5/4にぶい褐色 外7.5YR4/2灰褐色	
9	弥生土器	器台	1号住と切合Pit	②<5.8> 下端径<15.4>	底部外面ハケメ、ナデ 内面横方向のハケメ	A:2mm以下の白色砂粒、金雲母を含む B:良好 C:内5YR6/6橙色～5YR6/4にぶい橙色 外5YR6/6橙色	
10	弥生土器	器台	Pit	②<3.5>	底部外面ハケメ、ナデ 内面ハケメ	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内7.5YR7/4にぶい橙色～5YR6/6橙色 外5YR6/6橙色	

表2 村下遺跡F地点出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
11	擬朝鮮系無文土器	甕	1号貯蔵穴下層	②<2.4>	口縁部内外面ナデ 口縁端部に擦痕あり?	A:1～3mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内5YR6/8橙色 外5YR8/4淡橙色	口縁部破片
12	弥生土器	甕	1号貯蔵穴下層	②<2.65>	口縁部外面ヨコナデ、ハケメ後ナデ 内面ナデ	A:微細～3mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外5YR5/4にぶい赤褐色	
13	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層・下層区別なし	②<3.6>	口縁部外面ナデ、ハケメ 内面ハケメ後ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR6/4にぶい褐色 外7.5YR6/4にぶい褐色～7.5YR3/2黒褐色	
14	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層・下層区別なし	②<6.1>	口縁端部に刻目、体部に刻目突帯 外面ハケメ 内面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、金雲母を含む B:良好 C:内10YR6/2灰黄褐色 外10YR7/3にぶい黄褐色	
15	弥生土器	甕	1号貯蔵穴下層	②<1.9>	口縁部外面ヨコナデ、ハケメ 内面ヨコナデ	A:微細～3mmの白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内外2.5YR5/6明赤褐色	
16	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層	①<31.0> ②<10.4>	口縁部外面ヨコナデ 体部外面ハケメ、浅い1条の沈線 内面ナデ	A:微細～3mmの白色砂粒を含む B:良好 C:内外2.5YR5/8明赤褐色	外面煤付着
17	弥生土器	甕	1号貯蔵穴下層	①<30.6> ②<8.8>	口縁部外面ヨコナデ 体部外面ハケメ 内面ナデ	A:微細～3mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外2.5YR6/8橙色	
18	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層	①<30.7> ②<14.4>	口縁部外面ヨコナデ 体部外面ハケメ 内面ナデ	A:微細～4mmの白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内外2.5YR5/6明赤褐色～2.5YR4/8赤褐色	外面黒斑
19	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層・下層区別なし	②<6.4>	口縁部指オサエで成形 体部外面ハケメ 内面ハケメ、ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内7.5YR7/6橙色 外7.5YR6/4にぶい褐色	
20	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層・下層区別なし	②<11.5>	口縁部～体部外面ナデ、ハケメ? 内面摩擦の為調整不明	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外5YR5/8明赤褐色～5YR6/6橙色	
21	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層・下層区別なし	②<2.0>	口縁部暗文、研磨(一部器面劣化と顔料剥離の為調整不明) 丹塗り	A:1mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む B:良好 C:内2.5YR4/6赤褐色 外5YR7/6橙色～2.5YR4/6赤褐色	
22	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層	②<5.15> ③8.2	底部外面ハケメ後一部はナデで仕上げる、指オサエ 内面ナデ	A:微細～3mmの白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内10YR5/2灰黄褐色 外10YR8/4浅黄褐色	
23	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層	②<9.2> ③6.9	底部外面ナデ 体部外面ハケメ、指オサエ 内面ナデ	A:微細～4mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内5YR3/1黒褐色 外5YR4/8赤褐色	
24	弥生土器	甕	1号貯蔵穴下層	②<4.2> ③<6.6>	底部外面ハケメ、ナデ 体部下位外面器壁劣化が顕著な為調整不明 内面ナデ	A:微細～4mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内7.5YR4/1褐灰色 外5YR7/4にぶい褐色	底部外面二次被熱
25	弥生土器	甕	1号貯蔵穴上層	②<4.2>	体部外面ハケメ 内面ナデ、指オサエ	A:微細～3mmの白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内5YR6/6橙色 外5YR6/6橙色～5YR5/1褐灰色	
26	弥生土器	壺	1号貯蔵穴上層	②<3.4>	外面ナデ 内面ナデ、指オサエ	A:微細～3mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外7.5YR7/6褐色	
27	弥生土器	壺	1号貯蔵穴下層	②<4.3>	肩部外面ハケメ 内面丁寧なナデ	A:2mm以下の白色砂粒、黒色粒、石英、長石を多く含む B:良好 C:内2.5YR6/8褐色 外2.5YR6/6褐色	
28	弥生土器	壺	1号貯蔵穴上層	②<6.8>	頸部に三角突帯 体部外面ヨコナデ、荒れで不明瞭だが研磨の可能性、丹塗り 内面ナデ	A:微細～2.5mmの白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR7/6褐色 外10R5/8赤色	
29	弥生土器	蓋	1号貯蔵穴下層	②<1.9>	口縁部外面ミガキ、丹塗り 内面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内7.5YR8/3浅黄褐色 外2.5YR4/8赤褐色	
30	弥生土器	脚部片	1号貯蔵穴上層	②<3.1>	脚裾部外面ハケメ後ヨコナデ 内面ハケメ、端部ヨコナデ	A:微細～3mmの白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR6/4にぶい褐色 外7.5YR5/3にぶい褐色	脚部破片
31	弥生土器	支脚	1号貯蔵穴下層	上端部径3.1 下端部径6.3 ②11.2	ナデ形成 指オサエ	A:2.5mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:良好 C:7.5YR7/4にぶい褐色	被熱痕なし
32	土師器	小皿	1号溝C区上層	①<10.0> ②1.5 ③8.4	底部外面糸切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR4/1褐灰色 外7.5YR4/1褐灰色	内面～口縁部外面にかけて黒斑
33	弥生土器	甕	1号溝A区上層	②<3.3>	口縁部内外面ヨコナデ 内面指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:やや不良 C:内外10YR7/3にぶい黄褐色	
34	弥生土器	甕	1号溝A区上層	②<8.65>	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面指オサエ、ハケメ 内面指オサエ、工具痕?	A:4mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:内5YR5/6明赤褐色 外7.5YR3/2黒褐色	

表3 村下遺跡F地点出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	質量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
35	弥生土器	甕	1号溝A区上層	②<10.9>	口縁部外面ヨコナデ 体部外面ミガキ様のナデ 内面は摩滅の為調整不明	A:2mm以下の長石、石英、雲母を多く含む B:良好 C:内7.5YR7/8黄褐色 外10YR7/6明黄褐色	
36	弥生土器	甕	1号溝D区上層	②<5.4> ③<9.6>	体部外面ハケメ 底部外面ナデ 体部～底部内面ケズリ後ナデ、一部ハケメ残る	A:微細～3mmの白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内7.5YR7/4にぶい橙色 外7.5YR6/6褐色	
37	弥生土器	鉢	1号溝C区上層	①<11.3> ②7.55 ③<5.0>	外面ハケメ後ナデ、指オサエ 口縁部内面ヨコナデ 体部内面工具ナデ、指オサエ	A:5mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内外2.5YR5/6明赤褐色～2.5YR4/6赤褐色	
38	弥生土器	壺	1号溝F区上層	②<9.5> ③7.6	体部下位～底部外面ハケメ、ナデ、指オサエ 内面丁寧にナデで仕上げる、指オサエ	A:6mm程の長石、微細～5mmの白色・褐色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR2/3黒褐色～10YR3/1黒褐色	
39	弥生土器	蓋	1号溝D区上層	②<1.8>	内外面ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR7/6褐色 外5YR5/6明赤褐色	
40	弥生土器	筒形器台	1号溝D区上層	②<5.15>	外面縦方向のミガキ、丹塗り 内面指オサエ、丁寧にナデ	A:2mm程の石英、微細な白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内5YR6/6褐色 外2.5YR4/6赤褐色	口縁部破片
41	弥生土器	器台	1号溝F区上層	②<8.3> 下端部径<12.5>	外面下端近くまでタテハケ、下端部はヨコナデ 内面シボリ痕、ヨコ方向のハケメ後ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を含む B:良好 C:内外10YR7/3にぶい黄褐色	
42	弥生土器	支脚	1号溝C区上層	②<8.2> 下端部径<13.0>	外面指オサエ、ハケメ後ナデ消し 内面ハケメ、ナデ、ケズリ?	A:3mm以下の長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/4にぶい橙色 外7.5YR6/6褐色	
43	弥生土器	杵形支脚	1号溝F区上層	受部径<6.9> ②12.7 受部孔径3.15 裾部径<13.4>	受部外面平坦に面を形成する 体部外面タテ方向のハケメ、ナデ、指オサエ 体部内面タテ・ヨコ方向のハケメ、工具痕、ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内外7.5YR4/4褐色	
44	瓦	丸瓦	1号溝C区上層	残存長8.3 最大幅10.2 最大厚1.6	凸面すり消しに近い調整、丁寧にナデ 凹面目の粗い布目後粗いナデで仕上げる	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:凸面10YR7/3にぶい橙色～10YR4/1褐灰色 凹面2.5Y7/2灰黄色～10YR5/3にぶい黄褐色	
45	石製品	石剣	1号溝A区上層	残存長6.9 最大幅4.0 最大厚0.65 重26.3	研磨面が残る		頁岩製?
46	土師器	小皿	1号溝E区下層	①<6.6> ②1.2 ③<4.9>	底部外面糸切り、他は回転ナデ 内面均質に黒色の顔料を塗布する?	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/4にぶい橙色、7.5YR2/1黒色 外7.5YR7/4にぶい褐色	
47	弥生土器	甕	1号溝A区下層	②<5.7>	口縁部内外面ヨコナデ 内面指オサエ、ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を多く含む B:良好 C:内5YR7/6褐色～7.5YR4/2灰褐色	内面煤付着
48	弥生土器	甕	1号溝A区下層	②<4.6>	口縁部内外面ヨコナデ 内面指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内7.5YR4/1褐灰色 外7.5YR4/1褐灰色	外面黒斑 内面煤付着
49	弥生土器	甕	1号溝A区下層	②<6.0>	内外面摩滅の為調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を多く含む B:良好 C:内5YR6/8褐色 外7.5YR5/4にぶい褐色	
50	弥生土器	甕	1号溝E区下層	②<2.35>	口縁部内外面ヨコナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英をやや多く含む B:良好 C:内外5YR6/6褐色	
51	弥生土器	甕	1号溝A区下層	②<7.8>	外面ハケメ後ナデ 内面ヨコナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR5/1灰褐色 外5YR5/6明赤褐色	
52	弥生土器	甕	1号溝F区下層	②<4.2>	口縁部外面ヨコナデ 他はナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内5YR3/1黒褐色 外5YR4/6赤褐色	内面黒斑
53	弥生土器	甕	1号溝A区下層	②<8.0> ③7.35	底部外面ナデ 体部外面ハケメ 内面指オサエ、ナデ	A:微細～3mmの白色砂粒、長石、石英、雲母を多く含む B:良好 C:内7.5YR3/1黒褐色～7.5YR5/2灰褐色 外7.5YR6/4にぶい褐色	外面黒斑
54	弥生土器	甕	1号溝A区下層	②<8.55> ③6.2	底部外面ナデ、指オサエ 体部外面斜め方向のケズリ、ハケメ 内面ナデ	A:4mm以下の長石、石英、雲母を多く含む B:良好 C:内7.5YR4/4褐色 外5YR7/6褐色～7.5YR3/1黒褐色	外面黒斑
55	弥生土器	甕	1号溝F区下層	②<6.6> ③<9.5>	底部外面ナデ 体部外面ハケメ 内面ナデ、指オサエ	A:1mm以下の白色砂粒、長石をやや多く含む B:良好 C:内7.5YR6/3にぶい褐色 外5YR7/4にぶい褐色	内面黒斑
56	弥生土器	甕	1号溝A区下層	②<1.65>	口縁端部刻目、ヨコハケ 外面ハケメ後指オサエ 内面ヨコナデ	A:5mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR7/4にぶい黄褐色	
57	弥生土器	壺	1号溝E区下層	②<3.1>	外面横方向研磨、丹塗り 内面ヨコナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内5YR7/4にぶい褐色 外5YR3/6暗赤褐色	袋状口縁壺口縁部破片
58	弥生土器	短頸壺	1号溝C区上層	②<1.9>	口縁部内外面丹塗り 外面横方向の研磨	A:2mm以下の白色砂粒、長石を少し含む B:良好 C:内外2.5YR5/8明赤褐色	
59	弥生土器	短頸壺	1号溝A区下層	①<15.0> ②<1.2>	口縁部内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR4/1褐灰色～7.5YR6/6褐色	
60	弥生土器	壺	1号溝F区下層	②<1.8> ③5.8	底部外面ハケメ後ナデ 底部内面器面荒れの為調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内7.5YR4/1褐灰色 外7.5YR7/6褐色	内面黒斑
61	弥生土器	鉢	1号溝F区下層	②<3.6>	口縁端部粘土を巻き込む 他はナデ	A:3mm程の長石、微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR5/4にぶい黄褐色 外10YR5/3にぶい黄褐色	
62	弥生土器	鉢	1号溝F区下層	①<13.6> ②<4.1>	口縁～体部外面横方向のハケメ、ナデ 口縁部内面ヨコナデ 体部内面ナデ、指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英をやや多く含む B:良好 C:内外7.5YR7/3にぶい褐色～7.5YR4/1褐灰色	
63	瓦質土器	鉢	1号溝C区	②<3.6>	口縁端部・内面ハケメ 外面指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:やや不良 C:内7.5YR5/1褐灰色 外10YR5/2灰黄褐色	内面のハケメ使用で一部摩耗する
64	弥生土器	壺	1号溝C区	頸部径<28.0> ②<6.3>	頸部外面突帯、ヨコナデ 体部外面タテ方向ハケメ 内面一部器面荒れるがナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:内10YR4/2灰黄褐色 外7.5YR5/6明褐色	
65	弥生土器	支脚	1号溝C区	②<8.0> 下端部径<8.2>	外面ナデ、指オサエ 内面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:内7.5YR6/8褐色 外5YR6/4にぶい褐色	
66	土師器	小皿	2号溝	②<1.9>	口縁部内外面回転ナデ	A:微細な赤褐色粒、雲母片を少し含む B:良好 C:内外7.5YR7/3にぶい褐色～7.5YR5/2灰褐色	
67	瓦質土器	播鉢	2号溝	②<2.0> ③<12.75>	底部外面ナデ 体部外面ヨコナデ 内面播目、ヨコナデ	A:微細～2mmの白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内10YR8/2灰白色 外10YR8/2灰白色～10YR6/1褐灰色	
68	弥生土器	鉢	2号溝	②<4.7>	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ 内面ナデ、指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を含む B:良好 C:内5YR6/4にぶい褐色 外5YR6/6褐色	外面黒斑
69	弥生土器	杵形支脚	2号溝	受部径<7.15> ②<4.8> 受部孔径1.2	内面シボリ痕、ナデ、指オサエ 内面シボリ痕	A:5mm以下の白色砂粒、長石、石英をやや多く含む B:良好 C:内外5YR7/4にぶい褐色～5YR6/6褐色	
70	陶器	播鉢	2号溝	②<5.2>	口縁部内外面に鉄釉を施す 内面播目	A:微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:釉5YR3/3暗赤褐色 露胎5YR5/2灰褐色 胎土10YR5/1褐灰色	重ね焼痕跡 肥前(17c前半)

表4 村下遺跡F地点出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
71	陶器	仏飯器	2号溝	②<1.65> 脚裾部径(7.6)	内外面施釉	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉2.5GY7/1明オリープ灰色 胎土5Y4/1灰色	脚裾部のみ残存
72	磁器	青磁碗	2号溝	②<3.4> ④(4.6)	内外面施釉、畳付は釉剥ぎ	A:やや粗 B:良好 C:釉7.5GY6/1緑灰色 胎土5Y7/1灰白色	太宰府分類龍泉窯系青磁碗IV類?
73	土師質製品	七輪(サナ)	2号溝	残存長5.9 残存幅5.5 厚1.8	上下面ハケ状工具痕 側面ナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:5YR7/6橙色～5YR5/6明赤褐色	上下両面薄く被熱
74	須恵器	高台付杯	3号溝	②<1.55> ④12.8	底部外面へら切り後ナデ 他は回転ナデ	A:4mm程の白色砂粒、微細な黒色粒、石英を少し含む B:良好 C:内N8/灰白色 外2.5GY8/1灰白色	
75	土師器	皿	3号溝	①(11.8) ②2.0 ③(9.1)	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、石英、雲母をわずかに含む B:良好 C:内外10YR8/1灰白色～10YR7/4にぶい橙色	
76	瓦質土器	鍋	3号溝	②<3.2>	口縁部内外面ナデ 内面横方向のケズリ状の調整	A:1mm以下の白色砂粒、石英をわずかに含む B:良好 C:内7.5YR8/6浅黄褐色 外7.5YR8/2灰白色	外面煤付着
77	瓦質土器	捏鉢	3号溝	②<2.95>	口縁部内外面回転ナデ 内面ヨコ方向の粗いハケメ	A:2mm以下の白色砂粒、石英をわずかに含む B:良好 C:内10YR6/2灰黄褐色 外10YR5/3にぶい黄褐色	
78	瓦質土器	湯釜	3号溝	②<5.35>	肩部三つ巴スタンプ文 内面ヨコハケ、指オサエ	A:微細な黒色粒、石英を含む B:良好 C:内10YR5/3にぶい黄褐色 外10YR8/3浅黄褐色～10YR5/1褐灰色	外面煤付着
79	弥生土器	甕	3号溝	②<3.3>	口縁部下外面ハケメ後ナデ 内面ヨコハケ、ナデ	A:5mm以下の白色砂粒、石英、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/6橙色 外7.5YR8/3浅黄褐色	
80	陶器	碗	3号溝	①(11.2) ②<3.5>	内外面施釉 外面に丸文	A:微細な黒色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 透明又は白色釉? 胎土7.5Y8/1灰白色	
81	陶器	小杯	3号溝	①(3.0) ②3.3 ③2.7	内外面施釉、外面一部露胎 見込みに胎土目跡 底部外面糸切り	A:精良 B:良好 C:釉10YR8/2灰白色～10YR7/2にぶい黄褐色 露胎7.5YR8/6浅黄褐色	
82	陶器	壺	3号溝	①(8.6) ②<1.6>	外面鉄釉を施す 内面回転ナデ	A:精良 B:良好 C:釉10YR1.7/1黒色 胎土10YR7/4にぶい黄褐色	
83	陶器	擂鉢	3号溝	②<2.6>	口縁部内外面のみ鉄釉を施す 口縁部上面は露胎(釉を掻き取った可能性)、回転ナデ	A:精良 B:良好 C:釉2.5YR灰赤色～2.5YR2/2極暗赤褐色 胎土2.5YR6/1灰赤色～2.5YR5/1灰赤色	肥前(17c前半)
84	陶器	擂鉢	3号溝	②<10.5>	内外面に鉄釉を施す 内面擂目(使用の為にかなり摩耗する)	A:微細な白色粒子を含む B:良好 C:釉5YR5/3にぶい赤褐色 胎土5YR6/4にぶい橙色	内・断面に被熱痕あり
85	陶器	甕?	3号溝	②<6.4>	外面薄く施釉 内面同心円文当て具痕	A:微細な白色・黒色粒子を含む B:良好 C:釉7.5R5/2灰赤色～7.5R4/2灰赤色 胎土5YR7/1褐灰色	
86	陶器	甕	3号溝	①(24.0) ②<10.1>	内外面施釉、内面一部露胎 体部内面削り	A:微細な白色粒子を含む B:良好 C:釉2.5YR7/2明赤灰色～2.5YR1.7/1赤黒色 胎土2.5YR6/1灰赤色	
87	磁器	色絵瓶	3号溝	②<3.0>	外面施釉 内面露胎 外面色絵で葉文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 露胎2.5Y8/1灰白色 胎土5Y8/1灰白色	色絵破片 五彩手
88	磁器	染付碗	3号溝	②<1.8>	口縁部内外面施釉 外面に梅?の様な施文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
89	磁器	白磁小杯	3号溝	①(5.8) ②3.75 ④2.4	内面～高台部外面まで施釉、高台内は露胎、兜巾状 見込みに目跡?	A:精良 B:良好 C:釉2.5GY8/1灰白色 露胎N8/灰白色	
90	磁器	小杯	3号溝	①(4.4) ②3.0 ④(1.8)	内外面施釉 畳付は釉剥ぎ 高台内一部露胎	A:微細な黒色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉2.5GY8/1灰白色 露胎2.5Y7/2灰黄色 胎土N/灰白色	
91	磁器	染付小杯	3号溝	②<3.7> ④(3.3)	全面施釉 畳付は釉剥ぎ、砂目跡あり 外面紅葉文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
92	磁器	染付皿	3号溝	②<1.6> ④(9.4)	全面施釉 畳付釉剥ぎ、一部砂粒付着? 見込に草花文	A:精良 B:良好 C:釉 青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	肥前産
93	瓦	平瓦	3号溝	残存長10.35 残存幅6.4 厚1.75	凸面丁寧なナデ 凹面布目後ヘラナデ?擦痕が残る	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:2.5Y8/1灰白色～2.5Y3/1黒褐色	
94	瓦	平瓦	3号溝	残存長14.6 残存幅9.95 厚9.95	凸面タテ方向の擦痕が残る、丁寧なナデ 凹面丁寧なナデ	A:3mm以下の白色砂粒をやや多く含む B:良好 C:N4/灰色～N3/暗灰色	
95	石製品	磨製石斧	3号溝	残存長13.2 最大幅7.95 最大厚5.05 重922.6	側縁部は研磨が細かく敲打痕が残る		今山系石斧 玄武岩
96	瓦質土器	甕	1号貯蔵穴上層	②<15.1>	外面磨減の調整不明 内面ハケメ、指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:内10YR7/2にぶい黄褐色 外10YR8/2灰白色	
97	磁器	染付碗	5号溝	②<2.8>	残存部全面に施釉 口縁部外面に2条の圈線	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
98	磁器	碗	5号溝	①(15.2) ②7.6 ④(6.1)	全面施釉、畳付は釉剥ぎ	A:精良 B:良好 C:釉N8/灰白色 胎土N8/灰白色	
99	瓦	棧瓦	5号溝	残存長14.4 残存幅15.4 厚1.8	凹・凸面横方向の丁寧なナデ 切込みの部分か一部残存する	A:微細～8mmの白色砂粒をやや多く含む B:良好 C:凸面5B4/1暗青灰色 凹面5B6/1青灰色	下端面燻されてない部分あり
100	瓦質土器	鉢	SX1	①(52.4) ②<10.4>	口縁部外面ナデ 体部外面ハケメ、指オサエ 内面ハケメ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5Y7/1灰白色～10YR7/4にぶい黄褐色 外10YR4/1褐灰色	外面全体に被熱
101	瓦質土器	鉢	SX1	②<9.0>	口縁部外面ナデ 体部外面ハケメ、指オサエ 内面ハケメ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR7/4にぶい黄褐色 外10YR5/2灰黄褐色～10YR3/3暗褐色	外面全体に被熱
102	瓦質土器	擂鉢	SX1	①(29.2) ②<6.8>	口縁部外面ハケメ後ナデ消し 体部外面ハケメ、指オサエ 内面ハケメ、擂目	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:10YR5/2灰黄褐色 外10YR5/1褐灰色～10YR7/2にぶい黄褐色	
103	瓦質土器	擂鉢	SX1	②(8.9) ③(13.6)	体部下位～底部外面ハケメ、指オサエ 内面ハケメ、擂目	A:1mm以下の白色砂粒、金雲母を少し含む B:良好 C:内10YR5/1褐灰色 外2.5Y7/2灰黄色	
104	陶器	碗	SX2	①(9.7) ②<4.9>	内外面施釉 外面は草花文? 胴部に沈線が巡る	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y8/3淡黄色 胎土10YR8/2灰白色	銅緑釉による施文?あるいは陶胎染付か
105	陶器	瓶	SX2	②<7.2> 頸部径(4.8)	螺旋状の耳部を持つ 内外面施釉、外面は鉄釉を重ね掛ける 内面ンボリ痕、回転ナデ	A:微細な白色粒子を少し含む B:良好 C:釉5YR3/3暗赤褐色、2.5YR2/3極暗赤褐色～7.5YR3/4暗褐色	
106	磁器	染付碗	SX2	②<2.8> ④(4.2)	残存部全面施釉 畳付は釉剥ぎ 外面網目を鋸歯状に描く、高台に2条の圈線	A:陶器質 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土10YR8/2灰白色	陶胎染付 肥前産
107	磁器	染付碗	SX2	②<3.9>	内外面施釉 口縁部内外面に二重圈線 外面植物文?	A:精良 B:良好 C:釉 青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
108	磁器	染付碗	SX2	②<5.25>	内外面施釉 畳付は釉剥ぎ 染付一部残る	A:精良 B:良好 C:釉 青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	広東碗(18c末～19c前半)

表5 村下遺跡F地点出土遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
109	磁器	染付皿	SX2	①(7.2) ②2.05 ④(4.8)	糸切り細工成形 内外面施釉 畳付は釉剥ぎ 外面花弁文 見込み丸に三方割銀杏と花弁文 口縁端口錆	A: 精良 B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	染付方形皿
110	磁器	染付皿	SX2	②2.95 ④(10.7)	全面施釉 畳付は釉剥ぎ 内外面草花文・圏線 輪花状口縁 高台内ハリ跡	A: 精良 B: 良好 C: 釉 青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
111	瓦	軒丸瓦	SX2	瓦当径(14.2) 瓦当厚1.45 残存長4.95 厚1.5	凸面ナデ、工具ナデ 凹面布目痕、強いナデ跡	A: 4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B: 良好 C: 凹凸面N3/暗灰色	三つ巴文
112	土師器	小皿	SX3	①7.8 ②1.3 ③6.0	底部外面回転糸切り後ナデ 他は回転ナデ	A: 微細な白色粒、雲母を少量含む B: 良好 C: 内外7.5YR7/4にぶい橙色	口縁端部煤付着 灯明皿?
113	土師器	小皿	SX3	①(8.8) ②1.4 ③6.4	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A: 3mm以下の白色砂粒、石英、雲母を含む B: 良好 C: 内7.5YR4/1褐灰色～7.5YR2/1黒色 外7.5YR7/4にぶい橙色	内面全体・口縁部外面に濃く煤が付着する 灯明皿
114	土師器	甕	SX3	①(71.2) 復元器高78.0 ③(41.0)	外面ハケメ 内面ハケメ、指オサエ	A: 微細～5mmの白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内外10YR7/3にぶい黄橙色	
115	瓦質土器	鍋	SX3	②(4.75)	口縁部外面ヨコナデ、ハケメ、指オサエ 内面ハケメ	A: 2mm以下の白色砂粒、長石、石英、角閃石、雲母を含む B: 良好 C: 内7.5YR7/4にぶい橙色 外7.5YR3/1黒褐色	外面煤付着
116	瓦質土器	播鉢	SX3	②(4.5)	口縁端部ヨコナデ 外面ハケメ、指オサエ 内面ヨコナデ、ハケメ、播目	A: 1mm程の白色砂粒、長石、雲母を含む B: 良好 C: 内7.5YR6/4にぶい橙色 外7.5YR5/2灰褐色	外面被熱し黒く変色する
117	瓦質土器	播鉢	SX3	①(31.4) ②12.65 ③(13.9)	外面ハケメ後ナデ・底部付近指オサエ 内面播目(よく使用され器面は一部平滑になる)	A: 5mm以下の白色砂粒、長石、石英、角閃石を含む B: 良好 C: 7.5YR7/3にぶい橙色 外7.5YR6/3にぶい褐色	底部は濃く煤が付着 注口部が一部残存
118	瓦質土器	鉢	SX3	③(17.0)	底部外面ハケメ、体部外面ハケメ、底部付近に指オサエ 内面摩滅の為調整は不明	A: 1mm程の白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外10YR8/2灰白色	
119	瓦質土器	火鉢	SX3	②(6.3)	口縁端部ヨコハケ後ナデ 外面工具ナデ 内面ハケメ後ナデ、指オサエ	A: 微細な白色・黒色粒、長石、雲母を含む B: 良好 C: 内外10YR4/1褐灰色	
120	陶器	椀	SX3	①(9.0) ②(2.8)	口縁部内外面鉄釉	A: 精良 B: 良好 C: 釉5YR2/4暗暗赤褐色、2.5Y4/4オリーブ褐色 胎土10YR7/3にぶい黄褐色	
121	陶器	椀	SX3	①(10.0) ②4.6 ④(4.8)	内外面施釉 高台内・畳付は露胎 高台脇に2条の圏線が巡る	A: 3mm以下の黒色粒子を含む B: 良好 C: 釉5Y7/1灰白色 胎土2.5Y7/1灰白色	
122	陶器	折縁皿	SX3	②(1.7)	残存部全面施釉 型打ち成形?	A: 精良 B: 良好 C: 釉5Y6/3オリーブ黄色 胎土2.5Y6/2灰黄色	瀬戸美濃
123	陶器	蓋	SX3	①(11.2) ②(2.9) 受部径(14.0)	体部～受部外面施釉、一部釉薬が溶けた様な部位あり 白土刷毛引き 内面露胎	A: 精良 B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 露胎7.5YR6/4にぶい橙色 胎土5Y4/1灰白色	
124	陶器	瓶?	SX3	①(7.0) ②(2.4)	残存部全面施釉	A: 精良 B: 良好 C: 釉5Y4/3暗オリーブ色 胎土10YR6/1褐灰色	
125	陶器	播鉢	SX3	②(10.2)	残存部全面施釉 口縁下に断面三角の突帯、外面叩き成形の痕跡? 内面播り目	A: 精良 B: 良好 C: 釉7.5YR3/4暗褐色 胎土10YR6/2灰黄褐色	肥前産(18c前半)
126	陶器	播鉢	SX3	②(4.0)	口縁部内外面施釉	A: 微細な白色粒子を少し含む B: 良好 C: 釉2.5YR3/2暗赤褐色 胎土2.5YR4/1黄灰色	備前産
127	陶器	不明	SX3	②(3.7)	外面施釉 内面露胎、回転ナデ	A: 精良 B: 良好 C: 釉10YR8/1灰白色 露胎10YR8/3浅黄褐色 胎土N6/灰色	外面被熱する部分あり(火災痕跡?)
128	磁器	青磁椀	SX3	②(2.0)	口縁部内外面施釉 外面蓮弁文	A: 精良 B: 良好 C: 釉2.5GY6/1オリーブ灰色 胎土N7/灰白色	龍泉窯系統V～VI類(15c末～16c)
129	磁器	青磁椀	SX3	①(18.0) ②(3.0)	口縁部内外面施釉 輪花状口縁	A: 精良 B: 良好 C: 釉10Y6/2オリーブ灰色 胎土N8/灰白色	
130	磁器	染付椀	SX3	①(11.0) ②(4.15)	残存部全面に施釉 外面草花文	A: 精良 B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 呉須は鈍い藍色 胎土2.5Y8/1灰白色	
131	磁器	染付椀	SX3	②(2.4) ④(4.6)	残存部全面施釉 畳付は釉剥ぎ 胴部外面格子文 高台・脇に圏線 見込みに施文あり	A: 精良 B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
132	磁器	染付小杯	SX3	①(7.0) ②(3.45)	残存部全面に施釉 外面植物文	A: 精良 B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
133	磁器	皿	SX3	①(7.2) ②2.4 ④4.5	残存部全体に施釉 畳付は釉剥ぎ 見込みに圏線・龍 外面圏線 高台内に銘款『福』	A: 精良 B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
134	磁器	染付皿	SX3	①(10.0) ②2.55 ④6.0	残存部全面に施釉 畳付は釉剥ぎ 見込みに圏線・龍 外面圏線 高台内に銘款『福』	A: 微細な黒色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
135	磁器	皿	SX3	②(3.2) ④(9.0)	内外面施釉 蛇の目凹形高台 外面草花文・圏線 見込みに樹木文	A: 陶器質 B: 良好 C: 釉 透明釉を薄く施す 露胎10YR8/3	陶胎染付 肥前産
136	磁器	皿	SX3	①(12.0) ③3.2 ④4.8	内面～体部外面施釉 体部下半～高台内は露胎 見込みは蛇の目釉剥ぎ	A: 微細な黒色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 釉7.5GY8/1明緑灰色 胎土2.5Y8/1灰白色	
137	磁器	染付皿	SX3	①(13.8) ②3.4 ④(5.6)	残存部全面に施釉 畳付は釉剥ぎ・砂付着 見込みに圏線・草花文	A: 精良 B: 良好 C: 釉 やや青味を帯びた透明釉を施す 胎土7.5Y8/1灰白色	
138	土製品	人形型	SX3	長8.4 幅5.5 厚1.4	外面ナデ形成 大黒天型	A: 微細な白色砂粒を少し含む B: 良好 C: 10YR8/3浅黄褐色	「享保八年癸卯五月五日」彫り込む
139	土製品	土鈴	SX3	残存高3.7 最大径(2.95) 紐孔径0.65	外面ナデ 内面ヨコナデ、シボリ痕	A: 微細な白色砂粒を少し含む B: 良好 C: 10YR8/3浅黄褐色	鈴口・紐通孔一部残存
140	土製品	土鈴	SX3	残存高4.4 最大径(4.0) 紐孔径(0.7)	外面ナデ 内面ヨコナデ、シボリ痕	A: 1mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B: 良好 C: 7.5YR7/4にぶい橙色	鈴口・紐通孔一部残存
141	土師質製品	七輪(サナ)	SX3	残存長4.9 残存幅7.9 厚1.6 孔径(2.0)	上面ナデ 下面ハケメ	A: 微細～5mmの砂粒、白色砂粒、長石、雲母を含む B: 良好 C: 5YR7/6橙色～5YR3/1黒褐色	上面被熱炭化物? 付着
142	瓦質土器	甕	SX3(P16)	①(17.2) ②(4.4)	口縁部内外面回転ナデ 体部内面工具痕	A: 微細な白色砂粒、雲母を多く含む B: 良好 C: 内5YR6/2灰褐色～10YR2/1黒色 外10YR2/1黒色	口縁部外面煤付着
143	陶器	椀	SX3(P16)	②(4.3)	内外面施釉 餡釉の上に薬灰釉を流し掛ける	A: 精良 B: 良好 C: 釉7.5YR4/3褐色～2.5Y8/1灰白色 胎土2.5Y7/2灰黄色	
144	陶器	皿	SX3(P16)	②(3.2) ④(5.0)	内面～腰まで灰釉を施す 他は露胎 見込みに砂目跡 畳付砂目積みの痕跡	A: 微細な白・黒色粒子を含む B: 良好 C: 釉5Y8/1灰白色 露胎7.5YR6/4にぶい橙色 胎土7.5YR7/2明褐灰色	肥前(1600～1650)
145	陶器	壺	SX3(P16)	②(3.1)	口縁部内外面施釉 口縁下内面釉垂れ	A: 精良 B: 良好 C: 釉5YR4/3にぶい赤褐色 胎土7.5YR6/1褐灰色	

表6 村下遺跡F地点出土遺物観察表⑤

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
146	磁器	椀	SX3 (P16)	②<4.2> ④(4.2)	残存部全面施釉 高台内一部露胎 畳付は釉剥ぎ 見込みに砂付着 外面植物文	A:陶器質 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 露胎10YR8/2灰白色 胎土7.5YR8/4浅黄褐色	陶胎染付
147	磁器	青磁椀	SX3 (P16)	②<3.45>	口縁部内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉5Y5/2灰オリブ色 胎土5Y7/1灰白色	龍泉窯系IV期
148	磁器	染付椀	SX3 (P16)	②<4.3>	残存部全面に施釉 外面植物文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
149	磁器	染付椀	SX3 (P16)	②<3.4>	口縁部内外面施釉 内外面染付文 口縁端部は外反する	A:精良 B:良好 C:釉 青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
150	磁器	染付椀	SX3 (P16)	①(11.0) ②5.1 ④(4.2)	全面施釉 畳付は釉剥ぎ 見込み蛇の目釉剥ぎ 外面丸に斜線・井桁紋	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 露胎10YR8/2灰白色 胎土5Y8/1灰白色	くらわんか椀
151	磁器	染付青磁椀	SX3 (P16)	①(11.8) ②<5.5>	外面青磁釉 内面染付 口縁部内面に四方禪文が巡る 見込みに圈線	A:精良 B:良好 C:釉 外面青磁釉(7.5GY7/1明緑灰色釉) 内面透明釉 胎土N8/灰白色	肥前(18c後半～)
152	磁器	猪口	SX3 (P16)	①(7.0) ②6.3 ④(4.6)	残存部全面施釉、畳付は釉剥ぎ 外面草花文・梯子状の施文が巡る 萐荷底	A:陶器質 B:良好 C:釉 白味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土10YR8/3浅黄褐色	蕎麦猪口 肥前IV期
153	磁器	蓋	SX3 (P16)	②<2.9>	体部内外面施釉 口縁部内面釉剥ぎ 外面青海波・山・松などを描く 受部は溶着防止の為砂を塗る 天井部内面砂目跡	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	肥前
154	磁器	紅皿	SX3 (P16)	①(4.0) ②1.7 ④(1.5)	内面～体部中位外面施釉、他は露胎 型打ち成形、外面貝殻状の細かな条線が入る	A:精良 B:良好 C:釉10Y8/1灰白色 露胎5Y8/1灰白色	
155	磁器	染付皿	SX3 (P16)	①(16.0) ②<2.9>	残存部全面に施釉 内外面圈線・植物文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
156	磁器	染付皿	SX3 (P16)	①(15.6) ②<3.1>	残存部全面に施釉 内外面圈線、内面植物文	A:精良 B:良好 C:釉 青味を帯びた透明釉を薄く施す	
157	磁器	染付皿	SX3 (P16)	②<2.0> ④(9.4)	残存部全面施釉 蛇の目凹形高台 高台部外面圈線、見込みに圈線・草花文	A:微細な黒色粒を含む B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	肥前(18～19c中)
158	磁器	染付瓶	SX3 (P16)	②<6.6> ⑤(8.8)	外面施釉 内面露胎 外面に梅・草花文・圈線	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 露胎10YR8/2灰白色 胎土10YR8/1灰白色	
159	瓦	軒丸瓦	SX3 (P16)	瓦当径(13.2) 最大厚1.9	凸面ナデ 凹面ナデ、指オサエ 瓦当面との接着面に刻み目を細かく入れる	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:凸面N4/灰色 凹面2.5Y6/2灰黄色	三つ巴文
160	土製品	紡錘車	SX3 (P16)	外径4.65 穿孔径0.6 厚1.1 重29.3	ナデ成形 表面は工具を用いて平滑に仕上げる 中心部穿孔する	A:3mm以下の白色砂粒、角閃石、雲母を含む B:良好 C:7.5YR7/6橙色～7.5YR7/4にぶい橙色	
161	土師器	小皿	SX4	①(9.6) ②1.9 ③(7.0)	底部外面系切り後ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR7/2にぶい黄褐色	
162	土師器	小皿	SX4	①9.8 ②2.5 ③7.3	底部外面系切り後ナデ 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、黒色粒、雲母を多く含む B:良好 C:内外10YR8/3浅黄褐色～10YR7/2にぶい黄褐色	歪みあり
163	土師器	小皿	SX4	①(10.8) ②2.1 ③(6.0)	底部外面系切り 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色粒を含む B:良好 C:内7.5YR8/4浅黄褐色 外10YR8/4浅黄褐色～10YR4/1褐色	底部外面黒斑
164	瓦質土器	鍋	SX4	②<4.7>	口縁部外面ナデ、指オサエ 内面ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外7.5YR7/3にぶい橙色	外面被熱炭化物付着
165	瓦質土器	鍋	SX4	②<3.9>	口縁部外面工具ナデ 内面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR5/4にぶい褐色 外7.5YR2/1黒色	外面被熱煤・炭化物付着
166	瓦質土器	播鉢	SX4	①(29.0) ②11.7 ③(12.0)	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ後ナデ消し 内面播目(使用による摩耗・擦痕)	A:微細な白色砂粒を含む B:やや不良 C:内外10YR8/3浅黄褐色～10YR3/1黒褐色	
167	瓦質土器	火鉢	SX4	①(13.5) ②5.8 ③(12.0)	外面ナデ、指オサエ ヘラ削り? 内面ハケメ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を含む B:良好 C:内7.5YR6/3にぶい褐色 外7.5YR7/4にぶい褐色	内面煤・炭化物付着
168	弥生土器	甕	SX4	②<4.2>	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ 内面ハケメ後ナデ消し	A:3mm以下の白色砂粒、褐色粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外5YR6/6褐色～5YR3/1黒褐色	内面煤付着
169	弥生土器	甕	SX4	②<6.9>	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ 内面は摩減により調整不明	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:やや不良 C:内外7.5YR8/4浅黄褐色	
170	弥生土器	甕	SX4	①(29.0) ②<10.0>	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ 内面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内5YR5/3にぶい赤褐色 外5YR4/1明赤褐色	内外面煤付着
171	弥生土器	支脚	SX4	上端部径(8.4) ②<9.0>	ナデ成形 外面布目・工具痕?指オサエ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4にぶい褐色	
172	弥生土器	支脚	SX4	下端部径9.0 ②<8.0>	ナデ成形 内外面指オサエ	A:1mm以下の白色砂粒、褐色粒を含む B:良好 C:内外10YR7/4にぶい黄褐色	
173	弥生土器	支脚	SX4	上端部径(8.4) ②13.5 下端部径(10.6)	ナデ成形 内外面指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外10YR8/3浅黄褐色～10YR8/6黄褐色	
174	磁器	青磁椀	SX4	②<2.6> ④6.2	内外面施釉 高台内中心部・畳付は釉剥ぎ 見込み片彫り文	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y7/2灰黄色 胎土5Y8/1灰白色	太宰府分類龍泉窯系青磁碗IV類
175	磁器	皿	SX4	②<2.5>	内外面施釉、高台一部に釉がかかる 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台内露胎 圈線染付	A:陶器質 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 露胎7.5YR5/2灰褐色 胎土7.5YR8/3浅黄褐色	陶胎染付
176	瓦	軒平瓦	SX4	残存長5.5 厚1.7	凸面ヘラ状工具ナデ 凹面布目痕 瓦当残存部重勾文	A:4mm以下の長石、石英を含む B:不良 C:凹凸面7.5YR8/6浅黄褐色～7.5YR7/6褐色	
177	土師器	小皿	SX5	①(7.5) ②1.0 ③5.6	底部外面ヘラ切り 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:7.5YR7/3にぶい褐色 外7.5YR7/3にぶい褐色、10YR3/1黒褐色	口縁部煤付着 灯明皿の可能性
178	土師器	小皿	SX5	①(7.4) ②1.1 ③5.6	底部外面系切り? 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/3浅黄褐色 外7.5YR7/4にぶい褐色、10YR2/1黒色	口縁部煤付着 灯明皿の可能性
179	土師器	鍋	SX5	②<7.0>	口縁部～体部内外面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、角閃石を含む B:良好 C:内10YR7/3にぶい黄褐色 外10YR5/2灰黄褐色	全面に被熱煤・炭化物付着
180	土師器	捏鉢	SX5	①(25.7) ②<5.9>	外面ハケメ後ナデ 内面ヨコハケ、ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、金雲母を含む B:良好 C:内5YR5/8明赤褐色 外5YR6/6褐色	
181	土師器	播鉢	SX5	②<7.3> ③(12.8)	外面ハケメ、指オサエ 内面ハケメ、播目(使用の為器面摩耗する)	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR褐色～10YR4/2灰黄褐色 外10YR5/2灰黄褐色	
182	土師器	七輪	SX5	②<9.95>	口縁部内外面ナデ 体部は二重構造	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5YR5/2灰褐色～7.5YR2/1黒色 外7.5YR6/4にぶい褐色	口縁部破片 内面被熱

表7 村下遺跡F地点出土遺物観察表⑥

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
183	瓦質土器	鍋	SX5	②<4.6>	口縁部外面ハケメ、指オサエ 内面横方向ノミ、ハケメ、工具痕?	A:1mm以下の白色砂粒、金雲母を含む B:良好 C:内10YR7/3にぶい黄褐色 外10YR3/3暗褐色	全面に被熱煤付着
184	瓦質土器	播鉢	SX5	①(36.4) ②10.3 ③(17.2)	口縁部内外面ナデ 体部外面ハケメ後ナデ、指オサエ 内面描目(使用の為器面摩擦する)	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR5/1褐灰色 外10YR6/2灰黄褐色～10YR8/2灰白色	
185	瓦質土器	播鉢	SX5	②<5.65>	口縁部外ヨコハケ 体部外面ナデ、指オサエ 内面ヨコ・斜め方向のハケメ、描目	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内7.5YR5/1褐灰色 外2.5Y8/1灰白色～N5/灰色	
186	瓦質土器	火鉢	SX5	①(20.4) ②14.75 ③(18.7)	体部外面紗綾形文・扇形スタンプ文が巡る内面ヨコハケ 底部内外面ハケメ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR3/1黒褐色 外10YR7/3にぶい黄褐色	内面被熱する
187	瓦質土器	火鉢	SX5	①(20.6) ②20.25 ③(19.1)	外面ミガキ 兎・菊花唐草スタンプ文 銘刻印一部残存『衛』か? 内面ハケ跡、ナデ、指オサエ 突起部一カ所残る	A:3mm程の白色砂粒、微細な白・褐色砂粒、雲母含む B:良好 C:内7.5YR6/3にぶい褐色～10YR3/1黒褐色 外10YR3/1黒褐色	胴部に窓の痕跡 内面被熱し黒く変色
188	瓦質土器	風炉	SX5	①(16.7) ②<6.3>	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面調整不明内面ヨコハケ、指オサエ	A:微細な白色砂粒、褐色粒、雲母を含む B:良好 C:内5YR3/1黒褐色 外5YR6/4にぶい褐色	内面被熱し、黒く変色
189	瓦質土器	湯釜	SX5	①(14.8) ②<8.8> ⑤(25.8)	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ミガキ肩部梅花スタンプ文、洗線 内面ナデ、指オサエ	A:微細な白色砂粒、角閃石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR6/3にぶい黄褐色～10YR3/2黒褐色	外面煤付着
190	瓦質土器	壺	SX5	②<14.5> ③(26.4)	体部～底部外面ハケメ 底部内面ハケメ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR7/2にぶい黄褐色 外10YR5/2灰黄褐色～10YR5/1褐灰色	
191	瓦質土器	不明	SX5	最大厚0.6	内面ノミ、ハケメ 外面ハケメ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/1灰白色～10YR4/1褐灰色 外10YR7/2にぶい黄褐色	
192	弥生土器	高杯	SX5	②<15.1> 脚部径17.0	脚基部外面ヨコナデ 脚部外面ハケメ、端部はハケメ後ナデ消し 内面シボリ痕、ヨコハケ	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内5YR6/8褐色 外5YR7/6褐色～10YR8/3浅黄褐色	脚部のみ残存
193	陶器	椀	SX5	①(8.8) ②4.95 ④(3.6)	体部内外面・高台内施釉 高台部外面・畳付きは露胎 一部黄褐色の釉を流し掛ける	A:精良 B:良好 C:釉 2.5Y3/3暗オリーブ褐色、2.5Y5/4黄褐色 胎土2.5Y4/1黄灰色	筑前系か
194	陶器	椀	SX5	②<4.2> ④3.8	畳付以外は施釉 見込みに一部銅緑釉、目跡3ヶ所残る(三足ハマ痕跡) 高台内兜巾状	A:精良 B:良好 C:釉 2.5Y7/4浅黄色、一部淡い青緑色 胎土2.5Y8/3浅黄色	肥前
195	陶器	椀	SX5	②<3.6> ④4.9	残存部全面に施釉、畳付は釉剥ぎ	A:微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:釉 7.5Y8/1明緑灰色 胎土7.5Y8/1灰白色	
196	陶器	椀	SX5	②<2.3> ④3.9	残存部内面、外面は高台脇まで施釉 他は露胎 外面灰釉に銅緑釉を流し掛ける	A:精良 B:良好 C:釉 灰釉(2.5Y6/3にぶい黄色釉)、銅緑釉 胎土2.5Y8/3淡黄色	
197	陶器	皿	SX5	①(11.0) ②3.9 ④(4.35)	残存部全面に施釉、見込み蛇の目釉剥ぎ 畳付は釉剥ぎ	A:精良 B:良好 C:釉 銅緑釉(5Y5/3灰オリーブ色釉) 露胎5YR3/4暗赤褐色 胎土5Y6/2灰オリーブ色	肥前
198	陶器	溝縁皿	SX5	②<1.9>	口縁部内外面施釉、外面口縁部下位無釉口縁部内面に溝あり	A:精良 B:良好 C:釉 5Y5/2灰オリーブ色 露胎2.5Y5/2暗灰黄色 胎土2.5Y6/1灰黄色	
199	陶器	皿	SX5	②<1.4>	口縁部内外面灰釉、口縁端部に透明釉を施す 波状口縁	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 灰釉(5Y7/2灰白色釉) 胎土5Y5/1灰色	
200	陶器	皿	SX5	②<1.9> ④5.1	残存部全面に施釉、畳付は釉剥ぎ 見込み砂目跡 高台内兜巾状	A:微細な黒色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 灰釉(2.5Y7/2灰黄色釉) 胎土2.5Y7/2灰黄色	肥前(17c)
201	陶器	皿	SX5	②<2.5> ④(6.3)	残存部内外面施釉、畳付は釉剥ぎ 見込み蛇の目釉剥ぎ	A:精良 B:良好 C:釉 10YR7/4にぶい黄褐色 露胎7.5YR6/6褐色 胎土7.5YR8/3浅黄褐色	
202	陶器	大皿	SX5	②<3.5> ④(14.4)	残存部全面施釉、白化粧、畳付は釉剥ぎ 高台脇型打ち成形による	A:微細な黒色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 2.5Y8/2灰白色 胎土5YR7/4にぶい褐色	
203	陶器	大皿	SX5	②<3.8> ④(12.4)	内面施釉 他は露胎 体部外面回転ヘラ削り後ナデ 削り出し高台 見込み白化粧土による波状刷毛目、砂目跡	A:8mm程の淡黄褐色の粒子が混ざる B:良好 C:釉 5YR6/1褐灰色 露胎2.5YR5/6明赤褐色	肥前(17c後半～18c後半)
204	陶器	大皿	SX5	②<4.6> ④(13.6)	内外面施釉 見込み蛇の目釉剥ぎ、砂目あり 高台～高台内は露胎 高台部ヘラ削り	A:精良 B:良好 C:釉 7.5YR3/3暗褐色、2.5Y4/3オリーブ褐色 露胎2.5YR5/2灰赤色	肥前(17c後半)
205	陶器	大皿	SX5	②<7.0> ④(13.6)	内面施釉 見込み白化粧土による刷毛目、蛇の目釉剥ぎ後鉄漿を塗る? 外面露胎 高台畳付目跡あり	A:2mm以下の白色粒子を少し含む B:良好 C:釉 透明釉 露胎2.5YR4/3にぶい赤褐色	肥前(17c後半)
206	陶器	播鉢	SX5	②<6.15>	鉄釉を全面に施す 内面は描目	A:3mm以下の白色粒子を多く含む B:良好 C:釉 2.5YR4/4にぶい赤褐色～5YR2/1黒褐色 胎土5YR5/1褐灰色	注口部一部残存
207	陶器	播鉢	SX5	②<5.56>	内外面施釉 内面描目	A:4mm以下の白色粒子を多く含む B:良好 C:釉 2.5Y5/4にぶい赤褐色 胎土5YR6/6褐色	
208	陶器	鉢	SX5	①(28.3) ②20.55 ③17.4	体部内面～脚部外面施釉、口縁部内面釉垂れ 底部内面重ね焼きによる砂付着	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 2.5YR3/4暗赤褐色に2.5Y7/4浅黄色釉を流し掛ける 露胎7.5YR6/1褐灰色～5YR5/4にぶい赤褐色	重ね焼き痕跡
209	陶器	蓋	SX5	②<2.1>	残存部全面鉄釉を施す 外面鉄釉後灰釉を流し掛ける	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 7.5YR3/3暗褐色、2.5Y6/3にぶい黄色 胎土10YR5/1褐灰色	
210	陶器	瓶	SX5	②<4.0>	外面・頸部内面鉄釉後に灰釉を流し掛ける	A:微細な白色粒子を少し含む B:良好 C:釉 7.5YR3/3暗褐色、2.5Y7/3浅黄色釉 露胎5YR3/6暗赤褐色 胎土7.5YR6/4にぶい褐色	茶筌形の器形
211	陶器	瓶	SX5	②<8.85> ③9.15	外面体部～底部付近まで鉄釉、灰白色釉を施す 内面釉垂れ以外は無釉	A:精良 B:良好 C:釉 7.5YR3/3暗褐色、灰白色釉 露胎7.5YR7/4にぶい褐色 胎土5YR6/4にぶい褐色	
212	陶器	壺	SX5	②<5.0>	口縁部内外面施釉 外面叩きの痕跡残る	A:3mm以下の白色粒子を多く含む B:良好 C:釉 7.5R3/2暗赤褐色 胎土5YR5/6暗赤褐色	
213	磁器	青磁椀	SX5	②<3.5>	口縁部内外面施釉 口縁下で胴部が屈曲する	A:精良 B:良好 C:釉 青磁釉(5Y5/2灰オリーブ色釉) 胎土5Y7/1灰白色	肥前?
214	磁器	染付椀	SX5	②<3.6>	残存部全面に施釉 外面に草花文 口縁部やや反る 腰がやや張り丸みを帯びた器形	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	肥前?
215	磁器	染付青磁椀	SX5	②<3.2>	外面青磁釉 内面染付 口縁部内面に四方椿文(少し簡略化?)	A:精良 B:良好 C:釉 外面青磁釉 内面透明釉 胎土灰白色	
216	磁器	染付青磁椀	SX5	①(11.0) ②5.1	外面青磁釉 内面染付 口縁部内面四方椿文が崩れてやや滲んだ様になっている	A:精良 B:良好 C:釉 外面青磁釉(7.5Y8/1明緑灰色釉) 内面 透明釉 胎土2.5Y8/1灰白色	肥前(18c前)
217	磁器	椀	SX5	②<4.3> ④(3.7)	残存部全面施釉 畳付は釉剥ぎ 外面圈線 見込みに圈線、船文?	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/2灰白色	陶胎染付
218	磁器	染付椀	SX5	①(10.4) ②<3.4>	残存部全面に施釉 外面草花文 口縁部内面連続文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	

表8 村下遺跡F地点出土遺物観察表⑦

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
219	磁器	染付椀	SX5	① (10.1) ② <3.8>	内外面施釉 内面口縁部下に圈線 外面草花文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
220	磁器	染付椀	SX5	② <3.95>	残存部全面に施釉、畳付は釉剥ぎ 外面網目文 見込み圈線、五弁花文 高台内溝「福」銘	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	肥前 (17～18c)
221	磁器	椀	SX5	① (8.6) ②4.7 ④ (3.8)	外面施釉 内面・高台内は釉がかかっていない状態? 見込みに圈線、五弁花文	A:精良 B:良好 C:釉 外面透明釉を薄く施す 胎土10YR8/2灰白色	簡略化した五弁花文 コンニャク印判
222	磁器	染付椀	SX5	② <5.2> ④ (5.0)	残存部全面に施釉 畳付は釉剥ぎ 外面網目文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	肥前 (17c 後～18c 前)
223	磁器	染付椀	SX5	② <1.25> ④3.7	残存部全面に施釉、畳付は釉剥ぎ 見込み篇文 外面植物文が一部残存	A:精良 B:良好 C:釉 やや青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
224	磁器	染付椀	SX5	① (11.2) ②5.65 ④ (4.2)	残存部全面に施釉 畳付は釉剥ぎ 外面圈線、松文 見込み圈線、虫文?	A:精良 B:良好 C:釉 やや青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土灰白色	
225	磁器	椀	SX5	① (6.8) ②5.4 ④ (3.5)	全面に施釉、畳付は釉剥ぎ 外面格子文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土10YR8/2灰白色	小丸椀 肥前 (18c 前～中)
226	磁器	染付椀	SX5	② <3.4> ④ (3.9)	残存部全面施釉、畳付は釉剥ぎ 高台内脇に染付で圈線	A:微細な黒色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	陶胎染付 肥前
227	磁器	椀	SX5	② <5.1> ④3.8	残存部全面施釉、畳付は釉剥ぎ 腰の張った丸椀	A:微細な黒色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 5Y8/1灰白色 胎土N8/灰白色	丸椀
228	磁器	染付椀	SX5	② <5.35> ④ (3.2)	残存部全面に施釉 畳付は釉剥ぎ 外面草花文 (濃み) 見込み樹木文を染付で描く	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
229	磁器	椀	SX5	② <5.2> ④3.9	全面施釉 畳付は釉剥ぎ 外面草花文 見込みに圈線、「壽」の銘	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土10YR7/3にぶい黄橙色	陶胎染付
230	磁器	椀	SX5	② <4.0> ④ (7.4)	残存部全面に施釉、畳付は釉剥ぎ・砂目あり	A:精良 B:良好 C:釉 やや緑味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土7.5Y8/1灰白色	筒形椀
231	磁器	染付椀	SX5	① (11.3) ② (1.7)	口縁部内外面施釉 内面染付一部残存 玉縁状口縁	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
232	磁器	染付椀	SX5	② <3.9> ④ (6.0)	残存部全面に施釉 畳付は釉剥ぎ 内外面圈線	A:精良 B:良好 C:釉 やや青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	広東椀 肥前(18c 末～19c 中)
233	磁器	小杯	SX5	① (6.5) ②3.2 ④2.7	残存部全面に施釉、畳付は釉剥ぎ 外面草花文 高台外に向く	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
234	磁器	皿	SX5	② <5.4>	残存部全面施釉 内面菊花文をヘラ彫り折縁口縁	A:精良 B:良好 C:釉 緑釉 (10GY8/1明緑灰色釉) 胎土5Y8/1灰白色	
235	磁器	染付皿	SX5	② <2.3>	口縁部内外面施釉 外面染付一部残存 型打ち成形 輪花状口縁	A:精良 B:良好 C:釉 やや青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
236	磁器	染付皿	SX5	② <2.3>	口縁部内外面施釉 外面唐草文 (濃み) 内面牡丹文 輪花状口縁	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土灰白色	
237	磁器	染付皿	SX5	② <2.2>	口縁部内外面施釉 外面唐草文 (濃み) 内面松文? 輪花状口縁	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土灰白色	
238	磁器	染付皿	SX5	① (22.0) ②4.0	残存部全面施釉 畳付は釉剥ぎ 外面圈線 見込みに草花文 口縁端部端反り	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
239	磁器	青磁小皿	SX5	① (10.4) ②1.79 ④ (7.0)	内外面青磁釉を施し、口縁部内面に褐釉が掛かる 蛇の目凹形高台	A:精良 B:良好 C:釉 青磁釉か? (7.5GY8/1明緑灰色釉) 胎土灰白色	肥前 (18c～19c 中)
240	磁器	皿	SX5	② <3.4> ④6.9	内外面施釉、見込み蛇の目軸剥ぎ、花卉文 蛇の目凹形高台、高台内中央部兜巾状	A:精良 B:良好 C:釉 2.5Y8/1灰白色 露胎 10YR8/1灰白色 胎土5Y8/1灰白色	肥前 (18c～19c 中)
241	磁器	染付鉢	SX5	① (16.6) ② <5.3>	残存部全面施釉 口縁部内面圈線、菱形に唐草文? が巡る 受け口状の折縁口縁	A:精良 B:良好 C:釉 やや青味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土灰白色	肥前 (17c 後半)
242	磁器	染付鉢	SX5	① (20.0) ②5.3	口縁部内外面施釉 外面唐草文? 口縁部内面花・斜線文が巡る 輪花状口縁	A:精良 B:良好 C:釉 やや緑味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土灰白色	肥前 (17c 後半)
243	磁器	染付仏飯器	SX5	① (7.2) ②6.6 脚部径4.0	杯部内外面・脚部外面施釉 外面半菊花文 上下互い違いで連続して巡る	A:精良 B:良好 C:釉 やや緑味を帯びた透明釉を施す 胎土灰白色	肥前 (17c 末～19c 中頃)
244	磁器	瓶	SX5	② <8.6> 頸部径3.6 ⑤ (7.0)	残存部外面施釉 内面半分程釉が掛かる 残りは露胎	A:精良 B:良好 C:釉 2.5Y7/2灰黄色 露胎 2.5Y8/2灰白色 胎土2.5Y8/1灰白色	
245	磁器	水注 (注口部)	SX5	② <5.2>	注口部外面施釉 内面露胎、回転ナデ	A:精良 B:良好 C:釉 7.5GY8/1明緑灰色釉 胎土5Y8/1灰白色	
246	瓦転用品	紡錘車	SX5	長径5.6 短径4.8 厚1.5 孔径0.9～1.5	凹凸丁寧なナデ、両面から穿孔 燻し仕上げ 凹面穿孔部に方形の線刻あり	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:凸面2.5Y4/1黄灰色 凹面N4/灰色	
247	瓦	軒丸瓦	SX5	瓦当径 (14.0) 瓦当厚1.9 残存長6.05 最大厚1.6	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面端部に抜き取り縄痕、紐痕後タテ方向のナデ 燻し仕上げ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:凹凸面N5/灰色～N3/暗灰色	三つ巴文・左巻
248	瓦	軒丸瓦	SX5	瓦当径14.6 瓦当厚1.7 残存長11.4 厚1.8	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面布目の上からタテ方向ヘラナデ、短沈線状の工具痕	A:5mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:凹凸面10YR6/1褐灰色～10YR3/1黒褐色	三つ巴文・左巻
249	瓦	軒丸瓦	SX5	瓦当径 (12.8) 瓦当厚1.8 残存長24.1 厚1.8	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面布目痕、タテ方向掻き取り痕 燻し仕上げ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:凸面10YR2/1黒色 凹面10YR3/1黒褐色	釘孔あり (2ヶ所)
250	瓦	軒丸瓦	SX5	瓦当径14.2 瓦当厚1.4 残存長10.6 最大厚2.1	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面布目痕、ヨコ方向抜き取り縄痕、紐痕、タテ方向掻き取り痕	A:5mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:良好 C:凹凸面10YR4/1褐灰色～10YR3/1黒褐色	三つ巴文・左巻 釘孔あり
251	瓦	軒丸瓦	SX5	瓦当径 (15.0) 瓦当厚1.8	瓦当面内面ナデ 燻し仕上げ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:凹凸面10YR4/1褐灰色	三つ巴文・右巻
252	瓦	軒丸瓦	SX5	瓦当径14.8 瓦当厚1.8 残存長14.8 厚2.1	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面ヨコ方向に細い沈線状の工具痕 燻し仕上げ	A:4mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:良好 C:凹凸面10YR2/1黒色	三つ巴文・左巻 釘孔あり
253	瓦	丸瓦	SX5	残存長25.3 最大幅9.7 最大厚2.0	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面タテ方向の掻き取り痕、布目痕の後ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:凸面2.5Y3/1黒褐色 凹面2.5Y3/1黒褐色	
254	瓦	丸瓦	SX5	残存長14.4 最大幅8.3 最大厚2.2	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面布目痕	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:凸面N4/灰色 凹面2.5Y4/1黄灰色～N3/暗灰色	
255	瓦	丸瓦	SX5	残存長17.1 最大幅7.2 最大厚2.6	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面布目痕、タテ方向掻き取り痕 燻し仕上げ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:凹凸面N5/灰色	釘孔あり (2ヶ所)
256	瓦	丸瓦	SX5	残存長16.0 最大幅10.5 最大厚2.1	凸面タテ方向ヘラナデ 凹面ヨコ方向抜き取り縄痕、布目痕、タテ方向細い掻き取り痕 燻し仕上げ	A:1mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:凹凸面10YR5/2灰黄褐色～10YR2/1黒色	

表9 村下遺跡F地点出土遺物観察表⑧

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
257	瓦	平瓦	SX5	残存長7.45 残存幅10.4 最大厚2.0	凹凸面ナデ仕上げ	A:1mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:凹凸面N3/暗灰色	
258	瓦質土器	火鉢	SX6	②<5.0>	外面ハケメ跡 口縁部外面～内面回転ナデ底面脚部が剥離した跡?	A:微細な白色砂粒、金雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/4にぶい橙色 外7.5YR5/2灰褐色	外面瓦質焼成により黒色化する
259	陶器	鉢	SX6	②<2.4>	口縁部内外面褐釉を薄く施す 玉縁状口縁	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉2.5YR4/3にぶい赤褐色 胎土7.5YR6/1褐色	
260	瓦	平瓦	SX6	残存長5.9 残存幅5.9 最大厚1.7	凸面ナデ仕上げ、叩き痕跡?	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を多く含む B:やや不良 C:凹凸面5YR6/6橙色～10YR7/3にぶい黄褐色	
261	陶器	蓋	SX7	②<0.9> 受部径(9.8)	外面鉄絵、銅緑釉を施す 内面露胎 受部・つまみ部欠損する	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉2.5Y8/3淡黄色、銅緑釉 胎土5YR6/3にぶい橙色	
262	磁器	染付椀	SX7	②<2.0>	口縁部内外面施釉 外面染付一部残存する	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
263	磁器	椀	SX8	①(9.3) ②<3.3>	残存部全面に施釉 胴部で屈曲する器形	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉2.5Y7/4浅黄色 胎土10YR7/2にぶい黄褐色	
264	磁器	染付椀	SX8	①(10.0) ②<3.0>	残存部全面に施釉 外面丸文内に施文一部残る	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y7/1灰白色	
265	磁器	色絵皿	SX8	②<1.6>	残存部全面に施釉 内面色絵一部残存する	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
266	磁器	染付角皿	SX8	②<1.6>	残存部全面に施釉 内面四方禪文の中に『田』の字 型打ち成形	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	肥前(18c以降)
267	瓦	棧瓦	SX8	残存長3.85 残存幅3.2 最大厚1.45	凸面叩き 凹面布目痕	A:長石、石英を含む B:良好 C:凸面N5/灰色 凹面N4/灰色	
268	瓦	棧瓦	SX8	残存長10.0 残存幅8.6 最大厚1.8	凹凸面ナデ仕上げ 凹面横方向細い沈線状の痕跡あり 側端部は切り離しの跡が残る	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:凸面N4/灰色 凹面N3/暗灰色	
269	瓦質土器	湯釜(把手)	SX9	②<4.5>	把手部外面ナデ、穿孔 内面指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内2.5Y4/1黄灰色 外2.5Y5/1黄灰色	
270	瓦質土器	火鉢	SX9	②<5.7>	口縁部外面菊花スタンプ文 内面ハケメ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外2.5Y7/1灰白色～N5/灰色	
271	陶器	椀	SX9	②<2.5> ④(4.6)	内外面施釉・白化粧土刷毛塗り 高台・高台内露胎 見込みに銘『福』か 外面鉄絵で木賊文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土10YR7/3にぶい黄褐色	
272	陶器	小杯	SX9	①(6.4) ②<3.5>	残存部全面に施釉 外面雁文?	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土7.5YR6/3にぶい褐色	
273	陶器	鉢	SX9	①(17.5) ②<2.5>	口縁を除く下半部内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y8/2灰白色 露胎7.5YR7/6褐色 胎土10YR8/3浅黄褐色	肥前(17c前半)
274	陶器	播鉢	SX9	②<2.2>	残存部全面施釉 底部糸切り 底部内面播目	A:精良 B:良好 C:釉5YR4/3にぶい赤褐色 胎土2.5YR4/1赤灰色	
275	陶器	注口部	SX9	②<4.9>	注口部外面施釉 体部内面鉄釉を薄く施す、回転ナデ	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉7.5YR4/3褐色 胎土2.5YR6/6褐色	
276	磁器	色絵椀	SX9	①(12.4) ②<6.6>	内外面施釉、口縁部釉剥ぎ 外面色絵で動物・花文、胴部中位櫛歯文が巡る	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	筒形椀
277	磁器	染付椀	SX9	①(11.7) ②<3.5>	残存部全面施釉 外面染付で円弧を描く	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5YR7/1灰白色	
278	磁器	小杯	SX9	②<2.3> ④(3.4)	残存部全面に施釉、疊付は釉剥ぎ 高台部砂目跡 高台内わずかに兜巾状になる	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y8/1灰白色 胎土10YR8/1灰白色	
279	磁器	染付小杯	SX9	②<2.45> ④(3.0)	残存部全面に施釉、疊付は釉剥ぎ 外面草文 内面重ね焼きの溶着痕あり	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
280	磁器	白磁皿	SX9	①(12.8) ②<2.9>	残存部全面に施釉 型打ち成形	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y8/1明緑灰色 胎土2.5Y8/1灰白色	
281	磁器	染付瓶	SX9	②<3.4> ④(5.4)	外面施釉 疊付は釉剥ぎ 内面無釉 外面緑描き・濃みで山水風景を描画	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土5Y8/1灰白色	
282	土師器	小皿	SX10	①(10.4) ②1.55 ③(8.3)	底部外面ナデ・内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/3浅黄褐色 外10YR7/3にぶい黄褐色	
283	陶器	鉢	P1	②<2.5>	口縁部内外面無釉 外面線刻で施文後鉄絵?鉄釉を施す 内面は灰釉が掛かる	A:精良 B:良好 C:釉 鉄釉(5YR2/1黒色釉)、灰釉(7.5Y6/1灰色釉) 胎土5YR2/3極暗赤褐色	
284	磁器	染付椀	P1	②<5.3>	残存部全面に施釉 外面施文梅に鶯(一部残存か)?	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土灰白色	筒形椀
285	弥生土器	鉢	P5	②<6.45>	外面ハケメ、ナデ 内面指オサエ、ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む B:良好 C:内7.5YR6/4にぶい橙色 外7.5Y7/2明褐色	
286	土製品	馬(頭部)	P5	残存長6.6 最大厚1.6	扁平な形状を呈す ナデによる仕上げ	A:微細な白色粒子、黒色粒をわずかに含む B:良好 C:10YR8/3浅黄褐色	体部は欠損する
287	鉄滓		P5	最大長2.75 最大幅2.1 最大厚1.5 重11.3			磁性弱
288	磁器	染付皿	P7	②<1.2>	残存部全面施釉 口縁部内面四方禪文 外面籠・草花を描く	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土灰白色	肥前(18c前半～)
289	瓦質土器	捏鉢	P8	②<2.7>	注口部外面ナデ 内面ハケメ、ナデ	A:1mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR4/1褐色	注口部破片
290	瓦質土器	鍋	P15	②<4.5>	口縁部～体部上位外面ナデ 内面ハケメ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR7/2にぶい黄褐色 外10YR4/1褐色	
291	磁器	皿	P15	②<1.9>	口縁部内外面施釉 口縁波状になる?一部残存	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土灰白色	
292	陶器	皿	P16	②<1.1>	口縁部内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土10YR6/1褐色	
293	土製品	不明	P17	残存長3.1 最大幅1.1 最大厚0.9	ナデで仕上げる	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:10YR8/3浅黄褐色	

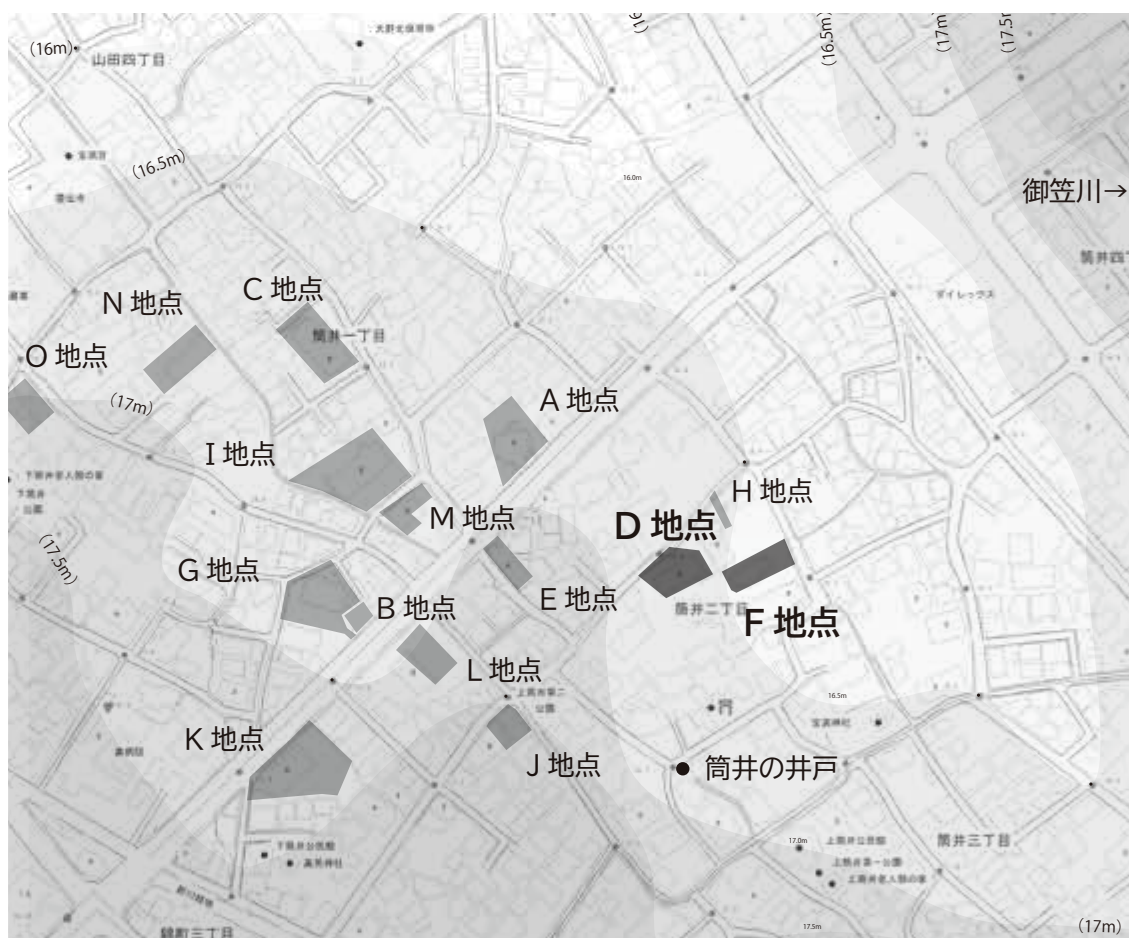
表10 村下遺跡F地点出土遺物観察表⑨

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
294	須恵器	杯蓋	P20	②<0.6>	内外面回転ナデ	A:1mm以下の砂粒を少し含む B:良好 C:内N6/灰白色 外2.5Y7/1灰白色～2.5Y6/1黄灰色	
295	陶器	小杯?	P20	②<3.35>	口縁部内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/3淡黄色	
296	瓦質土器	鉢	P20	②<3.8>	口縁部外面ナデ、指オサエ 内面ハケメ	A:2mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む B:やや良 C:内10YR7/1にぶい黄橙色 外5YR8/3淡黄色	
297	磁器	染付椀	P34	①<10.8> ②<2.65>	残存部全面施釉 外面染付文様一部残る	A:微細な黒色粒子をわずかに含む B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土7.5YR8/1灰白色	
298	瓦質土器	鉢?	P34	②<2.9>	口縁端部・内面ハケメ 外面ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR8/2灰白色 外10YR7/1灰白色	
299	焼成粘土塊	—	P37	残存長3.9 残存幅4.8 最大厚2.4 重28.8		A:微細な白色砂粒、長石、雲母、スサを含む B:やや軟質 C:7.5YR7/3にぶい橙色～7.5YR6/6橙色	表面にスサの跡が残る
300	瓦質土器	火舎あるいは火鉢	P38	②<4.55>	外面研磨され平滑になる 内面ハケ状工具でナデた後研磨 接合部刻み(脚部接合痕?)	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR5/1褐灰色 外2.5Y5/1黄灰色	口縁部内外面煤付着
301	土師質土器	風炉?	P39	②<3.1>	口縁部外面ナデ、一部ミガキ? 内面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR6/2灰黄褐色 外7.5YR7/4にぶい橙色	内面に薄く煤付着
302	土師質製品	七輪(サナ)	P39	残存長3.5 残存幅2.45 厚さ1.25 推定孔径(1.9)	上面ハケメ 下面ナデ	A:微細な白色砂粒、黒色粒を含む B:良好 C:5YR6/6橙色～5YR4/1褐灰色	上面被熱
303	瓦質土器	鉢	P43	②<3.5>	口縁部外面ナデ、指オサエ 内面ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2灰白色～10YR5/1褐灰色	
304	瓦質土器	播鉢	P43	②<3.55>	外面わずかに斜め方向のハケメ残る、ナデ、指オサエ 内面ハケメ、播目	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外2.5Y7/2灰黄色	内面播目・ハケメ使用の為かなりすり減る
305	陶器	皿	P46	②<0.85>	口縁部内外面施釉 口縁端部釉を剥ぐ?	A:精良 B:良好 C:釉5Y6/2灰オリープ色 胎土10YR6/2灰黄色	
306	瓦質土器	捏鉢	P50	②<11.9>	外面ナデ仕上げ 内面ハケメ、指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3浅黄橙色～10YR8/8黄橙色	
307-1	鉄製品	包丁(基部)	P50	残存長8.35 残存幅4.7 最大厚0.95 重58.5	メタル残存 峰の部分は屈曲する		わずかに基部が残存 刃部は欠損する
307-2	鉄製品	包丁(柄)	P50	残存長3.4 残存幅1.4 最大厚1.4 重5.4	メタル残存		No.307-1と同一個体の可能性
308	磁器	染付椀	P55	②<1.4>	残存部全面施釉 口縁部外面2条・内面1条の圏線 外面植物?の施文あり	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
309	瓦質土器	火鉢	P58	②<2.9>	底部外面ナデ 脚部接合痕(刻目残る)	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N4/灰色 外N5/灰色	
310	土師質土器	七輪	P58	②<11.5> ③<22.8>	外面回転ナデ 内面ハケメ、貼付け突帯 底部はアーチ型に刻り込まれる 窓部は一部残存	A:6mm程の長石、微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/3浅黄橙色 外10YR8/4浅黄橙色	窓部に一部煤付着
311	瓦	平瓦	P58	残存長6.7 残存幅6.4 最大厚1.8	凹凸面ヘラナデ 凹面に鉄線の跡が残る 燻し仕上げ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:凹凸N3/暗灰色～5Y5/1灰色	
312	磁器	染付椀	P61	②<3.4>	残存部全面に施釉 外面円圏文	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土2.5Y8/1灰白色	
313	磁器	青磁碗	P66	②<2.3>	口縁部内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉10Y6/2オリープ灰色 胎土2.5Y8/1灰白色	
314	陶器	皿	P68	②<2.05> ④6.2	残存部内外面施釉 内面蛇の目釉剥ぎ 疊付は釉剥ぎ	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y8/1灰白色 胎土10YR8/3浅黄橙色	肥前
315	磁器	染付椀	P68	①<11.8> ②<3.7>	残存部全面に施釉・貫入が入る 口縁部内外面・見込みに染付の圏線	A:陶器質 B:良好 C:釉 淡く緑味を帯びた透明釉を薄く施す 胎土10YR7/3にぶい黄橙色	陶胎染付
316	土製品	土鈴	P74	残存高2.8 最大径(3.0)	内外面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:内外10YR3/2黒褐色	鈴口一部残存
317	土師器	小皿	P77	②<1.05> ③5.0	底部外面糸切り 他はナデ	A:2mm以下の白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:内外10YR7/3にぶい黄橙色	
318	瓦質土器	火鉢	P77	②<2.45>	口縁部内外面回転ナデ 口縁下内面ハケメ	A:微細な白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:内N4/灰色 外7.5Y6/1褐灰色	外面スタンプ文の痕跡?
319	土師質製品	七輪(サナ)	P77	残存長6.0 残存幅3.2 厚1.45 推定孔径(2.2)	上下両面ナデ 側面ヨコナデ	A:1mm以下の白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:2.5YR6/6橙色	上面被熱
320	鉄製品	釘	P77	残存長3.1 最大幅1.3 最大厚0.8 重3.7			
321	土師器	皿	P102	②<0.85>	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:内外10YR7/4にぶい黄橙色	
322	磁器	小杯	P104	②<2.6>	口縁部内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉 透明釉を薄く施す 胎土N8/灰白色	
323	瓦	平瓦	P105	残存長6.9 残存幅8.65 最大厚2.0	凹凸面横方向ヘラナデ 全面燻し	A:3mm以下の長石を含む B:良好 C:凹凸N3/暗灰色	

IV. まとめ

(1) 村下遺跡における弥生時代の様相

村下遺跡D地点、F地点では弥生時代の遺構が確認された。村下遺跡ではこれまでの調査によって弥生時代中期以降生活の痕跡が複数の調査地点で把握されている。そこで、遺跡周辺の微地形もふまえ遺跡内での弥生時代の集落の様子を簡単に整理しておく。まず、現地表面の標高を参考に地形の微妙な起伏を復元的に示したのが第35図である。現状の標高のわかる地点を目安にしたもので、精確なものでは決していないが、およその地形の起伏は見て取れるため、遺跡の形成過程を考えるうえである程度は参考にできるであろう。そこで、弥生時代の遺構などが確認されている調査地点をみてゆくと、D地点の北西に位置するA地点から弥生時代前期末から中期初頭頃の土坑や中期の円形プランの住居跡が確認されている。またこのA地点では後期の方形プランの住居跡も調査されている。そのほかにもI地点やE地点、I地点などD地点の西側で北東方向に舌状にのびる微高地とその周辺を中心に中期から後期の生活の痕跡が確認される。また、後期には、より遺跡の北西部に位置するC地点などでも土坑や溝などが確認されている。一方、F地点では、弥生時代中期初頭前後の溝



第 35 図 村下遺跡の各調査地点と周辺の微地形 (S=4, 000)

と貯蔵穴が確認されたが、D地点やA地点など中期の居住施設の形成された場所より若干低く、北西から南東方向に形成された谷状の低いところへと向かうゆるやかな傾斜地に位置する。現状で集落の全体像を明らかにするのは難しいが、御笠川との間に現在みられる小谷状の微地形を挟む微高地上を中心に弥生時代の集落が形成されていたものと考えることができるであろう。

また、弥生時代の出土遺物の中で特記されることとしては、わずかに1点ではあるが、村下遺跡F地点で擬朝鮮系無文土器の口縁部片が確認されたことであろう。前期末から中期初頭頃の所産であろうが、口縁部が断面三角形を呈し、上面を強くなでるものの、三角形を呈する口縁部下縁と胴部外面との接合部はナデなどほとんどなされず、粘土接合痕が明瞭に認められる。このような特徴はすでに指摘のあるように（中園1993）、半島の無文土器の口縁部粘土帯下縁部に認められる特徴と同様のものである。このような形態的特徴から、半島における無文土器の製作技法を習得した人物が、弥生土器に類する土器を製作した結果生まれた折衷土器の可能性が高いものと推定される。

村下遺跡の周辺で半島系無文土器がまとまって出土した遺跡としては諸岡遺跡が著名である。また、九州北部域では半島由来の土器や在地土器との折衷現象の様相についてこれまでも研究の蓄積がある。大野城市内では朝鮮系無文土器、擬朝鮮系無文土器ともにこれまでは確認されていなかった。今後、市内遺跡においても類例が増加し、半島由来の土器作りの技術伝統がどのような形で在来の土器作りの文化と接触したのかより明らかになることが期待される。

（2）村下遺跡F地点出土の近世陶磁器と集落

村下遺跡F地点の調査では近世陶磁器が多く出土した。村下遺跡のこれまでの調査では近世期の遺物や遺構はそれほど多くは確認されておらず、本遺跡における近世村落の展開を考えるうえで貴重な成果といえる。村下遺跡の位置する筒井は中世までは山田村に含まれていたが、近世初頭以降みられる山田村、筒井村、中村のうちの筒井村に相当する。近隣の遺跡の調査成果をみると、中世から17世紀後半ごろまで集落が形成される御笠の森遺跡があるが、村下遺跡F地点出土遺物をみると、中世にさかのぼる遺物も散見されるが、17世紀後半から18世紀頃にかけての遺物が多い印象を受ける。つまり、御笠の森遺跡よりもやや遅い時期の遺物が主体を占めると考えられる。村下遺跡F地点の様相からは、17世紀以降に集落の形成が本格化しているものと考えることができる。ただ、F地点では性格のはっきりしない土坑状の遺構やプランの不明瞭な落ち込み状の遺構から出土した遺物がほとんどで、集落域はF地点の南西側に広がる微高地上に展開していたのであろうと推測される。今後の周辺の調査・報告によって、近世村落の様相がより具体的に把握されることを期待したい。

文献

中園聡1993「折衷土器の製作者：韓国靑島遺跡における弥生土器と無文土器の折衷を事例として」『史淵』130：1－29.

山村信榮1990「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究VI』, pp. 81－91.

図 版

(1) 村下遺跡 D 地点
調査区全景（北西より）



(2) 調査区全景：SC01 周辺
（南西より）



(3) SC01（北西より）



図版2



(1) SC02 (西より)



(3) SC01 炉断面



(2) SC03 (西より)



(4) SC03 遺物出土状況



5



8



6

(5) 村下遺跡 D 地点出土遺物



(1) 村下遺跡 F 地点Ⅰ区全景（東より）



(4) 村下遺跡 F 地点Ⅱ区東部（西より）



(2) 村下遺跡 F 地点Ⅱ区西部（東より）



(5) 1号貯蔵穴土層（南西より）



(3) 村下遺跡 F 地点Ⅱ区中央部（北より）



(6) 1号貯蔵穴完掘状況（南東より）



(7) SK01（北西より）

図版4



(1) SD01 A-B 区間土層 (西より)



(3) SD01 D-E 区間土層 (西より)



(2) SD01 C-D 区間土層 (西より)



(4) SD01 F 区土層 (西より)



11



14



18



31

(5) 村下遺跡 F 地点出土遺物1



35



45



37



54



38



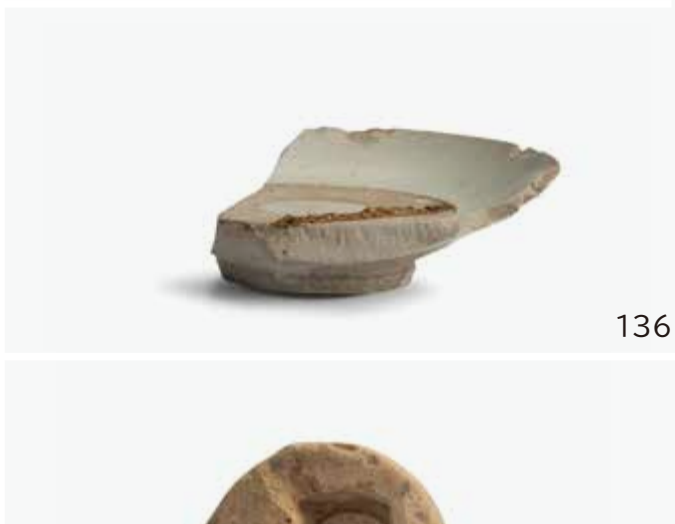
70



43



81





140



186



166



187



167



205



182



206



報告書抄録

ふりがな	むらした いせき 9								
書名	村下遺跡 9								
副書名	D地点・F地点の調査								
巻次	9								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 225 集								
編著者名	石川 健								
編集機関	大野城市								
所在地	〒 816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目 2 番 1 号 電話 092(501)2211								
発行年月日	2025 年 3 月 31 日								
ふりがな	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号	′ ″	′ ″			
むらした いせき 村下遺跡 D 地点	ふくおかけんおおのじょうしつつい 福岡県大野城市筒井 2 丁目 506-1				33° 32′ 19″	130° 28′ 49″	1995.4.10. ～ 5.17.	400 m ²	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
村下遺跡 D 地点	集落等	弥生時代	住居跡・ピット		弥生土器・石器		円形竪穴住居 1 棟、方形竪穴住居 2 棟が検出された。		
ふりがな	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号	′ ″	′ ″			
むらした いせき 村下遺跡 F 地点	ふくおかけんおおのじょうしつつい 福岡県大野城市筒井 2 丁目 553、534-1				33° 32′ 19″	130° 28′ 50″	2000.11.27. ～ 2001.1.31.	750 m ²	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
村下遺跡 F 地点	集落等	弥生時代・江戸時代	貯蔵穴・溝		弥生土器・陶磁器・瓦・石器		弥生時代の貯蔵穴や溝が検出され、中世後期から近世にかけての陶磁器が多数出土した。		
要約	村下遺跡 D 地点では弥生時代中期と後期の住居跡が計 3 棟検出された。村下遺跡では弥生時代中期の貯蔵穴と溝が確認され、D 地点と合わせて弥生時代中期の集落域を形成しているものと考えられる。 また、F 地点では、村下遺跡の既往調査では出土が限られていた近世期の陶磁器が性格不明の遺構から多量に出土した。なかでも肥前産と推定される陶磁器が多くを占めていた。村下遺跡の所在する筒井は、中世まで山田村に含まれていた。しかし、近世初頭以降、この山田村は山田村、中村、筒井村の三村として把握されるようになることが文献より知られている。村下遺跡 F 地点で今回出土した陶磁器は 17 世紀後半から 18 世紀を中心とする。この時期は山田村が 3 つの村として別々に把握されるようになって後の時期であることから、周辺域も含めた近世村落の展開や推移についての今後の調査・研究に寄与するものと期待される。								

大野城市文化財調査報告書第225集

村下遺跡 9

令和7年3月31日

発 行 大野城市
〒816-8510
福岡県大野城市曙町2-2-1

印 刷 株式会社コーユービジネス
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前3-13-1

